159
86
159-Ka86-37
1200500726984

ト工4A-32
159
KA86
3

加藤咄堂講述

修養大講座

言志四錄(二)省譽錄

第二卷

昭和図書

900
77

修養大講座　第二卷　目次

言志四錄(一)……一
言志後錄……三
一生の負擔(三)——自彊息まず(五)——實事實學(七)——內外の工夫(一〇)——自重せよ(一一)——聖人の態度(一三)——往事を追思せよ(一三)——心の靈光(一五)——人の言語(一七)——人我に負く時(一九)——敎化の方法(二二)——下僚に對する上長の心得(二四)——居官の好字面(二四)——急事と不急事(二五)——我れ自ら累す(二七)——百邪退聽(二八)——欲の公私(二九)——宇宙(三〇)——身と心(三二)——敬の義(三三)——義理と利害(三三)——達者の見(三四)——生死と晝夜(三六)——一思字(三八)——中の字(三九)——精神の收斂(四〇)——寸言數則(四一)——一の字、積の字(四五)——養生の法(四八)——下情通達(四九)——難事に處する道(五〇)——歷史を讀め(五二)——世界都て惻隱の心(五五)——身體と易理(五九)——自然に親め(六七)——大言者は小量(六九)——人生苦樂(七〇)——人生行路(七二)——性天體地(七二)——聖人遊觀(七五)——貴賤分あり(八一)——口頭の聖賢(八二)——三德の妙理(八四)——讀書と修養(八九)——人を以て得る者は脆し(九六)——心の安否(九九)——誠と敬(一〇一)——活道活學(一〇二)——人我一體(一〇三)——道心人心(一〇四)——當下を處理せよ(一〇七)——老人の心得(一〇八)——和と介(一一一)——不苟、不愧(一一一)——大學は是れ情の理會(一一四)——外見を衒ふ勿

れ(二二〇)——靜坐工夫(二二七)——懦ならず躁ならず(二二九)——讀書と作文(二三二)——儒教の靜坐(二三五)——本心呈露の標目(二三六)——無字の書(二三七)——讀書は心學(二四一)——人氣土氣(二四八)——子を教ふ(二五五)——乘除一理(二五六)——讀史小感(二五八)——五倫と師弟(二六四)——老人の誡(二六七)——一にして二なし(二七六)——急ぐから徐ろに(二八〇)——和漢の南北朝(二八四)——朱子の詩文(二八九)——言語と文章(二九〇)——古き人と物(二二〇)——讀書感(二二五)——老來の感想(二二六)——婦人の四十代(二二九)——志氣老少なし(二二〇)——孟子の三樂に就て(二二二)——日々の行事(二二四)——夢と心(二二九)——入學說(二三六)

言志晚錄(上)……二四三

爲學と爲政(二四四)——狂と狷(二四六)——胸次虛明(二四八)——沈靜と恢豁(二五〇)——我を認めよ(二五二)——一燈を賴め(二五四)——理は一なり(二五五)——克己復禮(二五七)——萬物一體、古今一體(二五九)——物我一體(二六二)——支那思想の變遷と太極圖說(二六四)——日本宋學の由來(二七六)——程明道と程伊川(二八二)——宇宙內事、己分內事(二八五)——講說の心得——四書の講說(二九〇)——三經の考察(二九二)——文に就て(二九五)——宇宙は一篇の好文辭(二九七)——無名是れ宗旨(二九九)——孔子の門人(三〇〇)——疑ひは進步の母(三〇二)——學は一生(三〇三)——清儒を評す(三〇四)——大人たれ(三〇五)——心學を評す(三〇七)——三教論を評す(三〇八)——人の長處を視よ(三一〇)——讀書靜坐(三一三)——震と艮の易理(三一六)——學術方に乖く(三一〇)——至靜を至動に認む(三二一)——中孚の象(三二二)

省譽錄

序說……三三七

一、佐久間象山の修養と抱負……三三七

二、本書の述作と著者の最後……三三一

本文……三三八

一、獄裏の練心……三三八

二、警世の時言……三三五

三、國防の感慨……三八三

言志四錄

(二)

言志後錄

これから言志四錄の中の、第二の言志後錄に移りますが、これは先生、五十七歳の時からで、專門の儒學に亙ることが多くて、一般修養に關しては、後の晩錄、耄錄の方が多いのでありますから、たゞ一二專門の事に關して詳說する外は、略說いたすことにいたします。

◎一生の負擔

此學吾人一生負擔。當斃而後已。道固無窮。堯舜之上。善無盡。孔子自志學。至七十。毎十年自覺其有所進。孜孜自彊。不知老之將至。假使其踰耄至期。則其神明不測。想當爲何如哉。凡學孔子者。宜以孔子之志爲志。文政戊子重錄

戊子重錄陽錄

此の學は吾人一生の負擔なり。當に斃れて後已むべし。道は固と窮り無く、堯舜の上にも、善盡くることと無し。孔子は志學より七十に至るまで、十年毎に自ら其の進む所有るを覺え、孜孜として自ら彊め、老の將に至らんとするを知らざりき。假し其れをして耄を踰え期に至らしめば則ち其の神明不測なること、想ふに當に何如なるべきぞ。凡そ孔子を學ぶ者は、宜しく孔子の志を以て志と爲すべし。文政戊子重錄す

こゝに學とあるのは孔子の學、卽ち儒教のことでありますが、更に廣く道德修養の學問または一切の學問に通じて考へてもよい言葉であります。卽ち學問といふものは人間一生の事業であつて、世の中にはよく學校を卒業したならば學問を卒業したやうに思ふ人がありますが、學校には卒業の期限があつても學問は卒業の期限はない筈であります。殊に道德修養に關する學問には決して停まる時はない筈であります。これは學問ばかりでなく、總ての藝事についても、藝は一生の修行であるといふことが謂はれるので、人間と生れた以上はこれを一つの荷物として、背負うて世を渡つてゆかねばならないのであります。斃れて後已む。で、死ぬまでは下ろすことの出來ない荷物であります。されば昔から聖人と云はれ、君子と云はれた人を見ると、堯舜の上にも、これで善は終ひであるといふものはなく、なほ〳〵その上にも善があるので、これを求めて進まねばなりませんから、大聖孔子の如きも、十五にして志を立てられまして、それから年々に自分の學問の進境を述べられてをります。『論語』の爲政篇に、

學問に卒業期なし

孔子の修行

三十にして立つ、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳に順ひ事を聽くにつれ會得することを得、七十にして心の欲するところに從つて矩を踰えず。

自分の思ふまゝにして、それがチヤンと規則通りに合つてゐるといふところまでゆかれたので、この孔子は七十四で亡くなられましたが、その間孜々として一生懸命に勵み努められて、自分の歳のよるのにも氣付かない程であつたのであります。若しこの孔子をして、耄を踰え期に至らしめ、耄は八十、九十。期は百で、八十、九十から百までも生きさして置いたならば、その人格や、その道德の進歩は到底人智の測り知ることの出來ないところにまで達せられたのであらうと思ひます。この孔子の流れを汲みその教へを學ぶものは卽ち我が儒學でありますから、これを學ぶものはよろしく孔子の志を自分の志とし、これを一生の仕事として學び、また行はなければならないのであります。前にも申しました通り、これはたゞ孔子の學を修める儒者のみではありません。總ての學問に於てもこの志がなければならないのですが、殊に孔子の學は道德修養の學であり、人の人たる道を行ふ學でありますから、これを生涯の事業としてゆくことを忘れてはならないのであります。

この註に文政戊子とありますが、これは文政十一年で、皇紀二千四百八十八年、一齋先生五十七歳の時であります。先生はその歳に於てなほ孜々として道を學ばんとせられたことが、これでも明かであります。

◎自彊息まず

自彊不レ息。天道也。君子所レ以也。如レ虞舜孳孳爲レ善。大禹思二日孜孜一。成湯苟日新。文王不二遑暇一。周公坐以待レ旦。孔子發レ憤忘レ食。皆是也。彼徒事二靜養瞑坐一而已。則與二此學脈一背馳。

自彊息まざるは天の道なり。君子の以ふる所なり。虞舜の孳孳として善を爲し、大禹の日に孜孜せんことを思ひ、成湯の苟に日に新にする、文王の遑暇あらざる、周公の坐して以て旦を待てる、孔子の憤を發して食を忘るるが如き、皆是れなり。彼の徒らに靜養瞑坐を事とするのみなるは、則ち此の學脈と背馳す。

自彊不息時候。心地光光明明。有二何妄念遊思一。有二何嬰累罣想一。

自彊不息の時候、心地光光明明なり。何の安念遊思有らん。何の嬰累罣想有らむ。

聖人君子の勉學

この二つは共に自彊不息といふことを言はれたので、『易經』の中に『天行は健なり、君子、以て自彊して息まず』といふのがあります。日月晝夜を熄まず、天の運行といふものは熄む時がないのであります。これが天の道であるから、この天の道の怠りなき如くに日夜勉強してやまないのが人格を向上してゆく聖人たり君子たるの道であります。されば聖人君子といはるゝ處舜は孳々—即ち一生懸命に善を行はんとして朝は雞が啼くと起きて終日怠りなかつたと云ひ（孟子盡心篇）。禹王は孜々と休まず勉強することを思つて日々に彊めて道を盡さうとせられた（書經益稷篇）。また湯王は日に日に新たにして、また新たなることを彊められ（大學）。文王は朝から晩まで殆ど食を攝る遑がなかつたほどに彊められ、（書經無逸篇）。周公はいろ〳〵の政治を執るのに善政を行はんとして夜をもつて日に次いで夜中にでも良い考へがあると夜の明けるのを待つて、これを實行に移されたといふことであります（孟子）。それから孔子は先に言ひましたやうに老の至るを忘れて彊められましたし、また憤を發して食を忘るゝと云はれてをるのであります。これらは、皆な古人の自彊不息の實例であります。彼の徒らに靜養瞑坐、靜かに身を養ひ、默つて坐つてゐることばかりを行つてゐる者は、この聖人の學脈に背くものであると個々に靜的修養のみを考へて、動的修養を考へない者を戒められたので、靜坐反對のやうに見えますが、一齋先生も常に靜坐の必要を說かれてをるので、たゞそれだけで何等自ら勵むところのない者を戒められたのであると見るべきであります。

次ぎの句は自らめ彊て息まざる時、自分の心は朗かであり、明かであります。即ち仕事を一生懸命にやつてゐる時には何等の邪心、うか〳〵とした考へが起つて來て、自分の心を煩はすやうなものは無く、

精だせば凍る間もなき水車

一生懸命に勉強してをれば心に鬱結するものはないといふ意味であります。

◎實事實學

孔子之學。自修己以敬。至於安百姓。只是實事實學。以四教文行忠信。所雅言詩書執禮。不必事耑誦讀而已也。故當時學者雖有敏鈍之異。各成其器。人皆可學。無能不能也。後世則此學墜在於藝一途。博物多識。一過成誦。藝也。詞藻縱横。千言立下。尤藝也。以其墜於藝也。故有能不能。而學問始與行儀離。人之言曰。某人學問有餘而行儀不足。某人行儀有餘而學問不足。孰有學問有餘而行儀不足者乎。可謂繆言矣。

孔子の學は、己を修めて以て敬するより、百姓を安んずるに至るまで、只だ是れ實事實學なり。四を以て教ふ、文行忠信。雅に言ふ所は、詩書執禮にて、必ずしも耑ら誦讀を事とするのみならざるなり。故に當時の學者は、敏鈍の異なる有りと雖も、各其の器を成せり。人は皆學ぶ可し。能と不能と無きなり。後世は則ち此の學墜ちて藝の一途に在り。博物にして多識、一過にして誦を成す、藝なり。詞藻縱横に、千言立どころに下る。尤も藝なり、其の藝に墜つるを以てや、故に能と不能と有り。而して學問始めて行儀と

離る。人の言に曰く、某の人は學問餘り有りて行儀足らず、某の人は行儀餘り有りて學問足らずと。孰れか學問餘り有りて行儀足らざる者有らんや。繆言と謂ひつ可し。

儒教の本領

これは儒教の本領を明かにせられたのであります。東洋の思想には、諸子百家と云つて、いろ〳〵な學問がありますが、その中心となつてゐるのは釋尊の佛教と、老子の道教と、孔子のこの儒教とであります。しかし佛教にしても、道教にしても、其の中に超世脫俗の氣分がありまして、直ちに實際に應用する點に於きましては儒教をもつて第一等とせなければならないのであります。その儒教の主とするところは己を修めて、これを敬するより始まつて、百姓を安んずるに至るのであります。そのことは『大學』に、

大學の道は明德を明にするにあり、民を親（新）にするにあり、至善に止るにあり。

とあります。明德を明かにするとは、天より受けた自分の心の誠を明かにしてゆく、これは自分の修養であります。此の自分の修養をもつて、更に民を新たにしてゆく他に對する方に用ひ、かくて其の理想とするところの至善に止まるに達し、こゝに明德を明かにし、民を新たにするの自他の道德が完成するのであります。

三綱領

この明德を明かに、民を新たにし、至善に止るのを『大學』の三綱領と申してをります。更に『大學』には詳しく八項目に分けて、

八條目

古の明德を天下に明にせんとする者は先づ其の國を治め、其の國を治めんと欲する者は先づ其の家を齊ふ。その家を齊へんと欲する者は先づ其の身を修む。其の身を修めんと欲する者は先づ其の心を正うす。心を正うせんと欲する者は先づ其の意を誠にする。其の意を誠にせんとする者は先づ其の知を致す。其の知を致すは物格るにあり。

とあります。物いたるといふのは、すべての事物に對して事物の道理を充分に發揮させるのであります。でありますから今度は逆に、

物格つて而して後知を致す。知を致して而して後意誠なり。意誠にして而して後心正し。心正うして而して後身修む。身修めて而して後家齊ふ。家齊うて而して後、國治まる。國治まつて而して後天下平かなり。

と云ひ、殊に之を結んで、

天子より庶民に至るまで一つに之れみな身を修むるをもつて本と爲す。

文行忠信

と、卽ち己を修めるを本として廣めて天下にまで及ぼすといふ實事實學であります。でありますから、その教へるところの要旨も至極簡單で、『論語』の『述而篇』で文、行、忠、信の四をもつて教への本とせられてをります。文とは書物を讀むこと、行とは實行すること、忠とは忠實に爲すこと、信とは信義を守ることと、これが中心であるのであります。さうして常に言はれてをるところに—雅の字は常の義—詩を誦し、書を學び、禮を行ふこと、それには『詩經』、『書經』、『禮記』等の書がありますが、旨とする所は專ら實行にありまして、必ずしもたゞ書物を誦し讀むことを主とするのではありません。それでありますから、當時卽ち孔子に隨いてをつた學徒の中には敏捷な方もあり、愚鈍な方もあつて、それ〴〵異つた所はありましたが、各々其の人相應の器量を成し遂げ、また如何なる人でもみな學べるので、これは我に出來て彼に出來ないといふことはなかつたのであります。

後世の學者

然るに後の世になりましては、この學問が墮落して、たゞ藝事の一方になつてしまつて博物多識、何でも彼でも知つてゐる者が學者だと思はれたり、一度讀んだことを直ちに暗誦の出來るといふやうな記憶の良い人が學者と云はれるやうになりましたが、これは藝でありまして、學ではありません。また詞藻縱橫、美しい言葉や巧みな文句を立どころに出して立派な詩文の出來る者を學者のやうに思ふ人もありますが、これも藝であつて學ではありません。そんな藝については出來る者と出來ない人が出來ますが、學問してその人格を養ふには何人も出來るの、出來ないのといふことはない筈であります。

然るに學問が全くその人格や道理を離れてしまつて、この人は學問は有り餘る人であるが、どうも品行は修まらんとか、あの人は品行は良いが、學問が足らんとかいふやうなことになつたので、孔子の學問は決してそんなものではないのであります。この學は道德の學問であり、實踐の學問である。それでありますから學問が餘つて品行が惡いとか、品行は良いが學問が足らんといふやうなものではない。知行合一で、知と行が一つになつてゆかなければならない。それを學問を人格と離してしまつて考へるやうになつたのは全く過つたものと云はなければなりません。この繆言の繆は謬と同じ意味であります。

知行合一

◎內外の工夫

凡教自外而入。工夫自內而出。自內而出。必驗諸外。自外而入。當原諸內。

凡そ教は外よりして入り、工夫は內よりして出づ。內よりして出づ。必ず諸れを外に驗し、外よりして入る。當に諸れを內に原ぬべし。

工夫は創造

凡そ學問といふものは內外相應して完成せられるもので、教へといふことは外から內に入つて來るものでありますから、たゞ教へを受けて習ふといふだけでは、是れはまなぶでありならふであつて畢竟、人の眞似をするので、自分のものになつたのではありません。自分のものにする方法は自分が充分の工夫をして見なければならないのであります。工夫とは自分で、いろ〳〵と考へを廻らすことで、これは內から出るのであつて外から這入るものではありません。

工夫は創造でありまして、模倣ではないのであります。たゞ模倣を事として工夫のない者は、丁度畫を學ぶ者が手本ばかりに依賴して、そのほかに出るといふことが出來ず、劍を學ぶ者が型ばかりやつて、それ以外に應用の術のないやうなもので、實際の役に立つべきものではありません。それでありますから他より教へられたことは、これを內に原ねて充分工夫して自分のものにすれば良いのでありますが、それだけでは、まだ不充分で、その工夫の出來たことは、これを然るべく行うて、實際に試してみることが必要であります。さもないと、獨り思案や獨り決めの工夫は、これを實際に行ふに當りまして、『そんな筈ではなかつた』といふやうな失敗も出來ることがないとは言へないのであります。

◎自重せよ

吾人須知自重。我性天爵。最當貴重。我身。父母遺體。不可不重。威儀。人所觀望。言語。人所取信。亦得不自重乎。

吾人は須らく自ら重んずることを知るべし。我が性は天爵なり。最も當に貴重すべし。我が身は父母の遺

體なり。重んぜざる可からず。威儀は人の觀望する所、言語は人の信を取る所なり。亦自重せざるを得んや。

われ〳〵お互は充分自分自身を尊重するといふことを知らねばなりません。何故かと申しますと、この萬物の靈長たる人間と生れて來て持つてをる本性といふものは、天より與へられた俸祿ともいふべきものでありますから、これを尊重せねばならんのは言ふまでもなく、この身體は親から傳へられた大切なものでありますから、これ亦尊重せねばならないので、『孝經』には『身體髮膚これを父母に享く。敢て毀傷せざるは孝の始めなり』ともあります。

更に此の身の威儀卽ちなり形や、その行ひは人の見るところであり、言ふところの言語はこれによつて人の信用を得る本となるのでありますから、爲さんとする一擧一動、言はんとする一言一句もこれを尊重して決して輕々しくしてはならないのであるといふことに充分注意すべきであります。

◎聖人の態度

聖人清明在躬。氣志如神。故人之到其前。竦然起敬不敢褻慢。不敢詔諛。信而親之。盡輸其情。如到鬼神前祈請一般。使人輸情如是。天下不足治。

聖人は、清明躬に在りて、氣志神の如し。故に人の其の前に到るや、竦然として敬を起し、敢て褻慢せず、敢て詔諛せず。信じて之に親み、盡く其の情を輸すこと、鬼神の前に到りて祈請するが如きと一般なり。人をして情を輸さしむること是くの如くならば、天下は治むるに足らじ。

これは聖人が自ら重ぜられる風丰を示されたものであります。聖人といふものは清く明かなる道德がその中に備はつて、而もその志すところの意氣は神の如く、且つ美しくその威儀は謹嚴でありますから、人がその前に至りますと、自ら頭が下がつて竦然と、恐れ畏みて、自から敬ふ心を生じて、決して褻慢と馴れ侮るといふ心を起すものもなく、又詔諛とへつらひ、おもねる心もなく、全く信じ切つて、その前に自分の心情を述べること、丁度神様の前にお祈り申すやうな、何の僞りもなく、心の中を打ち明けて倚りすがるやうにならしむるものであります。若し人をしてその心情を盡さしめることがこのやうに出來たならば、天下は自然に治まるものであるといはれたのです。

◎往事を追思せよ

人當追思往時經歷事迹。某年所爲。孰是當否。孰是生熟。某年所謀。孰是穩妥。孰是過差。以此爲將來鑑戒可也。不然。徒爾汲汲營營算前途。計來日。亦何益之有。又尤當憶起幼穉時事。父母鞠育乳哺之恩。顧復懷抱之勞。撫摩憫恤之厚。訓戒督責之切。凡其所以艱苦而長養我者。無不悉以追思之。則今

之所以自愛吾身。不肯自輕者。亦宜無所不至。

人は富に往時に經歷せし事迹を追思すべし。某の年爲しし所、孰れか是れ當否なる、孰れか是れ生熟なる。某の年謀りし所、孰れか是れ穩妥なる、孰れか是れ過差なると。此れを以て將來の鑑戒と爲さば可なり。然らずして徒爾に汲汲營營として、前途を算へ、來日を計るとも、亦何の益か之れ有らむ。又尤も當に幼稚の時の事を憶ひ起すべし。父母鞠育乳哺の恩、顧復懷抱の勞、撫摩憫恤の厚き、訓戒督責の切なる、凡そ其の艱苦して我を長養する所以の者、悉く以て之を追思せざる無くんば、今の自ら吾が身を愛し、肯へて自ら輕んぜる所以の者も、亦宜しく至らざる所無かるべし。

人間は時々自分の今日までにやつて來たことを振返つて考へてみるがよろしい。或る年に是々のことをやつたが、どれが當然であつたのであるか、またさうでなかつたのか。またどれが充分に成熟したか、またはどれが未熟に終つたか。また或る年に計畫した仕事はどれが穩かに適當であつたか、どれが間違つてをつたか、吟味してみて、これをこれから後の行ひの鏡とし、戒めとしてゆくがよろしい。さうでなくして、たゞ徒らに汲々營々として焦つて、これから先のことばかり勘定して、明日の計を立てゝいつては、それは何の役にも立つものではないのであります。

然るに現代の人は先を先をと急いで、後を振返へる者がないものですから、過去の失敗を繰返へしてみたり、昨日の間違ひを重ねて見たり致しますが、時々に過去つたことを考へて、過去の失敗を無駄にしないといふことが必要であります。殊に道德修養の上で言ひますれば、最も追懷すべきことは幼兒の時のことであります。父母が鞠育乳哺、乳を與へて養ひ育てゝくれた御恩、顧復懷抱とて子を顧みて這へば立て、立てば歩めと慈みを與へられた御苦勞、撫でつ、さすりつして下さる御慈愛、或は教へ訓され、或は責め戒め給うた親切、みなこの我を一人前の人間にせんとの御苦心であります。

世を救ふ三世の佛の心にも
似たるは親の情なりけり

と詠まれてをります通り、その艱苦心勞は、測り知ることの出來ないものであります。これをもつて親の恩を今一度回想してみれば、決してこの我、卽ち親がこゝまで苦勞して育てあげられたこの我を輕んずるといふことは出來ない筈であると前に續いて身の重んずべきを示されたのであります。

◎心の靈光

人處世有多少應酬。塵勞鬧攘。膠膠擾擾。起滅無端。因復生此計較揣摩。歆羨慳吝。無量客感妄想。都是習氣爲之也。譬之魑魅百怪。昏夜橫行。及太陽一出。則遁逃潛迹。心之靈光。與太陽並明。能達其靈光。則習氣消滅。不能爲之嬰累。聖人一掃之。曰何思何慮。而其思歸於無邪。無邪卽靈光之本體也。

人の世に處するには、多少の應酬、塵勞、鬧攘有り。膠膠、擾擾として起滅すること端無し。因て復た此の計較、揣摩、歆羨、慳吝など、無量の客感妄想を生じぬ。都て是れ習氣之れを爲すなり。之を魑魅、百

怪の昏夜に横行するもの、太陽の一たび出づるに及べば、則ち遁逃して迹を潜むるに譬ふ。心の靈光は、太陽と明を並ぶ。能く其の靈光に達すれば、習氣消滅して、之れが累を爲すこと能はず。聖人之を一掃して曰く、何をか思ひ何をか慮らんと。而して其の思は邪無きに歸す。邪無きは卽ち靈光の本體なり。

人のこの世に處してゆきますのには、いろ〳〵面倒なことが多いのでありまして、樣々の人と交際もせねばなりませんし（應酬）、またこの世に立つて樣々の氣苦勞も多いのでありますし、また嫌なこと厭ふべきことにも關係せねばならないので、その心を騷がしますことは次から次へと起づて參るのでありますから、それに對して此は此、彼は彼と較べてみなければなりませんし（計較）。また樣々の當て推量もやつてみなければなりませんし（揣摩）。それに就て他を羨む心も起れば（歆羨）、物を吝む心も起りますし（慳吝）。その他數限りなき樣々の客感とて、本來の心の主人公でなく、外から來て心を搔き廻はすところの感情や、眞實に非らざる妄りな想ひはみな煩惱の連れ子とも云ふべき長い間の慣習から出て來た習氣といふもので、これに心を勞されてをるのであります。この習氣といふのは世の習慣からもまれて出來たところの癖でありますが、しかし佛敎の方ではこれを習氣と讀ませまして、煩惱の微細なものが殘つてゐる折に出て來るものとして居ります。

見惑、思惑
習氣

一寸この際煩惱のことを申しますと、煩惱は八萬四千を數へるほどある心の病でありますが、これを二つに分けますと、見惑と思惑とになります。見惑といふのは理屈の間違ひで、知識上の病でありますから、これは理屈を正くしてゆけば除くことが出來ますが、思惑といふのは情の上の病でありまして『理屈はさうだけれども』といふ、この『けれども』がなか〳〵除れないので、『酒を飲んでは惡い』といふ、理屈は充分に分つた。『しかしそれがやめられぬ』といふ『しかし』とか、『けれども』といふ言葉は煩惱の病の殘つてゐる證據であります。

この思惑とか見惑といふものは除けたが、尙ほ其の滓が心に止つてゐるのを習氣と云ふので、この習氣が殘つてをりますから、いろ〳〵な客感妄想が心に起つてくるので、これを譬へてみると化物が樣々に橫行してゐる百鬼夜行の狀態であります。百鬼が夜行致しましても太陽が一度出ると、みな遁れてその姿を隱してしまひます。客感妄想の百鬼が如何に橫行してをりましても、心の靈光たる太陽が現はれますれば、その習氣は消滅してしまふ。最早や橫行することが出來なくなります。聖人がこれを一掃して『何をか思ひ何をか慮らん』何も別段思ふことなく考へるべきこともないと言はれ、その思ひはつひに邪無きが如く、チヤント天に歸着してをります。この思ひ邪無きといふことは卽ち心の靈光の本體が輝き出した形であります。斯くなつてこそ、心はその平靜を得てよく世の膠々、擾々たるに處してゆくことが出來るのであります。膠々、擾擾は亂れ動く形であります。

◎人の言語

天地閒靈妙。莫如人言語者。如禽獸徒有聲音。僅通意嚮耳。唯人則有言語。分明宣達情意。又抒以爲文辭。則可以傳之遠方。詔於後世。一何靈也。

惟若是之靈。故其構禍階。造釁端。亦在言語。譬猶利劒之善護身者。輒復自傷。可不愼乎。

天地間の靈妙なるもの、人の言語に如く者莫し。禽獸の如きは徒に聲音有りて、僅に意嚮を通ずるのみ、唯だ人は則ち言語有りて、分明に情意を宣達し、又抒べて以て文辭と爲さば、以て之を遠方に傳へ、後世に詔ぐ可し。一に何ぞ靈なるや。惟だ是くの如く之れ靈なり。故に其の禍階を構へ、釁端を造すも亦言語に在り。譬へば猶ほ利劒の善く身を護る者は、輒ち復た自ら傷つくるがごとし、愼まざる可けんや。

この天地の間で、最も靈妙、不思議と云ふべきものは人の言語であります。鳥や獸には聲音はありましても、僅かに自分の心の向ふところを通ずるばかりで、それ以上は望めませんが、たゞ人間ばかりには、この言語といふものがあつて、ハッキリとその心を他に通達することが出來るのであります。

凡そ天地間のものは、これを生物と非生物に分れます。即ち生命のある動植物と、生命のない鑛物のやうなものであります。さてその生物がまた二つに分けられまして、聲音のあるものと、ないもの、即ち魚類のやうに聲音の聽くことの出來ないものと、禽獸のやうに聲音のあるものとであります。その聲音のあるものを、また二つに分けますと、言語を持つてゐるものと言語を持たぬものとになるのであります。今、言ふ通り他の一切の生物には言語を持たずたゞ人間ばかりが言語をもつてをるのであります。

さてその言語を通じて文字に現はすことの出來るものと、文字のないものとがありまして、この文字の有る無しが文明と野蠻とを區別するので、言語はたゞ自分に近いものにしか聽かしめることが出來ず、且つ一時限りでそれはその場でみな消えてゆくものであります。が、これを遠方に傳へたり、後の世に殘しておくには是非文字の力によらねばなりません、かくの如く言語と云ひ文字といふものは靈妙なものであり、不思議なものでありますが、その代りにこの言語によりまして禍を受けたり、釁端、即ち仲違ひなどをつくることがあるので『口は禍の門、舌は禍の根』と言ひ、大抵の喧嘩は、その始め言葉の行き違ひから起ることが多いのであります。されば言語といふものは猶ほ鋭い刀のやうなもので、よくこれで身を護ることも出來れば、また自らこれに傷つくことも起るものであるから、これを愼まなければならないと、言語の愼しむべきことを言はれたのであります。

◎人我に負く時

寧人負我。毋我負人。固爲確言。余亦謂。人負我時。我當思吾之所以致。寧ろ人の我に負くとも、我れは人に負く毋らんとは、固に確言となす。余も亦謂ふ、人の我に負く時、我れは當に吾れの負くを致す所以を思ひて以て自ら反りみ、且つ以て切瑳、砥礪の地と爲すべしと。我に於て多少益有り。烏んぞ之を仇視すべけんや。

唐の德宗の時の盧杞といふ人の奏議の文中に『寧ろ人の我に負くとも、我れは人に負くなからん』といふ

ふ言葉があります。人が自分に背いてゆくとも自分はその人に背かぬやうにしなければならない。背くといふのは自分を裏切つたり、自分を見棄たりすることで、人が見棄てたり、裏切つたりしても自分はその人を見棄てないやうにしようといふまことに立派な言葉であります。しかし自分は更に考へまして、人が我に背いた時、我は當に自分が何故にその人に背かれたのであるかその人は何故背いたのであるかといふことを自ら反省して自分の足らざるところを補ひ、自分の至らぬところを研き磨くの材料とするがよいと思ひます、（切瑳、砥礪とは研ぎ磨くことであります。）さうさへしてゆけば人が負いたからとて、自分に益があるのです。決してその人を仇のやうに思ふ必要はないのであります。

木下藤吉郎の逸事

昔豐臣秀吉がまだ木下藤吉郎と云つた昔に二、三の人を使つてをりましたが、その者のうちには、コンナ主人に何時まで使はれてをつても望みはないから暇を取らうといふので暇を藤吉郎に乞ひますと、

『さうか』

と云うて、これを許すと共に、

『長い間世話になつたから別れの茶でも飲まう』

と、その人を客にして、

『長い間お前の世話になつたが、お前もほかに行くといふことであるが、どうか、ほかに行つても落し面白くないことがあつたら何時でも、俺の所に歸つて來い。もと〳〵通りに使つてやる』

と親切に申しますと、その人は暇を取るのをやめて『それでは思ひとどまります』と言ふ者もあり、また出て行つた者も歸つて來て、また秀吉の身内になつたといふ話があります。即ち人が我に背くとも、我はその人に背かず、自らこれに反省するといふところに修養の基礎があるのであります。

◎教化の方法

誘掖而導之。教之常也。警戒而喩之。教之時也。躬行以率之。教之本也。不言而化之。教之神也。抑而揚之。激而進之。教之權而變也。教亦多術矣。

誘掖して之を導くは、教の常なり。警戒して之を喩すは、教の時なり。躬行して以て之を率ゐるは、教の本なり。言はずして之を化するは、教の神なり。抑へて之を揚げ、激して之を進むるは、教の權にして變なるなり。教も亦術多し。

誘掖――誘はいざなひ、掖は援ける。手をとつて子供を導くやうにして、人を教へるといふのは教育の常則でありますが、また警め戒めて、これを親切に喩して行くのもそれが教への時機を得たものであるが、更に身をもつて行つて、それを手本にするやうにして人を導いてゆくのが教への本であり。言はずしてこれを感化してゆくのが教への神髄であるといはれたので前の二つは主として教育の方法であり、後の二つは教化の方法であると思ひます。

教育と教化

元來西洋は教育といふ方を主として教へ導いてゆくのでありますが、東洋では昔から教育の外に教化といふことをいふ、化といふ字が非常な意味をもつてをるので、佛教などでは教へる人を能化、教へらるゝ人を

所化と云ひ、これを教へ導くことを化導といふ言葉もあります。西郷南洲は此の語を愛誦し、人を導いてゆくのにも言はずして自ら化するといふことを主とせられ、身をもつて手本を示すといふことを中心とせられたから、鹿兒島に歸へつて私學校を開かれた折に、明治七年から八年までの間に一人も校則に背いた者を出さなかつたといふ話であります。抑へて之を揚げ、激發して之を進めてゆく、これらは教への權の手段であつて、時に應じ、機に從つてやる、普通の方法であります。

山崎闇齋の見識

昔山崎闇齋先生が江戸に出られた折に赤貧洗ふが如く、書物を讀むのに、これを買ふことが出來ないものですから、家を本屋の隣に借りて、その本屋に賴んで書物を借覽してをられた。時に井上河内守が頗る書物好きで、屢々その本屋を訪れ、今の世の中で自分の師とするほどの者がをるであらうかと言はれた時に、その本屋の主人が答へて、

『隣に山崎闇齋といふ學者がをります。その御覽になる書物を見ますと、實に大儒者であると考へます』

といふことを申しますと、河内守が、

『それではお前が一つ話して自分の邸に來て講義してくれるやうに賴んでくれ』

と言ひますから、主人が喜んでそのことを闇齋先生に申しますと、先生は毅然として、

『若し井上河内守が眞に道を問はうとするならば、此處に來るが好い。自分から行つて教へる法はない』

と答へられました。主人が驚いて、どうも時世を知らぬ儒者であるといふので、恐る恐るそのことを河内守に言ひますと、井上河内守は非常に褒めて、

『今日の儒者といふ儒者は多くは道を行ふに意なく、東奔西走して、その學を賣らんことを望んでゐる。然るに道を問はんとするならば自ら來たれといふのは非常な見識である』

と言うて駕を枉げて、闇齋の門人になつたといふ話があります。斯くの如く激して發するもの、抑へて揚げる教へ方もあるのであります。

時間勵行

これについて面白い話は前田正名といふ方が埼玉縣の或る地方で時間勵行について教化の會をやるといふので、話に行かれた。ところが定刻になつても一人も集つて來ませんから、前田さんは、

『自分は時間勵行を教へに來たのである。然るに時間が來ても一人も集まらぬといふやうな不勵行では說き示したところが、役に立つものではない、私はこれで歸る』

と言うて歸り仕度をされますから、主催者は非常に驚いて、

『折角來て戴いてお歸り下されては困ります。どうか少しお待ち下さい』

と言ふと、

『イヤ／＼、さうではない。儂(わし)が今日此處に來て、時間通りに人が來ないから歸つた方が、待つてをつて說くよりも、餘程實際の効果があろ』

と言うて歸られたので、主催者は非常に困つたが、しかしその後からは、時間が勵行出來るやうになつたといふ話があります。これもやはり、抑へて揚げ、激して進めるは教の權にして變なるものであります。斯くの如く教への方法は樣々あるのでありまして、前にも申しました通りに容態に應じて藥を盛るので、或る病氣に對しては服藥だけで癒るものもあり、或は切開手術しなければならないものもあり、注射しなければならないものもあるといふやうに、いろ／＼なものがあるのであるといふことを言はれたのである。

◎下僚に對する上長の心得

有小吏。苟能盡心職掌。爲長官者。宜勸奬而誘掖之。雖時有不當之見。而亦宜姑容之。徐徐諭說。決不可抑遏之。抑遏則意阻氣撓。後來遂不盡其心。小吏有り。苟も能く心を職掌に盡くさば、長官たる者、宜しく勸奬して之を誘掖すべし。時に不當の見有りと雖も、而れども亦宜しく姑く之を容れて、徐徐に諭說すべし。決して之を抑遏す可からず。抑遏せば意阻み意撓みて、後來遂に其の心を盡くさじ。

小役人が一生懸命にその自分の職務に盡してをつたならば、上長官たる者は、これを勸め勵げまし、之れを誘ひ掖けるがよい。時に間違つたことがあつても、暫くこれを許して、徐ろに諭し教へるやうにして、決して無理に抑へ遏めるやうなことをやつてはならない。若し無理に抑へ遏めるやうなことがあれば、爲めにその人の意氣が沮喪し、心が撓んで、それから後、仕事に一生懸命になれぬやうになるものであると、上長官たる者の心得を示したのであります。

◎居官の好字面

居官好字面有四。公字。正字。清字。敬字。能守此。可以無過矣。不好字面亦有四。私字。邪字。濁字。傲字。苟犯之。皆取禍之道也。官に居ろに好字面四有り。公の字、正の字、清の字、敬の字なり。能く此れを守らば、以て過無かるべし。不好の字面も亦四有り。私の字、邪の字、濁の字、傲の字なり。苟くも之れを犯さば、皆禍を取るの道なり。

官にをる者には好い字が四つある。それは公の字、正の字、清の字、敬の字。公は公平にして私なきこと、正は正しくして邪ならざること、清は清廉潔白で疚しきことなく、敬は自ら慎しみ事を鄭重にして疎末にせぬことで、若しこの四つをよく守つたならば決して過ちはないのである。これに反して官に居つて好くない字が四つある。それは公の反對の私、正の反對の邪、清の反對の濁、敬の反對の傲で、私欲に耽つて公平を缺き、邪念にかられて正道を歪げ、清廉潔白でなく、また自ら威張り廻はすやうなことがあつたならばそれは必ず禍を取るの道であるといはれたのです。

◎急事と不急事

凡人所宜急做者。不肯急做。可不必急做者。卻要急做。皆錯慮也。如斯學卽當下事。卽急務實用事。勿謂今日不學而有來日。如張讌會客。登山泛湖。凡適意游觀事。則宜謂今日不爲而猶有來日可也。

凡そ人の宜しく急に做すべき所の者は、急に做すことを肯ぜず、必ずしも急に做さざる可き者は、卻つて急に做さんことを要む。皆錯慮なり。斯の學の如きは、卽ち當下の事。卽ち急務實用の事なり。謂ふこと勿れ、今日學ばずとも來日有りと。讌を張り客を會し、山に登り湖に泛び、凡そ適意游觀する事の如きは、宜しく今日爲さずとも猶ほ來日有りと謂ふ可くして可なり。

凡そ人には急にしなければならないことと、またさう急がなくてもよいこととある。然し人間といふものは兎角急になさなければならないことを急にすることは喜ばず、却て急にしなくてもいゝやうなことを急にするといふところがあるものであります。これは全く間違つた考で、學問をするといふやうなことは、只今目の前の問題で――當下といふのは只今といふことで、卽ち急にせなければならない實際必要のことで、朱子の勸學の文の中に、

勸學の文

謂ふこと勿れ、今日學ばずとも來日ありと。謂ふこと勿れ、今年學ばずとも來年ありと。日月逝けり、歲、我と延びず。嗚呼老いぬる哉これ誰の愆ぞ。

といふのがあります。今日學ばずとも明日があるとか、今年學ばずとも來年があるとかいうても、日月は自分のためには延びてくれません。然るに其の人々は學問の方はさうして延ばしてゐるが、宴會を開いてお客を招んだり、或は山に登り、湖に泛んで游山をするやうな自分の氣に入ることは急にやつて居る。此方こそ今日爲さずとも明日ありというてもよいのに、遊ぶことなら直にやり出すが、學問の方はアト廻しにしたがると、その弊を指摘して之れを警められたのであります。

◎我れ自ら累す

人或謂外物爲累。愚則謂萬物皆與我同體。不必爲累。蓋我自累也。

人或は謂ふ、外物累を爲すと。愚は則ち謂ふ、萬物は皆我と同體にして、必ずしも累を爲さず。蓋し我れ自ら累するなりと。

自ら累ばす話

人は外から來るものが自分の心の煩ひをなすと云ふ。しかし愚といふのは先生自ら指されたので、自分はさうは思はない。萬物は皆な我と同體であつて、必ずしも累ひをなすものではない。その心の累ひといふものは自ら自分で自分の心を累はしてをるので、昔嘗に、どうも自分の家にをつては樣々のことが煩ひになつて心の修養が充分に出來ない。見るもの聞くもの皆な腹が立つて仕方がないとて、山に入つて充分の修養をしようと、下男に言ひつけて山の麓の瀧の所まで辨當をもつて來て其處に置いてくれといひ、自分は獨り山の中に這入つて、靜かに心を修め、飢來たれば下りて辨當を食ふといふやうにしてをりましたが、或る時麓に下りて、瀧の水を飲んでその辨當を使はうと、持つて居つた瓢簞で水を汲まうとしたが、具合よく、汲めないので、幾度も〳〵やつて見たが、はいらないので、終に腹を立てこれを瀧壺に打込んで、ハット氣がつき、『まだ〳〵自分は修養が足らない』といふことを感じた。といふ話があります、外から累はすものがなくても自分の心によつて累はさるゝ此の如きものです。

◎過は不敬に生ず

過生於不敬。能敬則過自寡矣。儻或過則宜速改之。速改之亦敬也。如顏子不貳過。子路喜聞過。莫非敬也。

過は不敬に生ず。能く敬すれば過自ら寡し、儻し或は過たば宜しく速に之を改むべし、速に之を改むるも亦敬なり。顏子の過を貳びせざる、子路の過を聞くを喜ぶが如きは、敬に非ざる莫きなり。

凡そ過といふものは不敬が本となつて生ずるものであります。よく敬を守り、慎しんでをれば過は自然に少なくなるものでありますが、若し是れでも過を生じたならば、速かにこれを改めるがよい。此の速かに改めるといふことも敬であります。昔、顏回といふ人は一度過ちをすればこれを二たびするやうなことはなかつたといひ（『論語』雍也篇）子路といふ人は自分の過を人が語つてくれるのを聞いて喜んだといふ（『孟子』公孫丑上）ことであります。これみな敬、即ちうやまひつゝしむの心であります。

◎百邪退聽

閑想客感。由於志之不立。一志既立。百邪退聽。譬之清泉涌出。旁水不得渾入。

閑想客感は、志の立たざるに由る。一志既に立ちなば、百邪退聽せん。之を清泉涌出すれば、旁水の渾入するを得ざるに譬ふ。

閑想客感――閑想は自分の心から起るところのつまらぬ想ひ、くだらない考へ、客感は外から這入つて自分の心を動かしてゆく感情。ツマリ内外二つの我が心の敵であります。これらによつて心が動かされゆくといふことは自分の志が確り立たぬからで、一つ志が確り立てば、いろ〳〵な邪念妄想即ち百の邪まな感情や思想は志の命令に服從するやうになるもので、これを譬へば清い水が滾々として涌き出ると、傍から水が混入することの出來ないやうなものであります。これも西郷先生愛誦の句でありまして、一志以て、我が心を統御し、外より來る邪念妄想を退けて進む所に大丈夫の心は存するのであります。明治維新の際に廢藩置縣を行ふといふことについて或る人が南洲先生に話された。南洲先生もこれに贊成されたのです。ところがまたその人が再び南洲先生に、

『これはなか〳〵の大事件でござるが、爾かと御贊成下さるか』

と申しますと、南洲先生は、

『吉之助の一諾は死をもつてこれを守るのでござる』

と言はれて何事も他の事はいはれなかつたといふのであります。これ實に一志既に立つて百邪退聽すといふ狀況であります。

廢藩置縣の決意

◎欲の公私

心爲靈。其條理動於情識謂之欲。欲有公私。情識之通於條理爲公。條理之

滯於情識爲私。自辨其通滯者。卽便心之靈。

心を靈と爲す。其の條理の情識に動く。之を欲といふ。欲に公私有り。情識の條理に通ずるを公と爲し、條理の情識に滯るを私と爲す。自ら其の通滯を辨ずる者は、卽便ち心の靈なり。

我々お互の心は實に靈妙なものであります。その心の筋道の感情や意識によつて動いてゆきます時に、こに欲といふものが起るのであります。この欲に公欲、私欲といふ二つがあります。公欲といふのは感情意識がチヤンと道理、筋道に合つてゐることで、私欲といふのは感情、意識のために條理、卽ち筋道に滯りを生ずる、自分勝手の欲望であります。此の公欲は發揮すべきでありますが、私欲はこれを阻止せなければなりません。されば自ら自分の欲望が果して道理を通じてをるか、道理を滯らして居るかといふことを辨別せねばなりません。しかも之を辨別するといふことは卽ち心の靈妙なる働きに由るの外はないのであります。

◎宇　宙

宇。是對待之易。宙。是流行之易。宇宙不外我心。

宇は是れ對待の易にして、宙は是れ流行の易なり。宇宙は我が心に外ならず。

上下四方を宇と云ひ、往古來今を宙と云ふ。といふのが、最も一般的な宇宙の解釋でありまして、宇は無限の空間、宙は無限の時間であります。此の無限の空間に亘り無限の時間を貫くのが、卽ち宇宙でありまして、此の無限の空間中に有りと有ゆる森羅萬象が對待的であります。對待とは宇宙間の森羅萬象は所謂千差萬別悉く陰陽の交叉で、その處によつて各々異つてをるを指すのであります。それからその時間的の方面を見ますと變化不斷で時々に現はれるものは流行と、流れ行はれるが如くに、一刻も停まるところなくして移りゆくもので、これが卽ち宇宙の易の姿であります。

此の易には變易と交易と二つがありまして、變易といふのは時間的に陰陽、晝夜の流行の如きであり、交易といふのは天地萬物が對待して、相交つて居る狀態を指すのであります。が、此の宇も宙も變易と交易と悉く我が心の中に備はつてをるのでありますから、宇宙の變化は我が心の變化、我が心の變化は卽ち宇宙の變化で此の宇宙といふも我が心に外ならぬといふので、陸象山（此の人のことは後に申します）は、『宇宙內の事は乃ち己が內の事、己が內の事は乃ち宇宙內の事』と大悟したといふことであります。

變易と交易

◎身　と　心

以禮義養心者。卽養體軀之良劑。心得養則身自健。以旨甘養口腹者。卽養心之毒藥。心失養。則身亦病。

禮義を以て心を養ふ者は、卽ち體軀を養ふの良劑なり。心、養を得れば身自ら健なり。旨甘を以て口腹を養ふ者は、卽ち心を養ふの毒藥なり。心、養を失へば身も亦病む。

禮義をもつて心を養つて行くものは卽ちその身體を養ふ良き藥となるもので、心に禮義の養ひをもつて居

れば、身體は自ら健かになるものであるが、之れに反して旨甘とてうまいあまい即ち口腹を養ふ珍味佳肴は却て心を養ふ毒藥となるものであります。然るに世の人々は口腹の欲を以て身を養ふことを知つて、心を養ふことを知りません。此の心を養ふことを忘れれば身も亦病むので、健全なる精神は健全なる身體に宿ると いひますが、又これを半面から健全なる身體は健全なる精神に成るといふことも出來るのであります。

◎敬の義

心存二中和一。則體自安舒。卽敬也。故心廣體胖。敬也。徽柔懿恭。敬也。申申夭夭。敬也。彼視レ敬若二桎梏徽纆一然者。是贋敬。非二眞敬一。

心に中和を存すれば、體自ら安舒にして卽ち敬なり。故に心廣く體胖かなるは敬なり。徽柔懿恭なるは敬なり。申申夭夭たるは敬なり。彼の敬を見ること桎梏、徽纆の若く然る者は、是れ贋敬にして眞敬にあらず。

中和は人の情勢の最も平和なる時である。『中庸』には『中和を致して天地位し、萬物育す』とありまして、何事もこの中庸を得ろといふことが一番必要でありまして、若し心にその中庸を得て和平を保つことが出來れば、體は自ら安く伸々とするものであります。この心に中和を得て身體自ら安舒するものは敬であります。『大學』に『心廣く、體胖かなり故に君子は其の意を誠にす』とあるも、此の敬であります。また徽柔懿恭――徽は善、柔は和、懿は美、恭は敬で、これは『書經』にある言葉であります。卽ち善和美敬といふやうな、すべての善いこと皆なこれ敬であり、申々夭々と顏色のユッタリとして樂げなのも、亦此の敬であります。敬と云へば桎梏卽ち手枷足枷をはめられ、或は徽纆とて大繩で體を縛られたやうな、身動きもならぬ究屈のことのやうに思ふのは贋卽ち僞りの敬であつて、眞の敬ではないのであると、敬の義を明にせられたのです。

◎義理と利害

君子亦說二利害一。利害本レ於二義理一。小人亦說二義理一。義理由レ於二利害一。

君子も亦利害を說く。利害は義理に本づけばなり。小人も亦義理を說く。義理は利害に由ればなり。

眞功名。道德便是。眞利害。義理便是。

眞の功名は、道德便ち是れなり。眞の利害は、義理便ち是れなり。

君子と小人の利害觀

君子小人のことは從來屢々說きましたが、人格の立派な君子もやはり利害を說きます。が然しこれ等の人の利害は義理に基いてゐる。卽ち道德の上から、いづれが利であり、いづれが害であるかを論ずるのでありますが、小人卽ちツマラヌ人間も亦君子の說くやうな義理を說きますけれども、その義理は自己の利害によつてこれを論ずるのである。と義理を本とすると利害を本とするとで大變な差を生ずることをいはれたのです。

次ぎの句は眞の功名は道德、眞の利害は是れ義理、とありまして、道德と名利との關係を示されたのであります。利害と道德や義理とは常に相反するやうに考へられ、利益を得んとするならば、『三かく法』とて『義理をかき、人情をかき、恥をかく』のでなければならぬなぞと申しますが、これは大きな間違で、單に利益と申しましても、これには一時の利と永久の利との區別がありまして、一時的な目前の利益は道德を考へなくても出來るので、例へば安い品物を高く賣る、これは一時の利益は得られますが、終に誰れも買ひに來なくなつて結局の損となり、これに反して良い品物を安く賣れば目前の利は少いやうですが次第にそこの店は繁昌してゆくやうなもので、永久の利益は道德の基礎によらなければ成立つものではありません。こゝに於て眞の功名は乃ち道德、眞の利害は義理によつて定まるといふことが出來るのであります。

◎達者の見

人一生所遭。有險阻。有坦夷。有安流。有驚瀾。是氣數自然。竟不能免。卽易理也。人宜居而安焉。玩而樂焉。若趨避之。非達者之見。

人の一生遭ふ所には、險阻有り、坦夷有り、安流有り、驚瀾有り。是れ氣數の自然にして、竟に免るゝ能はず。卽ち易理なり。人は宜しく居つて安んじ、玩んで樂むべし。若し之を趨避せんとするは、達者の見に非ず。

人の一生の中に出遭ふことには、或は嶮しい山道もあり、また平らかな土地もあり——坦夷とあるのはどちらも平らかな土地——渡る川や海に安らかにゆるやかな流もあり、逆卷く浪、所謂驚瀾怒濤といふやうなものもあるが、これはみな運命の自然であつて、到底免れることの出來るものではありません。これは全く易の變化の理法であります。それであるから人間は自分々々の居る所の地位に安んじて、これを樂しめばよいので、強ひてその嶮阻を逃げたり、驚瀾怒濤を避けようとしたからとて、避け得られるものでないから、コンナことに騷ぐのは世の中のことに通達した立派な人のすることではありません。此の句も西鄕南洲先生が愛誦せられ、幾度か辛酸に對しても、決して逃げ廻るやうな愚を演ぜられなかつたのであります。

○

山水之可遊可觀者。必是疊嶂攢峰。必是激流急湍。必是深林長谷。必是懸崖絕港。凡其紫翠蒙密。雲烟變態。遠近相取。險易相錯。然後有幽致耐賞。最見坤輿之爲文。若唯有一山有一水而已。則何奇趣之有。人世亦猶是。

山水の遊ぶ可く觀る可き者は、必ず是れ疊嶂、攢峰、必ず是れ激流、急湍、必ず是れ深林、長谷、必ず是れ懸崖、絕港なり。凡そ其の紫翠の蒙密、雲烟の變態、遠近相取り、險易相錯りて、然る後に幽致の賞するに耐へたる有り。最も坤輿の文たるを見る。若し唯だ一山有り、一水有るのみならば、何の奇趣か之れ有らむ。人世も亦猶ほ是くのごとし。

山や水の遊覽する價値のあるところは、必ず疊嶂、攢峰、重なり合つた山の嶮しい、切り立つたやうな斬

や、激流、急湍――急流、石に激して玉を吐くといふやうな早瀬、または深林、長谷、深い林や、長い谷、或はまた懸崖絶港――切立つたやうな崖や、遠く離れた港のやうなもので、その山岳が紫翠の蒙密――山岳が紫色に包まれ、翠の林と相生してゐるやうな所、雲烟の變態――烟の如く雲が樣々な姿に見え、或は遠くに見え、或は近くに見えて、そこには嶮しい土地もあり、安らかな土地もある。かゝる變化があつて始めてその幽邃な趣きを愛することが出來るので、こゝに坤輿の文、坤輿といふことは天地といふと同じことで、文は模樣、天地の模樣の有樣を見ることが出來るので、若したゞ一つの山、一つの水があるだけで、外に何ものもなかつたならば、そこに何の面白味があるであらう。人間の世の中も亦このやうなもので、樣々の變化があつて始めて人生の價値が現はれてくるのであると、山水に喩へて人生を見られたので、上來の意味と大差はなく、こゝは寧ろ先生の文章を見るべきであると思ひます。

◎生死と晝夜

物有榮枯。人有死生。卽生生之易也。須知軀殼是地。性命是天。天地未曾有死生。則人物何曾有死生。死生榮枯。只是一氣之消息盈虛。知此則通乎晝夜之道而知。

物には榮枯有り、人には死生有り。卽ち生生の易なり。須らく知るべし、軀殼は是れ地にして、性命は是れ天なることを。天地未だ曾て死生有らずば、則ち人物何ぞ曾て死生有らんや。死生、榮枯は只だ是れ一氣の消息盈虛なり。此れを知れば晝夜の道に通じて知る。

物には榮えると枯れるとがあり、人には死ぬと生きるといふことがあります。これを生々の易といふとありますのは、『易』の哲學でありまして、それによりますと天地間の事々物々がさま〴〵に變化しつゝ、而もその間に一定の流れをもつて、丁度水の流れが樣々に變化しても、水そのものが變化しないやうに、不易の易と變易の易とがあるので、此の人間の身體は地から受け、性命は天から受けてゐるといふのは儒教の通說でありまして、既に身は地に受け、命は天に受けてをるとすると、天地には未だ曾て死生はないのであるから、人や物にまた死生がある筈はなく。死ぬと云ひ、生きると云ひ、榮えると云ひ、枯れると云ふのは、たゞこれ一つの氣の或は生じ或は熄み、或は盈ち、或は虛しくなるといふ外はないのでありますから、能くこの道理を知つたならば、晝と夜とが移り變るのも、死ぬと生きるとの變化も同じ道理であるといふことが明かになろであらう。卽ち現相に於ては死生の別があつても、本體に於ては死生の別といふものはありません。源頼朝の言葉として『和論語』に、

源頼朝

生れるも一事、死ぬるも一事、善惡ながらもまた一事なり。これを知る者は乾坤二字に自在を得るなり。

道元禪師

とありますが、更に佛教の上から申しますと道元禪師の言葉に、

生より死に移ると心得る者は、これ過りなり。生は一時の位にて、既に前あり後あり。佛教のうちに生卽不生といふ、滅も一時の位にて、前あり、後あり、これによりて滅卽不滅といふ。生といふ時には生よりほかにものなく、滅といふ時には滅のほかものなし。

とあり、

また生も一時の位にて、死も一時の位なり。例へば冬と春との如し。冬の春となることを思はず、春の夏

となることを知らぬ……。

と同じでありまして、春の夏となり、秋の冬となると見るのも、晝の夜となり夜の晝となると見るのも同じ道理で、心、此の境地に到達すれば死生はたゞこれ變化の相、其の本體に於てはもと〳〵一如であるといふ觀をなすことが出來る。東洋共通の一つの死生觀であります。

◎一　思　字

心之官則思。思字只是工夫字。思則愈精明。愈篤實。自其篤實謂之行。自其精明。謂之知。知行歸於一思字。

心の官は則ち思ふなり。思ふの字は只だ是れ工夫の字のみ。思へば則ち愈精明に、愈篤實なり。其の篤實なるよりして之を行と謂ひ、其の精明なるよりして之を知と謂ふ。知行は一の思ふの字に歸す。

心の官は卽ち思ふといふことであります。これは『孟子』の告子篇に、

心の官は卽ち思ふ。思へば卽ちこれを得る。思はずんば卽ち得ず。

とあります。思ふといふのは工夫をするといふことであります。工夫とはいろ〳〵と考へて見ることで、いろ〳〵に考へて思ひをめぐらせば、愈々愈に眞面目になつてゆく。益々懇に眞面目になつてゆく。この懇に眞面目になつてゆくことから、これを身に行ふこととなるのであり、この思ひによつて心がはつきりとなるので、此の方面から之れを知と云ふので、知と行とは結局一つの思ふといふ字から出るのであるといはれたのです。

工夫せよ

◎中　の　字

中字。最匝認。愞弱人認以爲中者。皆不及也。氣魄人認以爲中者。皆過也。故君子之道鮮矣。

中の字は最も認め匝し。愞弱の人の認めて以て中と爲す者は、皆及ばざるなり。氣魄の人の認めて以て中と爲す者は、皆過ぎたるなり。故に君子の道鮮し。

氣魄人認以爲中者固過。而其認以爲小過者。則宛是狂人態也。愞弱人認以爲中者固不及。而其認以爲不及者。則殆是醉倒狀也。

氣魄の人の認めて以て中と爲す者は、固と過ぎたり。而も其の認めて以て小過と爲す者は、宛も是れ狂人の態なり。愞弱の人の認めて以て中と爲す者は、固と及ばずして、而も其の認めて以て及ばずと爲す者は、殆ど是れ醉倒の狀なり。

この二則は中庸を得ることの必要を說かれたのであります。中といふ字は前にもしば〳〵出ましたが、天下の達道と謂はれるほどで、なか〳〵これは認め難いので、愞弱――心の弱い人は、兎角控へ目になるものですから、自分で認めて中庸を得たとしてをりますものは實際は中庸に及んでゐないものであり、之れに反

して氣魂ある勝氣の人は、兎角進み過ぎるものでありますから、自分が中庸を得て居ると思つてしてをることが、多くは出過ぎて行くものでありまして、卽ち一方は控へ目になつて中に及ばず、一方は出過ぎて中を過ぎるといふ風で、眞に中庸を得るといふことはむづかしいので、『中庸』にも、

中庸はそれ至れるかな。民能くする鮮きこと久し。

とありまして、なか〳〵得にくいものであります。

勝氣の人が認めて中庸であるとしてをるものは固より出過ぎてをりますが、その自分でも少し出過ぎたとしてをるものに至つては、非常の出過ぎで全く氣狂の沙汰の有樣であり、また氣の弱い控へ目の人が、中庸を得たと見てをりますものは、もとより及ばないのであつて、その自分で及ばずとするものに至つては全く醉ひどれの狀態であると罵られたのです。

◎精神の收斂

收斂精神時。自覺如閉聰明。然及熟後。則闇然日章。機心酬酢時。自覺聰明通達。然稔以成習。則的然日亡。

精神を收斂する時、自ら聰明を閉づるが如しと覺ゆ。然れども熟後に及べば、則ち闇然として日に章らかなり。機心酬酢の時、自ら聰明通達すと覺ゆ。然れども稔して以て習と成れば則ち的然として日に亡ぶ。

心を引締めますと自ら自分の智慧の働きを止めて、其の聰しく明かなることが閉されてゆくやうに考へられるものでありますが、此の精神收斂の修養が充分に成熟するやうになりますと、暗い心のうちに明るい光が出て、是れが日に明かに心を照らすやうになりまして、機心卽ち心を働かして、酬酢――卽ち人々に應對したり、事を處理する時には自分の智慧が自由自在に働かせるやうに思はれるものでありますが、しかしそれがだん〳〵積つて習慣となりますと、はつきりしてゐるやうであるが、日に心を收斂する力が亡びてゆくやうになるものであります。

申申夭夭氣象。收斂熟時。自能如是歟。

申申夭夭の氣象は、收斂の熟する時、自ら能く是くの如きか。

申々夭々は先に出ました心の伸々した貌であります。これは精神修養が成熟致しました時に自然に現はれる氣象であるかと思ひます。といふので、眞に伸々とした氣象を生ぜんとするならば修養功を積むほかないのであるといはれたのです。

◎寸言數則

以春風接人。以秋霜自肅。

春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら肅む。

この句は非常に簡單でありますが、我々が日常の生活に於て充分に心得べき言葉であります。即ち人に接してゆくのには春風の如く和かに、同情の心をもつて溫かくするがよい。自ら自分に反省する折には、秋の霜のやうに嚴びしく身にしみるやうにすることが必要であるといふのです。

克己工夫。在二一呼吸間一。

克己の工夫は一呼吸の間に在り。

己の我慢我情に打ち克つ、克己の工夫といふものは、なか〳〵困難なものでありますが、しかしそれは長くかゝるものではなく、今といふ一呼吸の間にすることが必要で、その時にさへ己れに克つ工夫をさへしてゆけば、充分に克己を續けてゆくことが出來るもので、腹が立つて我見の出かけた時に『此處だ』と思ふ。かういふものが欲しいと思つた時に『此處だ』と思ふ。此處だ〳〵と己に克つてゆくことが必要であります。

操則存。人也。舍則亡。禽獸也。操舍一刻。人禽判焉。可不戒乎。

操れば則ち存するは人なり。舍つれば則ち亡ぶは禽獸なり。操舍は一刻にして、人禽判る。戒めざる可けんや。

『孟子』の告子篇に孔子の言葉として『操れば即ち存し、舍つれば則ち亡ぶ』といふのがあります。その操るといふのは道德を確りと身にとつて離さないのであり、舍つるといふのは、その道德を忘れてしまふのであります。道德を操るものは人であり、道德を舍つるものは禽獸。この操ると舍つるが即ち一呼吸であり、一刻であつて此の一呼吸、この一刻の間に人と禽獸とは岐れてゆくのであるから、こゝが最も戒めなければならないところであるといはれたのです。

○

人往往有二將不緊要事一來語者。我輒易生二傲惰一。太不可。渠曾未二經一事。所以認二閑事一做二緊要事一。我緩頰諭之可也。以二傲惰一待之。失德也。

人は往往にして不緊要の事を將て來り語る者有り。我れ輒ち傲惰を生じ易し。太だ不可なり。渠れは曾て未だ事を經ず、所以に閑事を認めて緊要事と做す。我れ緩頰之を諭すは可なり。傲惰を以て之れを待つは失德なり。

世間には、時々、さほど必要でもないことをもつて參りまして樣々に話する人があります。その時には自分は何んとなく馬鹿々々しく考へて、先方を蔑り、またその話を聽くのを煩さく思ふものでありますが、これは好くないことで、その人がそれは未だ經驗がなくして、つまらないことを大切なことのやうに考へてをるのでありますから、その時には自分はゆつくりと、『君はさう思ふが、實はさういふことは世間に澤山あることである』とか、『さほどそれは大切なことでない、それよりもモット大事なことがあるとか、緩頰――にこやかにして、これを諭すのはよいが、先方を侮り蔑みこれを馬鹿にしたり、また煩さがつて、これに對するとい

ふやうなことをしては自分の德を失ふものであると戒めたのです。

○

人生於地而死於地。畢竟不能離於地。故人宜執地德。地德。敬也。人宜敬。地德。順也。人宜順。地德。簡也。人宜簡。地德。厚也。人宜厚。

人は地に生れて地に死すれば、畢竟地を離るゝ能はず。故に人は宜しく地の德を執るべし。地の德は敬なり。人宜しく敬すべし。地の德は順なり。人宜しく順なるべし。地の德は簡なり。人宜しく簡なるべし。地の德は厚なり。人宜しく厚なるべし。

地を離れて人なし

吉田松陰の言葉に、

地を離れて人なく、人を離れて事なし。凡そ人事を究めんとせば必ず地の利を究むべし。

とありますが、人は地に生れて地に死ぬので、畢竟地を離れることは出來ないものである。だから地の德といふことをよく考へる必要があります。地の德とは何であるかと云へば、それは萬物をして其の所を得せしむる敬であるから人は敬を忘れてはならぬし、地の德は順、天の時に從つて草木が發生し、萬物が負載せられてをります。故に人も亦柔順でなければなりません。更に地の德は簡單であるから人も亦簡單でなければならぬ。地の德は厚いのであります。故に人も宜しく手厚く、情愛深くなければならぬと敬、順、簡、厚この四つは地に生れ、地に死するところの人間のもたねばならぬ道德であるといはれたのです。

◎一の字、積の字

一字。積字。甚可畏。善惡之幾。在初一念。善惡之熟。在積累後。

一の字、積の字、甚だ畏る可し。善惡の幾も初一念に在りて、善惡の熟するも積累の後に在り。

世に最も畏るべきものは一の字と積の字であると思ひます。善と云ひ、惡と云ひ、その岐れ目は初めの一念にある。それが積り積つて大きな善となり、大きな惡となるので、丁度立派な綾も錦も、その初めは一筋の糸から出來上るやうに、非常な善行とせられるものも初めはこの一念からであり、白樂天の『繡佛の偈』に、

繡佛の偈

善は一念に始り、念々相屬し
繡は一縷に始り、縷々相屬し
功德圓滿、相好具足す、

とあるのも此の意に外ならぬのです。

これに反して塵も積れば山となるの譬へで、少しの惡も積り積つて如何とも爲し難き大罪惡ともなるものであります。それは恰も千里の道を行くのにも一足々々行くと同じやうに、その一足の方面違ひが東に行く者が西に行き、西に行く者が東に行く、そこに大きな差を生ずるのであります。だからこの一といふ字と積といふ字は一番畏るべきであると思ふのであるといはれたのです。

○

其難其慎。國家無不慮之患。惟和惟一。朝廷無多事之擾。

其れ難んじ其れ慎まば、國家に不慮の患無く、惟れ和し惟れ一ならば、朝廷に多事の擾無からむ。

『其れ難んじ』とありますのは、何事にも大事をとつて輕々しくしないことで、何事にも大事をとつて慎しんでゆけば、國家には不慮、即ち慮はざる憂ひはないのであり、『惟れ和惟れ一』で、朝廷の中の人々が和して其の見る所を一にして行けばいろ〳〵な事に擾はされるやうな心配はないものであるといはれたのです。

○

余讀明紀。至其季世。君相匪其人。宦官宮妾用事。賂遺公行。兵馬衰弱。國帑則空虛。政事只是料理貨幣耳。東林不得不黨。闖賊不得不蠢。終馴致胡滿乘釁簒夏。嗟嗟。後世可不知所戒乎。

余明紀を讀むに、其の季世に至りて、君相其の人に匪ず。宦官宮妾事を用ひ、賂遺公行し、兵馬衰弱し、國帑は空虛となり、政事は只だ是れ貨幣を料理するのみ。東林も黨せざるを得ず、闖賊も蠢せざるを得ず。終に胡滿の釁に乘じ夏を簒ふことを馴致す。嗟嗟、後世戒むる所を知らざる可けんや。

鈔錢出而明衰。鈔錢盛而明亡。

鈔錢出でて明衰へ、鈔錢盛にして明亡ぶ。

これは明の歴史を讀んだ折の感想であります。明紀といふのは清の陳鶴といふ人が作りました明の國の歴史であります。その明の末の世になりますと、君は賢明でなく、宰相は賢臣でなく、總てその人を得てをりませず、奥向きに使はれてをるところの宦官や女達が政治のことを行ひまして賄賂が盛んに行はれますし、兵馬は弱り衰へて、國の財政は日に疲弊して國庫は全く空しくなつてゆくものですから、政事と云へばたゞ貨幣を料理する。やりくり算段するの外はないと云ふ狀態となつて居ります。かゝる狀態でありますから、政治の局に當る者に反對した東林黨といふやうな朋黨も起りますし、また闖賊――これは一種の馬賊のやうなもので、やはり國家を亂すところの輩でありますが――それが蠢き動かざるを得なくなつて來た。其の擾亂の隙に乘じて胡滿――これは北方の滿洲から興つた所謂愛親覺羅氏でありますが――これが來て、終に中華たる漢民族の天下は滿洲人の手に歸し、明國は亡びたのであります。こゝに夏とありますのは、支那の中國のことを指したのであります。これが明の滅亡の狀態でありますから、後世政事を執る者はこゝに戒めなければならないことがあるのであります。

次の句もやはり明朝が亡びる狀態を指したのでありまして、鈔錢といふのは紙幣のことであります。紙幣を亂發して明の國は衰へたのであります。この紙幣が盛んに使はれるやうになつて、この國は亡びたのであります。即ち國庫に何等の準備なくして紙幣を發行したからこの狀勢に立至つたのであります。

○

以直報怨。要善看。只是以直待之。不相讎耳。

直きを以て怨に報ゆとは、善く看ることを要す。只だ是れ直きを以て之に待つ。相讎せざるのみ。

『論語』の憲問篇に或る人が『徳をもつて怨みに報ゆること如何』と問うたのに對して、孔子は『それでは何をもつて徳に報ゆるか』と言はれて『直をもつて怨みに報い、徳をもつて徳に報ゆ』といふことを言はれました。この一句の『直をもつて怨みに報ゆ』といふことは、餘ほど氣を付けてみることが必要であります。たゞ直をもつてこれに對するだけでは彼の怨を以て怨に報ゆるやうに相仇敵視しないといふだけで徳を以て報ゆるやうになるべきではないのであります。

◎養生の法

養生之道。只從自然爲得。有意於養生。則不得養生。譬之蘭花之香。嗅則不來。不嗅則來。

養生の道、只だ自然に從ふを得たりと爲す。養生に意有れば則ち養生を得ず。之を蘭花の香に譬ふ。嗅げは則ち來らずして、嗅がざれば則ち來る。

養生の法はたゞ自然に從ふのが一番よいと思ふ。養生といふことに氣をつけて、かうしては惡い。かうしてはならぬといふやうなことを言うてをつては、それでは養生が出來なくなるものである。譬へてみれば蘭の花の香は嗅げば香はずして、嗅がうとしなければ、その香が自然に來たるやうなものであるといふのです。昔、江村專齋といふ人は百歳まで生きた人でありますが、後水尾上皇がこの老人に對して長生の術をお訊きなさいました時に、

『私はたゞ平生一つの些の字をもつてをります。飲食も少なく、苦勞も少なく、養生も少なくします。このほかに別に方法があらうとも思はれません』

とお答へ申したのであります。支那の孫思邈といふ人の十二少の說といふのがありまして、

一些字

十二少

善く生を攝する者は、常に思を少くし、念を少くし、欲を少くし、事を少くし、語を少くし、笑を少くし、愁を少くし、樂を少くし、喜を少くし、思を少くし、好を少くし、惡を少くせよ。この十二少を行ふは性を養ふの都契なり。

とあります。これらのことは別に講じた『夜船閑話』の方をお參照願ひます。

◎下情通達

通下情三字。當做彼我兩看。人主能通達下情。是通在我。使下情各得通達。是通在彼。如是透看。眞所謂通也。

下情に通ずるの三字は、當に彼我の兩看を做すべし。人主能く下情に通達す。是れ通ずること我れに在り。

下情をして各通達するを得しむ。是れ通ずること彼れに在り。是くの如く透看すれば、眞に謂はゆる通ずるなり。

下情に通ずるといふことは、自分だけのことでなく、常に自分と相手との兩方から見なければならないので、人の君たり主人たる者がよく下情に通達するなぞといひますが、それはその通ずるといふことが自分にあるので、下情をして各々通達するを得せしむるといふ相手方を主としたのと異つて居ります。下情をして通達せしむるは彼にあつて我にはないのでありますから、此の兩方に就て上意下達と下意上達と互に通ぜねばならぬので、この通の字をよく看透してすれば眞に通ずることが出來るのであります。

◎難事に處する道

凡遇大硬事。不消急心剖決。須姑舍之。宿一夜。於枕上粗商量一半。齋思而寢。及翌日清明時。續思惟之。則必恍然見一條路。就卽義理自然湊泊。然後徐區處之。大概不致錯悞。

凡そ大硬事に遇はば、急心もて剖決するを消ひざれ。須らく姑く之を舍くべし。一夜を宿し、枕上に於て粗商量すること一半にして、思を齋らして寢ね。翌旦の清明なる時に及んで、續きて之を思惟しなば、則ち必ず恍然として一條路を見て、就卽ち義理自然に湊泊せん。然る後に徐に之を區處せば、大概錯悞を致さじ。

凡そ大硬事——硬は困難なことを意味するのでありますから、凡そ非常に困難なことに遭つた場合には、急にこれを剖決——卽ちはつきりと解決しようと思つてはならんのであります。暫くこれを措いて、一晩ゆつくり考へて、寢についてから先づその半分位までをいろ〳〵に考へてみて、眠に就き、翌朝眼が覺めて頭惱のはつきりした時に續いてこれを考へてみると、必ずそこに恍然——朧氣ながら一つの解決の道筋が見えて來て、義理——道理、筋道が自然にそこに湊泊と湊に船の集るやうに集つてくるやうになるのであるからそれから後、靜かにこれを區分し處理してゆくといふことにすれば、大體過りを致すやうなことはないものであるといふのです。

急いては事を仕損ず

○

實學人。志則美矣。然往往禁讀書。是亦因噎廢食。

實學の人、志は則ち美なり。然れども往往にして讀書を禁ず。是れ亦噎に因りて食を廢するなり。

實學卽ち實際を貴ぶ學問。この實行を貴ぶことを學問とする人は其の志は甚だ立派であるが、其の結果往往書物を讀むことを禁ずるやうなことがあります。ただこれは噎——むせぶからと云つて食物を廢するやうなもので、書物ばかり讀んで實行を疎かにする人があるからとて、之れを廢してしまつては、むせたからとて物を食はずに居るといふと同じで、身體を保つことが出來ません。書物を讀むことがなくしては、その實行の基礎を養ふの素地がないのですから讀書を禁ずるといふやうなことは決して實行の學をも進むる所以で

はありません。

○

易以天説人。書以人説天。

易は天を以て人を説き、書は人を以て天を説く。

経書と史書

『易經』は天の理を以て人のことを説き、『書經』は人のことをもつて天道を説いたもので、この二つはいづれも讀まねばならぬ書物であるやうであります。それを更に廣げて一切の經書は天理をもつて人のことを説き、一切の史書は人のことをもつて天理を示したものと見ることも出來ると思ふのでありますが、こゝでは『書經』と『易經』との必要であることを示されたのであります。

◎歴史を讀め

人一生履歴。除幼時與老後。率不過四五十年間。其所聞見。殆不足一史。故宜讀歴代史書。上下數千年事迹。羅在胸臆。不亦爲快乎。著眼處最在人情事變上。

人の一生の履歴は、幼時と老後とを除けば、率ね四五十年間に過ぎず。其の聞見する所は、殆ど一史だにも足らず。故に宜しく歴代の史書を讀むべし。上下數千年の事迹、羅ねて胸臆に在らば、亦快たらざらんや。眼を著くる處は、最も人情事變の上に在れ。

時代は歴史の縮寫

人の一生の踏み來たつたところの經歴は子供の時と年寄つてから後とを除いてしまへば率ね四、五十年の間に過ぎません。その間に見聞きするところは殆んど一冊の歴史にも足らんほどでありますから、人はよろしく歴史の書物を讀むがよろしい。上下數千歳のことは皆な此の歴史の上に現はれてをるのでありますから、この歴史が羅列せられて自分の胸のうちにあれば、實に愉快であると云はねばなりません。其の歴史を讀むのには人情や事件がどう變遷してゆくかといふことに着眼することが必要であります。『時代は歴史の縮寫』といふ言葉もありまして、今日の時代といふものも實に過去の歴史が縮寫せられてをるやうなものでありますから、其の歴史によつて學ぶ所は又現代を洞察するの見識ともなるものであります。

○

余常讀宋明人語錄。有可肯。有不可肯。有似可信。有似可疑而不可疑。反覆讀之。殆如與諸賢同堂親相討論。眞是尚友有益。

余常に宋明人の語錄を讀むに、肯ふ可き有り。肯ふ可からざるあり。信ず可きに似て信ず可からざる有り。疑ふ可きに似て疑ふ可からざる有り。反覆して之を讀むに、殆ど諸賢と堂を同じうして親しく相討論するが如し。眞に是れ尚友にして益有り。

自分は常に宋や明の時代の人の書かれた語錄を讀みますが、その中には贊成の出來るものもあり、また贊成の出來ないものもあり、また信じてよいやうであつて信ずることの出來ないものもあり、疑ふべきやうであつて疑ふことの出來ないものもあるが、これを繰返へし繰返へして讀んで行くと、殆んど宋明の賢人達と一つの部屋で親しく相會し相論じてをるやうに思はれる。かういふやうに古人を友とするは實に人生に益のあることだと思ふといふのです。此の尙友のことは前にお話申上げましたから、こゝに略します。

○

老莊。固與儒不同。渠只是了一箇智字。老子深沈。莊周別出機軸。

老莊は固と儒と同じからず。渠れは只だ是れ一箇の智字を了するのみ。老子は深沈にして、莊周は別に機軸を出せり。

支那には前にも申しました通り老莊を主とする道教の學問と、孔孟を主とする儒教の學問とがあります。此の老莊の學は固より孔孟の儒教と同じくありませんで、一箇の智の字を——物識り、知識——その智の字を了解してをるばかりで、老子は深く思ひを凝して居り、莊周——周は莊子の名であります——は老子から出て別に一つの方面を開拓してをるのであると見られたので、別に機軸とあるのは新しく別な工夫といふほどの意味であります。

◎世界都て惻隱の心

知滿腔子是惻隱之心。則知滿世界都爲惻隱之心。宇宙閒只是一實。更無虧欠。

滿腔子是れ惻隱の心なるを知れば、則ち滿世界都べて惻隱の心たるを知る。宇宙閒只だ是れ一實にして、更に虧欠無し。

滿腔子といふのは身體中といふことであります。此の身體中が、みな惻隱卽ち物を痛み憐れむ心であるならば、この世界中がみな憐れみ痛む心となることを知るといふので、此の惻隱の心を解り易く云へば『思ひやりの心』であります。一軒の家で親が子を思ひやり、子が親を思ひやる。親子兄弟みな思ひ合へば、どんな貧乏暮しでも春風の吹くやうな溫かい家庭が出來ます。この自分の親子兄弟を思ふ心を更に自分の召使ひに及ぼし、古人が、

おもひやりの心

心せよ使ふも人の思ひ子を
我が思ひ子に思ひ較べて

自分の子を愛する如く、他人の子を愛する。斯の如き思ひやりを更に廣めて總ての人に盡し、否、たゞ人に對してのみならず家に飼ふ犬や猫に對してもこの思ひやりの心があるならば、犬は尾を振り、猫は喉を鳴して我に親しむやうになる。彼の一茶の句に、

我と來て遊べや親のない雀

また、

寢返へりをするぞわきよれきりぎりす

といふやうな風に、小さな動物にまで憐みをかけ、今一層擴めて動物のみでなく、道の傍に咲いてをる一本の菫の花にも峰に立つ一本の松にも、この思ひやりの心をもつて見ますと、天地悉く同情の心をもつて見ることが出來、

おもしろや散るもみぢ葉も咲く花も
　　自らなるのりの御姿

と或る人が詠んだやうに宇宙間が愛によつて充ち滿ちて更に缺けるところがないやうになるのであります。

○

人須レ認二心在一腔子裏一。又須レ認二心在一腔子外一。

人は須らく心の腔子の裏に在るを認むべく、又須らく心の腔子の外に在るを認むべし。

心は内外にあり

人は自分の心が我が此の胸のうちにあるのを認めなければなりませんし、また自分の心が自分の身の外にあるといふことをも認めなければなりません。即ち我々の心といふものは常に此の身の外にあるものによつて動かされ、それが身の内にある心に影響し來り、身の内の心の働きの外に現はれてさまざまに動くことをも認めるを要するのです。

○

鱗介之族。以レ水爲レ虛。不レ知二水之爲一實。

鱗介の族は水を以て虛と爲して、水の實たるを知らず。

天地の道理は至る處にあり

鱗介は魚類のこと、これは水の中に生活してをりますが、水といふものが別にあるとは思つてをりません。丁度鳥が空氣中にあつて空氣のあるのを忘れてゐるやうなものであります。我々人間も亦この太陽の下で空氣の中にあつて、その空氣を忘れてをるので、天地の道理は到る處に充ち滿ちてをるのに、人は其の中にあつて之れを忘れて居ますのを諷示したのです。

○

火滅。水涸。人死。皆迹也。

火は滅し、水は涸れ、人は死す。皆迹なり。

火は消えますし、水は涸れてゆきます。人も亦死んでゆく。これは自然の現象であるといふのですが、その裏面には、しかし火は消えても火が無くなつたのでなく、水が涸れても水が無くなつたのでなく、人が死んでもそれで無くなつてしまつたのではないといふ意味を現はしてをるのであります。

○

志氣欲レ鋭。操履欲レ端。品望欲レ高。識量欲レ豁。造詣欲レ深。見解欲レ實。

志氣は鋭からんことを欲し、操履は端しからんことを欲し、品望は高からんことを欲し、識量は豁からんことを欲し、造詣は深からんことを欲し、見解は實ならんことを欲す。

われ〳〵の修養の希望とする所は、志氣即ち心の元氣は鋭くなければなりませんし、操履即ちとり守り踏み行ふことは端正でなければなりませんし、品位や人望は高くなければなりませんし、識見や度量は豁くなければなりませんし、造詣――造も詣も至るで、ものを研究したり、知つたりすること――これは深く〳〵まで至らねばなりませんし、見解即ちもの事の見方や解釋は眞實であらねばならんといはれたのであります。

○

余固無藝無能。然不レ厭二人之有二藝能一。毎レ諦二觀之一。但見二其理無一非二易理一。

余は固と無藝無能なり。然れども人の藝能有るを厭はず。之を諦觀する毎に、但だ其の理の易理に非ざる無きを見る。

自分は固とより無藝無能であるけれども、人の藝能のあるのを別に厭ふ氣はしない。常につく〴〵とこれを見てをるが、何れの藝能を觀ても、結局は易の理に外れたもののないといふことが知れる。といはれるのです。こゝに易の理とあるのは天地の理法といふのと同じ意味に見てよろしいと思ひます。

◎身體と易理

人一身以二上下一分二陰陽一。上體爲レ陽。下體爲レ陰。降二上陽於下體一。升二下陰於上體一。則上虛下實。函成二地天泰一。又以二前後一分二陰陽一。前面爲レ陽。後背爲レ陰。收二前陽於後背一。移二後陰於前面一。則前虛後實。亦函成二地天泰一。

人の一身は上下を以て陰陽を分てば、上體を陽と爲し、下體を陰と爲す。上陽を下體に降し、下陰を上體に升せば、則ち上は虛にして下は實、函して地天泰を成す。又前後を以て陰陽を分てば、前面を陽と爲し、後背を陰と爲す。前陽を後背に收め、後陰を前面に移せば、前は虛にして後は實、亦函して地天泰を成す。

面背又各分二三段一。乾三陽位在レ前。初爲レ震。中爲レ坎。上爲レ艮。坤三陰位在レ後。初爲レ巽。中爲レ離。上爲レ兌。其陽在二顏面一者。收二之背上身柱一。與レ陰相代。則成二前兌後艮一。而面冷背暖。胸陽收二之背中脊髓一。與レ陰相代。則成二前離後坎一。而胸虛背實。腹陽收二之背下腰上一。與レ陰相代。則成二前巽後震一。而腹柔畜レ氣。腰剛聚レ精。前三陽皆與二後三陰一相代。則函成二前坤後乾一。而心神泰然。呼吸與二天地一通。余從二

艮背工夫得之。

面背は又各三段に分つ。乾の三陽位、前に在り。初を震と爲し、中を坎と爲し、上を艮と爲す。坤の三陰位、後に在り。初を巽と爲し、中を離と爲し、上を兌と爲す。其の陽の顏面に在る者は、之を背上・身柱に收め、陰と相代れば、前兌・後艮を成して、面冷かに背暖なり。胸陽之を背中・脊髓に收めて、陰と相代れば、前離・後坎を成して、胸は虛にして背は實なり。腹陽之を背下・腰上に收めて、陰と相代れば、前巽・後震を成して、腹は柔かにして氣を畜へ、腰は剛くして精を聚む。前の三陽皆後の三陰と相代れば、函して前坤・後乾を成し、心神は泰然として呼吸は天地と通ず。余は艮背の工夫より之を得たり。

身體と陰陽

此の二則は易によつて人體の修養を說いたので、少し專門的に亘りますが、人の身體を上部と下部とに分てば、上體は陽であり、下體は陰であります。此の上體の陽を下體に降し、下體の陰を上體に升しますと、上は虛にして下は實なる地天泰の卦を生じます。地天泰と申しますのは乾下坤上で、乾たる天氣が下降し、坤たる地氣が上昇して、乾たる陽と、坤たる陰とが交和して、能く雨澤を成して萬物を育成する安泰の象で、函はフクム又ツヽムと訓し、陰陽二氣の交和する義でありまして、之れが泰の卦を成すのであります。此の泰の卦を人事に用ふれば、上意下達し、下意上達する太平の象といふべきであります。

地天泰

若し又人體を前後の兩面に分ちますれば、前面は陽、後面は陰であります。前の陽氣を後の背部へ、後の背部の陰を、前の陽に移して行けば血氣全身にめぐり、前にある陽は後へ廻つて前虛後實となつて、身體安泰なるべき地天泰の卦を成すといふのです。

地天泰の泰は安なり大なり寬なりとあり『周易釋故』に、地天泰卽ち乾下坤上、

☷☰

此の卦を見んには一重の口訣あり、其の訣といふは、此の卦の乾坤の二卦を直に天地の實體として見る時には、これ天地反覆せるものにして其の義を得ること能はざることなり。故に此の卦の乾をば天氣とし坤をば地氣と觀ることなり。其の天氣下降し地氣上昇する時は、乃ち陽陰二氣の交はり和することなり。其の陽陰の二氣交はり和する時には則ち善く雨の澤ひを成すことなり。其の雨の仁澤、能く草木百物を生育するが故に、此の卦を泰と名付けられたることなり。彖傳に天地交、萬物通也と云ふこれなり。又乾は君なり、坤は臣なり、臣よく敬して服し順ひ、君よく信じて愛し任ず、君臣志交れば卽ち國家能く治るなり。故に泰と名け玉へり。彖傳に、上下交而其志同じと云へる考へこれなり。

と解してあります。

次ぎの句は更に細分して、面と背とおの〳〵三段に分つと、乾の三陽位は前にあり、これを震、坎、坤といたします。卽ち、

☶ 艮　☵ 坎　☳ 震

☱ 兌　☲ 離　☴ 巽

とし、坤の三陰位は後にあり、之れを巽、離、兌とします。

之れを相交和して、陽の前即ち顔面にあるものを後部の背の上や脊柱に收めますと、陰陽相代つて前兌後艮となつて面冷やかに背煖まり、胸の陽を背中や脊髓に收めますと、これ亦陰陽相代つて、前離後坎となり、胸虚しく背實す、腹の陽は背下や腰の上に收めますれば、これが前巽後震となつて腹柔かに氣を蓄へ、腰剛く精を聚むる狀となり、前の三陽皆な後の三陰と相代れば前坤後乾と成つて、身心泰然として呼吸天地と通ずるに至る。これを艮背の工夫といひ、一齋先生は之れによつて得たといはるゝ一種の精神統一法であります。前に引用しました『周易釋故』には此の艮の卦即ち『易經』に、

艮背の工夫

其の背に艮るべし、其の身を獲ざるべし、其の庭を行くも、其の人を見ざれば咎なし。

とあるを解して、

凡そ人の耳目口鼻、皆前面に具はり在て、各皆其掌る所の作用有つて、其觸るゝ所に從うて、心を動かさしむる者たり。且つ特り耳目口鼻のみに非ず。手足の動作運轉に於けるや、二六時中、殊に閑寂ならざるものとす。さるに其の中に就て見れば、惟り背脊のみ觸れ動くの係累無くして、常に能く靜に止まるものとすべし。是の故に人の心をして常に背の如くにあらしめば、長く過失有ること無からん。これ實に止まるの善き地なる者たり。故に艮其背と云ふ蓋し此の卦は内外ともに艮止の象義たるを以て、無思無爲の寂然不動の三昧邪の義を示し曉し玉へるなり。

と釋してあります。

○

進歩中不忘退歩。故不躓。臨之繇曰。元亨利貞。至于八月有凶。是也。

進歩中に退歩を忘れず。故に躓かず。臨の繇に曰く、元に亨る貞に利し。八月に至りて凶有り、とは是れなり。

渡世は歩行の如し

進歩のうちに退歩を忘れなければ躓くものでない。よく言ふ譬へですが、人間の世を渡るのには足で歩むやうなもので、一方を出す時には一方は停つてをる。停まつてをる一方を出せば他方はじつとしてをるのであります。若し歩を進めることを知つて停まることを知らないと、結局行き切つて退くの外はないのであります。易の臨の卦に『元に亨る、貞に利し』といふのは八月が陽氣が盛んで、その陽が消えやうとして凶が現はれやうとしてをるのでありますから進むのに急に、退くことがなければ躓く、失敗するといふことは、この八月の臨の卦について語られたのであります。

○

先天而天不違。廓然太公。未發之中也。誠也。後天而奉天時。物來順應。已發之和也。敬也。凡無事時當存先天本體。有事時當著後天工夫。先天後天。要其理則非二矣。學者所宜致思。

天に先ちて天違はざるは、廓然として太公なり、未發の中なり、誠なり。天に後れて天の時を奉ずるは、物來りて順應するなり、已發の和なり、敬なり。凡そ事無きの時は、當に先天の本體を存すべく、事有る

の時は、當に後天の工夫を著くべし。先天、後天、其の理を要むれば二に非ず。學者の宜しく思を致すべき所なり。

天運のめぐり來るのを豫知して、これを行つて天に違はず、廓然卽ちひろ〳〵として至公至平ならば、『中庸』の『未だ發せざる之れを中といふ』とある中であり、誠であります。天運の趣くところに從つて天の時を奉じ、これに順應してゆくといふのは『中庸』の『發して節に中る之れを和といふ』とある和であり敬であります。されば凡そ事のない時は先づ先天の本體である誠を有してをるがよい。事のある時は後天の工夫をつけて和と敬とを以て處理するがよい。其の誠と敬と其の理を推し究めれば二つではない。學者よろしくこれを考ふるべきであるといふのです。

○

人情事變。或做深看處之。卻有失當者。大抵輕看區處。中肯綮者不少。

人情、事變、或は深看を做して之を處すれば、卻て失當の者有り。大抵輕看して區處すれば、肯綮に中る者少からず。

世の中にをる樣々の人と人との間に起る人情や事件は深く考へてからこれを處分して、かへつて間違ひを招くことがあるもので、大抵の事は輕るく見て、もつて夫々に處分して肯綮に中る者が少くないのである。

肯綮といふのは骨と肉との結着するところで、事の要所急所を言ふのであります。『下手の考へ休むに似たり』で、深く考へて失策を來し、輕るく考へて、うまく處理の出來るものが多いといふ、事に處する一つの觀察であります。

○

將處事。當先略視其大體如何。而後漸漸以至精密處。可也。

將に事を處せんとせば、當に先づ略其の大體如何を視て、而る後漸漸に以て精密の處に至るべくは可なり。

先づ大體を見よ

凡そ事件を處理せんとするのには、先づ大體がどういふ風であるかを見て、それから後、次第々々に詳しく細かな所に至るがよい。その大體を見ずして、最初から細かい所に目をつけては、充分にこれを處分することが出來るものではないといふのです。

○

物得其所爲盛。物失其所爲衰。天下有人而無人。有財而無財。是謂衰世。

物其の所を得るを盛を爲し、物其の所を失ふを衰と爲す。天下人有りて人無く、財有りて財無し。是れを衰世と謂ふ。

適材適所

物がそれ〴〵適當な所に置かれましたものはこれを盛と云ひ、物がその適當な所を失つたことを衰と云ひますので、これを人間に就ていへば天下に人材があつても、その人が適當な所に置かれてをらなかつたら、人がないのも同じであり、天下は財――金があつても、それが適當な所に置かれてをらなかつた折には金がないと同じやうなもので、人は適材を適所に置き、金は適當な分配を以て適所にあらしむるのが必要で、若しそれが出來ない場合には之れを衰世――即ち衰へた世といふのであるといふのです。

○

處晦者能見顯。據顯者不見晦。

晦に處る者は能く顯を見、顯に據る者は晦を見ず。

晦――即ち暗い所にをる者はよく明――明るい所を見ることが出來ますが、顯――即ち明るい所にをる者は暗い所を見ることが出來ないものであります。芝居の舞臺にしましても、照明の行き屆いた所では、舞臺にをる者を見物席からは見えても、舞臺からは見物は見えないといふやうに、世の中に顯はれてをる高位大官の者は世人がよくこれを見てをりますが、高位大官にをつては世の中の事が充分に見えるものではないと上に立つ人の能く晦處暗處を洞察すべき必要を示したのです。

○

過不及

古人謂天下事過則有害。雨澤非不善也。過多則澇。其爲害也與旱同。今有意爲善。而任心自是者。皆雨澤之澇也。余亦往往見若人。然非他人也。不可不自警。

古人謂ふ、天下の事過ぐれば則ち害有りと。雨澤善からざるに非ざるなり。多きに過ぐれば澇す。其の害たるや旱と同じ。今善を爲すに意有て、心に任せて自ら是とする者は、皆雨澤の澇なり。余も亦往往若き人を見る。然れども他人に非ざるなり。自ら警めざる可からず。

古人の言葉に凡そ世の中のことは、その度を過ぎれば害があるといふことがあります。が、それは丁度雨の潤ひは無くてはなりませんけれども、これが多きに過ぎれば水浸しになつて（澇は水浸しといふ義であります）その害は雨の降らない旱魃と同じことになるものであります。今、善を行ふ志がありましても、たゞ心に任せて自ら良いとするところのものを無闇に行ふことは丁度多すぎて水浸しとなるやうなものである、過ぎたるは及ばざるが如し、自分も時々にかういふ人を見るが、しかしこれは決して他人事ではない。自分でも自ら戒めなければならないことであると自警せられたのです。

◎自然に親め

終年奔走於都城内。不自知天地之爲大。時可泛川海。時可登邱壑。時可

行二蒼莽之野一。此亦心學也。

終年都城内に奔走すれば、自ら天地の大たるを知らず。時に川海に泛ぶ可く、時に邱壑に登る可く、時に蒼莽の野に行く可し。此れも亦心學なり。

年がら年中、都會のうちに奔走して、自ら天地の大なるものたるを知らない者が多いのですから、かういふ連中は時々川や海に泛び、時には邱――丘、壑――山で、丘や山に登り、時には蒼々としたところの野に行つてみるがよい。これも心の學問であり、精神修養の一つである。即ち都會の紛擾を避けて、山水自然の大を知るべきことを言うたのであります。

踢二躋於城市紛鬧之衢一。不レ知二春秋之偉觀一。逍二遙於田園閒曠之地一。實見二化工之無窮一。余嘗有レ句曰。城市春秋淺。田園造化忙。自謂非二瞞人語一。

城市紛鬧の衢に踢躋すれば、春秋の偉觀を知らず。田園閒曠の地に逍遙すれば、實に化工の窮り無きを見る。余嘗て句有りて曰く、城市春秋淺く、田園造化忙しと。自ら謂ふ、人を瞞する語に非ずと。

これは前の語の續きと見てもよいので、市街のごたゞくとした町中に踢躋――踢はせぐくまり、躋は地にぬきあしするといふこと――と、ぴくゞくして離礙してをる者は、春や秋の大いなる天地の美觀を見ることが出來ない。こゝに春秋とありますが、何も春秋に限つたことではない。春夏秋冬、春は花、夏は綠蔭、秋は紅葉あり、冬は枯野の風景があります。これは田園の閒曠――廣々とした地を散歩して、天地造化の仕事や。姿を見るがよい。自分は嘗て『城市春秋淺く、田園造化忙し』といふ句を詠んだことがある。これは決して人を瞞着するの語ではない。實に自然に親しむといふことが、修養の一つであることをいうたのであるといはれるので、此の山水の遊びに就ては前にも擧げました貝原益軒の岐蘇路の記に

一日の勝に遊べば一日の神仙

いにしへ人、一日の勝に遊べば一日の神仙となるといへれば、わが愚かなる心のけがれも、浮世の塵も日頃經て佳境を過ぎ行くほどに忘れぬ。生きて堯舜の仁にあひて嶺南の遊をなすことを得たりと、東坡がいへる如く、大君の御めぐみによりて、太平の世に生れ、此樂を得ることといとめでたし。遊は其の一時のながめのみかは、身を終るまで折々に其所其所のありさまを思ひやれば、又目のあたり見る心地して長き思ひ出とぞなる。

とあるのを、こゝに再錄して自然に親むの要を示して置きます。

◎大言者は小量

有二好爲一大言者一。其人必小量。有二好爲一壯語者一。其人必怯懦。唯言語不レ大不レ壯。中有二含蓄者一。多是識量弘恢人物。

好みて大言を爲す者有り。其の人必ず小量なり。好みて壯語を爲す者有り。其の人必ず怯懦なり。唯だ言語の大ならず壯ならず、中に含蓄有る者、多くは是れ識量弘恢の人物なり。

世間にはよく大きな事をいふ人がありますが、さういふ人には、却つて器量の小さく襟度の狹い人が多いものであり、また好んで壯んに強さうなことをいふ人があります。たゞ云ふことが大きくなく、またえらさうでなく、其の話の中に含蓄――多くの意味を含んでをるやうな事をいふ人は多くはこれは識見も度量も弘恢――ひろい――人物であると思はれるといはれたのです。

◎人生苦樂

人生有貴賤。有貧富。亦各有其苦樂。不必謂富貴樂而貧賤苦。蓋自其苦處言之。何莫不苦。自其樂處言之。何莫不樂。然此苦樂亦猶在外者也。昔賢曰。樂者。心之本體。此樂不離苦樂之樂。亦不墜苦樂之樂。蓋其處苦樂而超苦樂。安其所遭而無外慕。是眞樂也已。中庸所謂君子素其位而行。不願乎其外。無入而不自得者。是也。

人生には、貴賤有り。貧富有り。亦各其の苦樂有り。必ずしも富貴は樂しくて、貧賤は苦しと謂はず、蓋し其の苦處より之を言はば、何れか苦しからざる莫からむ。其の樂處より之を言はば、何れか樂しからざる莫からむ。然れども此の苦勞も亦猶ほ外に在る者なり。昔賢曰く、樂は心の本體なりと、此の樂は苦樂の樂を離れず、亦苦樂の樂に墜ちず。蓋し其の苦樂に處りて、而も苦樂に超え、其の遭ふ所に安んじて、而も外に慕ふこと無し。是れ眞の樂のみ。中庸に謂はゆる、君子は其の位に素して行ひ、其の外を願はず。

あつても心配、なくても苦勞

入ろとして自得せざる無しとは、是れなり。

人の世には貴賤貧富の別がありまして、それに各々苦と樂とがあつて、必ずしも富貴のものが樂しくて、貧賤の者が苦しいといふやうなものではありません。若しその苦しいといふところから云へば『金があつても心配、無くても苦勞』といふ諺がある通り、富める者にも貧しき者にも苦しみがあり心配があるのでありますし、その樂しいところから云へば金殿玉樓の樂しみもあれば、夕顏棚の下涼みにも樂しみがあるので、貴賤貧富といふことを離れて苦樂といふことは別なところがあると思ふのであります。昔の賢人王陽明は『樂は心の本體である』と申してをりますが、世の中の苦樂は皆な相對して居りまして、『苦樂はあざなへる繩』といはれて居る通り、苦を離れて樂なく、樂を離れて苦はないのでありますが、苦樂の樂は眞の樂でなく、眞の樂は心の本體にありますので、卽ち苦樂の樂を離れず、苦樂の樂に墜ちず、心の本體に絕對の樂を抱き、苦樂に居つて苦樂を超越し、その出遭ふ所に安んじて外に慕ふこともないのが眞の樂みであります。中庸に『君子は其の位に素して行ひ、其の外を願はず』とありますが、自分自身の地位、自分自身の職分に安んじて、別に其の外を願はぬならば自ら其の心に樂みを得て居ることが出來るのでありますが、それがナカ〳〵困難なのであります。此の點は別講『菜根譚』の方を見られると、さま〴〵の感想が述べられて居ります。

◎人生行路

人涉世如行旅然。途有險夷。日有晴雨。畢竟不得避。只宜隨處隨時相緩

急。勿欲速以取災。勿猶豫以後期。是處旅之道。卽涉世之道也。

人の世を渉るは行旅の如く然り。途に險夷有り。日に晴雨有りて、畢竟避くるを得ず。只だ宜しく處に隨ひ時に隨ひ相緩急すべし。速ならんことを欲して以て災を取ること勿れ。猶豫して以て期に後るゝこと勿れ。是れ旅に處するの道にして、卽ち世を渉るの道なり。

人の世渉りといふものは丁度旅行してをるやうなものであります。先にも申しました通り、

急がば廻れ

いづくをも定め無き世と知りぬれば
家をも旅のこゝちこそすれ

で、人生の行路には險阻な所もあり、平坦な所もあり、その旅行には晴れた日もあり、雨降りの日もあつて、それは到底避けることの出來ないのでありますから、險阻であれば險阻のやうに足拵を嚴重にするとか、平坦なら平坦のやうに歩みを運ぶとか、雨降りは雨降りのやうに晴天は晴天のやうに、その道路の具合や、その日の天候によつて、或は緩々と歩を運び或は急いで行くもよい。たゞしかし『急がば廻れ』で早く早くと急いで、知らぬ近道に迷つたり、山なき里に行き暮れるやうな災ひを取つてはならないが、さればとてぐづ〳〵猶豫して時期に遲れるやうなことがあつてはならない。これが旅に行く折の道であり、また世を渡るの道であると多くの暗示を含めた教訓であります。

◎性天體地

人當自思察在母胎中之我心意果如何。又當自思察出胎後之我心意果如何。人皆並全忘不記也。然我體既具。必有心意。則今試思察。胎胞中心意。必是渾然純氣專一。無善無惡。只有一點靈光耳。方生之後。靈光之發竅。先知好惡。好惡卽是非。卽知愛知敬之所由出也。思察到此。可以悟我性之爲天。我體之爲地。

人は當に母胎中に在るの我の心意果して如何を思察すべし。又當に自ら出胎後の我の心意果して如何を思察すべし。人皆並に全く忘れて記せざるなり。然れども我が體既に具はれば、必ず心意有り。則ち今試に思察するに、胎胞中の心意、必ず是れ渾然として純氣專一に、善も無く惡も無く、只だ一點の靈光有るのみ。方に生ずるの後、靈光の發竅、先づ好惡を知る。好惡は卽ち是非なり。卽ち愛を知り敬を知るの由りて出づる所なり。思察して此に到らば、以て我が性の天たり、我が體の地たるを悟る可し。

人間は自分が母の胎内にあつた時には我が心がどういふものであつたかといふことをよく〳〵考へてみるがよい。また自分が母の胎内より生れ出た後の心が、果してどういふものであつたかといふことを考へてみるがよい。人は皆な全くそんなことは忘れてしまつて記憶してをらぬのでありますが、しかし我が體が備はつて居る以上は必ず心があつたに相違ないのである。今試みに母の體内にあつた時分の心がどんなものであつたかを考へてみると、それは必ず渾然とした純粹の氣で、善もなく惡もないのであつて、たゞ一點の不思

議な光があるばかりであつたであつたらうと思はれるのであります。さてそれから生れ出た後は何うかといふとその不思議な光が次第に發して、先づ物事の好きと嫌ひとを知るやうになる。この好き嫌ひは卽ち是非善惡で、それによつて愛を知り、敬を知る人間の良知の發する所であります。これは『孟子』に、

孩提の童。其の親を愛するを知らざるなし。其の長ずるに及んで其の兄を敬するを知らざるなし。

とあつて生れたその後、直に此の愛と敬とのよつて生ずるところがあるのでよく〳〵考へて、こゝまで來ると、自分の本性が天より受けたのであり、我が身體が地からなつてゐるのであるを知ることが出來ると思ふといふので、これは次の語と照合せて考へて戴きたい。

○

思未生時之我。則知天根。思方生時之我。則知天機。天保壬辰十月念錄。此日爲誕辰。

未だ生れたる時の我を思へば、則ち天根を知り、方に生るゝ時の我を思へば則ち天機を知る。天保壬辰十月念錄す。此の日誕辰なり。

未だ生れない先の自分といふものを思ふと卽ち天の根源が如何なるものであつたかを知ることが出來る。方に生るゝ時の自分を思へば、卽ち天の働きの如何なるものであるかを知ることが出來るといふ、簡單な語ですが、こゝに一言せねばならぬのは、先生の奉ぜらるゝ、支那の儒學に於きましてはこの宇宙と人心とは同じ發展過程をもつて居るものと見るのでありまして、天地の根源は渾沌たるもの、そこに善もなく惡もない。それが我が心の本性であつて、それからいろ〳〵動いて善惡の心の働きが出るといふので、それには王陽明の四言教といふものがありまして、

王陽明の四言教

善なく惡なきは心の體。
善あり惡あるは意の動。
善を知り惡を知るはこれ良智。
善をなし惡を去るはこれ格物。

といひ、心の本體は宇宙の本義の如く、善もなく惡もない、これが天根であり。それが心意の動きによつて善惡の區別を生じ、其の善惡の區別を判斷してよく知るのが良智であり、さうして善を爲し、惡を去つてゆくのが事物を目指してゆく格物の働きで、それがこゝにいふ天機であります。

本文の註に天保壬辰十月とありますが、これは一齋先生六十一歳の時、念といふのは二十日でありまして、一齋先生は先きにも申しました通り安永元年の十月二十日に生れられたのでありますから、これは丁度六十一歳の誕辰の日に書かれたのであります。

◎聖人遊觀

孔子在川上。嘆逝者。過滄浪。感孺子。遊舞雩。善樊遲。與浴沂於曾點。登東山。小魯國。登泰山。藐天下。聖人遊觀。無非學也。

孔子川上に在りて逝く者を嘆じ、滄浪を過ぎて孺子に感じ、舞雩に遊びて樊遲を善しとし、浴沂に曾點に與みし、東山に登りて魯國を小とし、泰山に登りて天下を藐とす。聖人の遊觀は學に非ざる無きなり。

孔子在齊聞韶學之。之杞得夏時。之宋。得坤乾。觀周。感慨往古。微服於宋。厄於陳蔡。適衛適鄭適楚。皆不得意。聖人之學。蓋得力於遠游艱難也多矣。

孔子齊に在りて、韶を聞いて之を學び、杞に之きて夏時を得、宋に之きて坤乾を得、周を觀ては往古を感慨し、宋に微服し、陳蔡に厄し、衛に適き、鄭に適き、楚に適き、皆意を得ざりき。聖人の學、蓋し力を遠游、艱難に得るや多し。

滄浪の水

此の二則は孔子の諸方遊歴中、見聞せられたことの學にあらざるなきを述べたので、初めは『論語』の子罕篇に、

子、川上に在して曰く、逝く者は斯の如きか、晝夜を舍てず。

とあるに據り、川のほとりを過ぎては、其の水の滔々と流れて、晝も夜も休まないのを見て、日月晝夜を舍てず、人は刻々に老い行く、我れも亦志業未だ成らず、空しく此の世を過ぎ行くかと嘆かせられ、滄浪といふ所を過ぎては子供の

滄浪の水、清めば、以て我が纓を濯ふべし。滄浪の水、濁らば、以て我が足を濯ふべし。

と謳へるのを聞いて、『孟子』の離婁上篇に、

孔子曰く、小子之れを聽け、清まば斯に纓を濯ひ、濁らば斯に足を濯ひ、自ら取るなり。

とあるを引き、門弟を戒めて、清めば以て我が冠の纓を洗ひ、濁らば以て我が足を洗へばよいやうに、人の毀譽も亦他のいふに任せて、それ相應に處分して行けばよいと、此の子供等の歌に感ぜられたといふので、此の歌の事は『靖獻遺言』の屈原の所でお話いたしますから、こゝに略して置きます。

舞雩に遊ぶ

次ぎの『舞雩に遊びて樊遲を善とし』とあるのは『論語』顔淵篇に、

樊遲、從ひて舞雩の下に遊ぶ。曰く、敢て德を崇とし、慝を修め、惑を解かんことを問ふ。子曰く、善い哉、問や、事を先んじ得ることを後にす。德を崇とするにあらずや。其の惡を攻めて、人の惡を攻むることなき、慝を修むるにあらずや。一朝の忿に其の身を忘れて、以て其の親に及ぼす、惑へるにあらずや。

といはれたのを引いたので、舞雩は天を祭り、雨を祈る祭壇のある所で、こゝに行かれました時に、お弟子の樊遲が問ひましたことを善しとして、其の當に爲すべき事を先にして、其の得んとする所の效果如何を後にし、その效果如何を計ることにも心たゞ一筋に其の爲すべき所に向ひて、怠らざれば德を崇うする所以で、自分の惡を攻めて之れを除かんことを專らとして、他人の惡を攻めないのは、これ心に慝れて根ぶかき惡を修め除いて行く所以であり、一旦の忿りに耐へかねて其の身を亡ぼし、累を父母にまで及ぼす如き大事を仕出かすのは惑へるのではないかと教へられました。

次の『浴沂に曾點に與みし』とありますのは、これは『論語』の先進篇に、孔子が門人等と共に語られ、門

人等がおの〳〵其の志をいうた時に、曾晳――名は點、字は晳子――が、

『暮春には春服既に成る、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風じ、咏じて歸らん』

というたを聞いて、

夫子、喟然として歎じて曰く、吾、點に與せん。

といはれたので、沂は川の名で、魯の城南にあり、溫泉のある所とも申しますから、春の暮に、冠者――成人――や、童子――子供――等と打ち連れて、こゝに浴し、その祭壇のある所で涼み（風じは涼む意）歌でもうたつて歸らんと、其の人欲を離れた所を、孔子は同意せられたのであります。

『東山に登りて魯國を小とし、泰山に登りて天下を藐とす』とありますのは、『孟子』の盡心上篇にある語に基いたので、魯の國の東の方にある山に登つては魯を小とし、天下の高山たる泰山――山東省奉安縣の北にある――に登つては天下をも小さく見られたといふのを藐とするというたので、藐は輕く見るの意であります。

泰山に上つて天下を小とす

『孟子』には此の次ぎに『故に海に觀る者は水を爲し難し、聖人の門に遊ぶ者は言を爲し難し』とありまして、高い所へ登れば登るほど其の見る所のものが小さくなるやうに、聖人の高い人格者の門に入つては、他の言論は小さくなつてしまふとの意であります。

以上くだ〳〵しく出典を擧げましたが、本文の意は、此の如く聖人の諸方を遊觀せられるのは皆な自ら修め、他を敎ふるの學問に外ならないのであるといふのです。

次ぎの文も亦之れと同じやうな意味で、孔子は齊の國にあつては此の國に傳はつて居る舜時代の音樂である韶を聞いて之れを學ばれ、夏の後たる杞の國に行かれては夏の時令を書した曆日の書を得、殷の後たる宋の國に行かれては陰陽の易理を記した坤乾といふ書を得られたので、此の事は前にお話いたしましたから、ここに解說を略しますが、更に當代たる周を歷遊しては其の盛時たりし古と、其の衰微しつゝある今とを回想して感慨特に深く、それから『宋に微服し陳蔡に厄し』とありますのは、『孟子』の萬章上篇に、

孔子の遊學

孔子、魯衞に悅ばれず、宋の桓司馬が將に要して殺さんとするに遭ひ、微服して宋を過ぐ。

とあるのと、『同書』盡心下篇に、

君子の陳蔡の間に厄するは、上下の交なければなり。

とあるのとに基きましたので、孔子の諸方に道を說かれた時の艱難は、想像に餘りあるのであります。其の他衞の國に行き、鄭の國に行き、楚の國に行かれましたが、孔子の道は何れにも用ひられませなんだと、孔子の遊歷の跡を叙して、聖人の學問の此の遠く遊歷して、さま〴〵の艱難辛苦に遇はれた中から其の力を得られた所頗る多いことをいはれたのです。

○

鄉愿一輩人。有陰德惜福之說。余謂德無陰陽。公爲之而已。其好陰德者。有待於陽報。若無陽報。陰德必不爲。而可乎。禍福亦天來。竟不可求。又不可惜。假令可惜。亦朝三暮四之算耳。究之皆揣摩天數。斷斷不可也。

鄉愿一輩の人には、陰德惜福の說有り。余謂ふ、德に陰陽無し。公に之を爲すのみ。其の陰德を好む者

は、陽報に待つ有り。若し陽報無きも陰德必ず爲さずして可ならんや。禍福も亦天來なり。竟に求む可からず。又惜む可からず。假令惜む可くとも、亦朝三暮四の算のみ。之を究するに皆天數を揣摩す。斷斷として不可なり。

鄉愿とあるは鄉里で愼しみ深いと云はれる人で、大抵は僞善家であるので、『論語』に『鄉愿は德の賊なり』とあります。こゝでは普通凡俗の儒者連中は、といふ意に取つてよいと思ひます。かういふ連中に陰德惜福といふ說があつて、隱れた德を働かして幸福を受けることをさへ惜むといひます。しかし自分は德に陰德の、陽德のといふ區別はないと思ふ。德は公々然として行ふべきである。然るに陰德を好むといふのは、多くは其の現れる陽報を待つてゐるので、たとひ現はに報いられたる陽報がなくても陰德は必ずなさねばならないので、陽報がないからとて陰德を爲しては惡いといふ筈はない。人間の禍福といふものは皆な天から與へられ來るものであつて、求めたからとて得られるものでなく、また惜しんだからとて惜まれるものではない。よし惜しんでみても、それは先へ受けるか、後で受けるかの違ひであります。こゝに朝三暮四とあるのは『莊子』の中に、猿を飼つてゐる狙公といふ人が、猿に毎日木の實を朝三つづゝ、暮には四つづつやらう、といひますと、猿共は大に怒つて、それでは少ないと言ひますから、それでは朝四つやつて、暮には三つにしようといひますと、猿が納得したといふ話があります。それと同じやうな話で、前になるか、後になるかの違ひで、結局同じ數字が得られる。斯くの如く陰德惜福といふのは斷じて不可なることであると思ふといはれたのです。

◎貴賤分あり

人須知貴賤各有分。貴人而摸放賤者之態。賤者而僭竊貴人之事。吾知非辱之招。則菑之及。

人は須らく貴賤各分有るを知るべし。貴人にして賤者の態を摸放し、賤者にして貴人の事を僭竊せば、吾れ辱を之れ招くに非ずんば、菑に之れ及ばんことを知る。

人は貴きにつけ、賤しきにつけ、各々その分限のあることを知らなければなりません。貴い人が賤しい者の狀態を眞似たり、身分の賤しい者が身分の高い人のことを眞似たりするのは、共に辱めを招くの本であり、また禍ひを生ずる原因になるものであります。或る金持で名高い人が、これは儉約をやることがよいといふので三等の汽車に乘つてをりました。それを先輩の友人が見て、『お前等が三等に乘るから、三等に乘る人の席が狹くなるのだ、お前は日本でも指折りの金持ぢやないか、それが一等に乘らずして誰れが乘る』といはれた。といふ話があります。何事も身分相應がよいので、身分不相應に、富貴にして態々賤者の眞似をしたりするのも、侮りを招くの本ですが、それよりも甚しいのは貧賤にして富貴の眞似をすることで、此方はタルドが『上流の者は下流に摸倣せらる』と申しましたやうに流行下移の法則によつて多いのですが、これは身の破滅の本ともなりますので『イソップ物語』にある鴉が孔雀の羽毛をさして威張つたやうな類ひで、辱しめを受け、禍ひを受けるにほかならないのである。こゝに菑といふ字がありますが、禍ひといふ意味であり

孔雀を眞似る鴉

ます。

◎口頭の聖賢

講說聖賢而不能躬之。謂之口頭聖賢。吾聞之一惕然。論辯道學而不能體之。謂之紙上道學。吾聞之再惕然。

聖賢を講說して、之を躬にする能はざるは、之を口頭の聖賢と謂ふ。吾れ之を聞きて一たび惕然たり。道學を論辯して、之を體する能はざるは、之を紙上の道學と謂ふ。吾れ之を聞きて再び惕然たり。

聖賢の道を講說しても、これを身に行ふことの出來ない者は、これを口頭の聖賢、卽ち口元ばかりの聖人賢者であると謂ふ言葉を自分が聽いた折に惕然——卽ちぞつと恐入つたことがある。また道德の學問を論辯して、これを身に體することの出來ない人は、これを紙上の道學と謂ふ言葉もあります。これを聽いた時に

木耳と數の子

また自分はぎよつとして恐入つたことがあるのであると、暗に世の口頭の聖賢、紙上の道學者を諷せられたのです。坊さんの說敎本の中に、或る人が極樂見物に行つたら、極樂に木耳のやうなものと數の子のやうなものが山のやうに積んであつた。ソコで『これは何ですか』と尋ねますと、『これは耳が極樂に來たのである。これは耳に良いことばかり聽かせてをつたから、耳ばかり極樂へ來て木耳のやうになつたのである』といひますから、『それでは數の子のやうなものは』と訊きますと、『これは舌の固つたので、口に良いことばかり言うて身に行はないから口だけが來たのだ』といふ話がありますが、こゝにある口頭の聖賢、紙上の道學といふのも、これと同じ意味であると思ひます。

○

天始氣而地造物。天變而地化也。是知造化二字語地功。不獨人爲地。而萬物皆地也。然非天氣入而主宰之。則物不能活。人不能靈。主宰之靈。卽性也。

萬物は地に屬す

天は氣を始めて地は物を造す。天は變じて地は化するなり。是に知る造化の二字は地の功を語るを。獨り人の地たるのみならずして、而も萬物皆地なり。然れども天の氣入りて之を主宰するに非ざれば、物も活す能はず、人も靈なる能はず。主宰の靈は卽ち性なり。

天は始めて氣を生じ、地が物をつくるといふのは儒敎の通念であります。故に天には變化があり、地には物を化成するの働きがあります。それでありますから、造化の二字が地の功用を語つたものであるといふことを知らねばなりません。獨り人間が地に屬するばかりでなく、萬物は皆な地に屬してをるのであります。しかし天の氣が這入つて、これを司らなかつたならば、物を活かすことは出來ず、人も亦靈妙な働きをすることが出來ないのであります。この天の氣を受けたるものが卽ち人の本性であります。

○

爲政須知者有五件。曰。輕重。曰。時勢。曰。寬厚。曰。鎭定。曰。寧耐。是

也。如學賢遠佞勸農薄稅禁奢尚儉養老慈幼等數件。人皆知之。

政を爲すに須らく知るべき者五件有り。曰く輕重、曰く時勢、曰く寬厚、曰く鎭定、曰く寧耐、是れなり。賢を擧げ、佞を遠ざけ、農を勸め、稅を薄うし、奢を禁じ、儉を尙び、老を養ひ、幼を慈む等の數件の如きは、人皆之れを知る。

政者の心得

政を爲す者は五つのことを知らなければなりません。第一は輕重、事件の輕るい、重い。こゝでは主に財政の輕重を云ふ意味を含んでをるのであります。二に時勢、よく時勢を見拔いて事を爲すことが必要であります。時勢に遲れてはならないし、また餘りに先走つては、民衆がこれに伴ふことが出來ないのであります。から、よく時勢に先立つの明をもつて、時勢に應ずるところの政策を樹てるといふことが必要である。第三には寬厚、人に接するのには寬やかに厚く、よく人の言葉を容れる人情をもつて人に接して行かなければなりません。四は鎭定、動亂や紛擾を鎭め定めて平和の維持を計ること。第五には寧耐、心を安靜にして、よく忍耐すべきことであります。その外、賢人を擧げて佞者を遠ざけ、農業を勸めて、租稅を薄くし、奢侈を禁じ、儉約を尙び、老人を養ひ、幼兒を慈しむ等の樣々の要件がありますが、これはみな人の知るところであるから、こゝには以上の五件を擧げたわけであります。

◎三德の妙理

智。仁。性也。勇。氣也。配以爲三德。有妙理。

智、仁は性なり。勇は氣なり。配して以て三德と爲す。妙理有り。

人格養成の三要素

智と仁とは人の本性であつて、これは先天的のものでありますが、勇は本性の動きより生ずる氣でありまして、後天的に養ひ得るものであります。『中庸』には『智と仁と勇とは天下の達德なり』といひ、古來これを三德と云ひ、孔子も『智者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず』といはれ人格養成の三要素とし、日本の儒學者の中には三種の神器を鏡は智、璽は仁、劍は勇であると此の三德に當てゝ說明して居る人もあるほどで、これを今日西洋流の心理學に見ましても、人間の心を智情意の三方面に分け觀察して居りまして理智に向ふ知識の方面と快不快を本とし行く情の方面と、決斷して行ふ意志の方面とにしますが、理智の最も正しきは智、情の最も美はしきは仁、意の最も强きは勇でありますから、此の三德の配合は實に面白いので、佛教の方では慈悲（仁）智慧（智）勇猛（勇）を三德と數へ、智に反對する愚痴、仁に反對する貪、勇に反對する瞋を貪瞋痴の三毒と云ひ、此の三德を以て三毒を退けるのを精神修養の眼目といたして居ります。

○

昔人謂道之大端。在道心人心。而其節目在父子君臣夫婦長幼朋友五者之倫。余謂道心。性也。人心。情也。精一執中。約情於性也。本體。工夫存焉。其著功處。則爲五倫之交。有親義別序信之敎。卽感應自然之條理。見性於情也。工夫。本體存焉。後之講道學者。往往馳虛玄。過高妙。悠渺空曠。覓性於言

語道斷。心行路絶之際。豈果人倫乎。或爲功利。或爲詞章。則於人倫亦滋遠矣。

昔人謂ふ、道の大端は、道心、人心に在りて、其の節目は、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友、五者の倫に在りと。余は謂へらく、道心は性なり。人心は情なり。精一にして中を執るは、情を性に約するなり。本體に工夫存せり。其の功を著くる處は、則ち五倫の交と爲りて、親、義、別、序、信の教有り。卽ち感應自然の條理にして、性を情に見るなり。工夫に本體存せり。後の道學を講ずる者、往往にして虛玄に馳せ、高妙に過ぎ、悠渺空曠にして、性を言語道斷え、心行路絶ゆるの際に竟む。豈果して人倫ならんや。或は功利と爲り、或は詞章と爲るは、人倫に於て亦滋遠し。

昔の人が道の大きな緒は道心と人心とにあると云つてをります。この道心と人心とを『書經』に、

人心惟れ危く、道心惟れ微なり、惟れ精、惟れ一。允に厥の中を執る。

とありまして、その中を得べきをいはれてありますが、こゝにいふ人心は人欲の私から出た心であり、道心は道理に合はうとする心でこの二つが道の大きな緒口である。その道心、人心のことを朱子が、

道心は是れ義理上發出し來る底、人心は是れ人身上發出し來る底、聖人と雖も人心なき能はず、飢えて食ひ、渴して飲むの類の如し。小人と雖も道心なき能はず、惻隱の心の如きこれなり。

とあります。これを細かく分けまして、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の人倫の五があると說くのでありますが自分卽ち一齋先生が思はるゝのに、こゝにある道心は卽ち人の本性であるし、人心は人の情である。人

道心と人心

が良き方面に心を精一にして、その中庸をとつてゆくのが、この情を本性に制するので、こゝに最も工夫がいるので、其の工夫の功の著しく現はれたところが、卽ち五倫の道である。父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信ありの教へとなつてゆく感應自然の筋道で、本性を情の上に見るところに工夫の本體が存してをるので、何にもむつかしい理窟を彼れ此れいふには及ばぬのである。然るに後の道德の學を講ずる者は往々實際とはかけ離れた空虛にして幽玄なる方面に走つて、高尙微妙に過ぎ、悠渺空曠と拂へ所のないやうな廣々として、茫漠たる所に入り込んで、人間の本性を求めてゐるので、其の本性は言語では何ともいへず、思慮分別の路も絶えて心にも考へられず身にも行ふことの出來ない遠い所にまで遡つて居るのは、これが果して人倫であらうか。道德を講ずる者が自分の名譽や利益のためにしたり、或は文字、文章を綴るといふことを旨として人倫を去ること非常に遠いものになつてしまふと、當時の學者談理に耽つて實際を離るゝを慨かれたのであります。

○

性之動爲情。畢竟不可斷滅。唯發而中節。則爲性之作用。然錮閉自性者爲習氣。而情之發。每夾習氣。有所黏著。是錮閉也。故習氣不可不除矣。工夫機筈。在一念發動上。就卽反觀自性。覓未發時景象。以挽回之。則情之所感。純以性動。無不中節也。然工夫甚難。不爲習氣壓倒者少矣。故常常戒愼之

於未感之時。猶有所失。則又必挽回之於纔感之際。工夫無此外耳。

性の動くを情と爲す。畢竟斷滅すべからず。唯だ發して節に中れば、性の作用を爲すのみ。然るに自性を錮閉する者を習氣と爲す。而して情の發するや、毎に習氣を夾みて、黏著する所有り。是れ錮閉なり。故に習氣は除かざる可からず。工夫機筈は、一念發動の上に在り。就卽ち自性を反觀し、未發の時の景象を覓め、以て之を挽回すれば、則ち情の感ずる所、純ら性を以て動き、節に中らざる無きなり。然れども工夫甚だ難く、習氣に壓倒せられざる者少なし。故に常常之を未だ感ぜざるの時に戒愼し、猶ほ失ふ所有れば、則ち又必ず之を纔に感ずるの際に挽回す。工夫は此の外無きのみ。

本性と習氣

前に申しました通り、本性の動くのが情であつて、この情は斷ち盡すことも出來ない。たゞ發して節卽ち程よい所に中れば本性の作用をなすのである。然るにこの本性の作用を止め、之れを一室に締め込むやうにするものを習氣といひ、これが情を發せんとする毎に常に粘り著くがため、是れに閉ざされてしまふのであります。この習氣は除かなければなりません。こゝに工夫の機筈、卽ち大切な機會があるので、これは一念の心の動きの上にあるのでありますから、こゝに自分の本性を著々反省し觀察して、未だ情の發せざる時に、本性の姿を求め、これをその本にかへし、その情の感ずるところが、純ら本性に從つて動くやうにし、節に中らないやうなことがないやうにせねばならぬ、しかしその工夫は非常に困難であつて、常に習氣のために壓倒せられ勝ちになるものでありますから平生の工夫に於てこれを未だ感ぜざる時に戒め、それでも失ふところがあつたならば、僅に動き出したと感じた時にこれをもとに戻すやうに心懸けねばならぬ。精神の工夫といふものは、實にこの外にないのであると說かれたのです。

◎讀書と修養

學者有不嗜讀書者。督之勵精讀書。有大耽讀書者。敎之靜坐自省。是則對症而補瀉之耳。

學者にて書を讀むを嗜まざる者有れば、之を督して精を勵まし書を讀ましめ、大に書を讀むに耽る者有れば、之に敎へて靜坐して自省せしむ。是れ則ち症に對して之れを補瀉するのみ。

學問する者で若し書物を讀むを好まない者があれば、これを督勵し精を出して書物を讀むやうにしなければならない。また大いに書物を讀むのに耽つてをる者があれば、これは靜坐自省せしめなければならない。これは病に對して補藥を進めたり、また下劑を與へたりするやうなもので、修養には常に讀書と靜坐との二つが必要であります。朱子も、『半日靜坐、半日讀書、長進せざるを憂へず』といふことを書いてをりますが、一方に偏するものを矯めで、この兩方の長所をもつて當るべきであると思ひます。

○

學。稽諸古訓。問。質諸師友。人皆知之。學。必學諸躬。問。必問諸心。其有幾人邪。

學は諸れを古訓に稽へ、問は諸れを師友に質すことは、人皆之を知る。學は必ず諸れを躬に學び、問は必ず諸れを心に問ふものは、其れ幾人有るか。

學問の學の方はこれを古書の註釋に考へ、問の方は師なり友人なりに質すといふことは人皆なこれを知つてゐるが、これを自分の躬に學んで之れを行ひ、自分の心に問うて反省自修するといふ一番大事なことを知つてをる者は實に少ないといはれたのです。

○

艮爲篤實輝光。君子之象也。物之有實者。遠而益輝。近則狎之。不覺美也。

面月而看月。不如背月而觀月。近花而看花。不如遠花而瞻花。

艮を篤實輝光と爲す。君子の象なり。物の實有る者は、遠くして益輝き、近ければ之に狎れて、美なるを覺えざるなり。月に面して月を看るは、月に背いて月を觀るに如かず。花に近づいて花を看るは、花に遠ざかりて花を瞻るに如かず。

艮の卦の事は尙ほ後に申しますが、艮は止で、これを篤實輝光と申しますは、君子の象であるからで、すべて何物でも、實際の價値の內に包まれて居るものは、遠く離れて、まますます輝くもので、近づいては狎れてしまつて、其の美なるを感ぜないもので、それは丁度月に向つて月を見るは、月を背にして見る方が美しく感じ、花に近づいて花を見るよりも、遠く隔てゝ之れを見た方がよいやうなものであると、其の篤實輝光の狀をいはれたのですが、此の事は後の艮背の工夫に就て比較的に詳しく申すことにいたします。

○

順境如春。出遊觀花。逆境如冬。堅臥看雪。春固可樂。冬亦不惡。

順境は春の如し。出遊して花を觀る。逆境は冬の如し。堅く臥して雪を看る。春は固と樂しむ可し。冬も亦惡しからず。

人間には順境と逆境とのあることは屢々申しましたが、その順境は萬事が都合よくゆくのでありますから、恰も春の麗らかな日に郊外に出て花を見て遊ぶやうなものでありますが、逆境は總て意の如くならず、冬になつて戶を閉めて寢て雪を見てゐるやうなもので、春は固より樂しみでありますが、冬も亦決して惡しくはないものであると順逆二境に於いて心を動かす勿れと教へられたのであります。

○

去假己而成眞己。逐客我而存主我。是謂不獲其身。

假己を去つて眞己を成し、客我を逐うて主我を存す。是を其の身に獲はれずといふ。

これ亦毎度申します通り、自分の己といふのに假りの己と、眞の己があります。その假りの己を去つて、眞の己を成り立たし、また外から來た客の我と、本來存する主人たる我とがあるから、その客の我を追出して、主人の我を心に存するやうにして行けば、『其の身に獲はれず』で、その身に獲へられて、我見我執に偏せず、己に克ち我を忘れて、道に盡くすことが出來るといふ訓である。

○

敬。生勇氣。

敬は勇氣を生ず。

これは非常に簡單な句でありますが、總て敬の一念があれば、それから勇氣が出るといふので、敬は敬ふで、西洋の諺に『我をひれ臥さしめるものは、我を起たしめるの力なり』といふのがありますが、この人には頭が下がるといふ敬の念からは、その人のためには如何なることもするといふ勇氣が出るので、敬は眞に勇氣を出すものであります。

飛込んだ力で浮ぶ蛙かな

これも亦、飛び込んだ敬が浮ぶ勇氣を生ずるの義と見ても、差支へないと思ふのであります。

○

謙。德之柄也。敬。德之輿也。可以行師征邑國矣。

謙は德の柄なり。敬は德の輿なり。以て師を行り邑國を征すべし。

謙讓は道德の柄のやうなものであり、敬は道德の乘物のやうなものであります。この乘物を、この柄によつて昇ぎ、以て敵を征するの戰さを起すことが出來るのであります。こゝに『邑國を征すべし』とあるのは自分の分相應の道德を盡すといふのであります。

○

釋靜爲不動者。訓詁也。靜何曾不動。釋動爲不靜者。訓詁也。動何曾不靜。

靜を釋して不動と爲すは、訓詁なり。靜何ぞ曾て動かざらむ。動を釋して不靜と爲すは、訓詁なり。動何ぞ曾て靜ならざらむ。

靜と動

靜といふ字を解釋して『動かず』とするのは、これは文字に拘泥つた解釋で、靜は決して動かぬといふことではない。また動を解釋して『靜かならず』とするのも、これ亦文字に拘泥つた解釋で、動は決して靜かならざるといふ意味ではありません。總て靜と云ひ、動と云ふのは相對的のことで、決して相反對してゐる意味にとるべきでない。

靜かさや水に椿の落つる音

これは靜中動ありの狀であり、『鳥鳴いて山更に幽なる』は動中靜ある狀況であります。

○

箴者。鍼也。心之鍼也。非幾纔動。卽便箴之可也。至於增長。則得效或少矣。

余好刺鍼。値氣體稍不清快。輒早刺心下十數鍼。則病未成而潰。因悟此理。

箴は鍼なり。心の鍼なり。非幾纔に動けば、卽便ち之を箴すれば可なり。增長するに至りては、效を得ること或は少し。余刺鍼を好む。氣體稍清快ならざるに値へば、輒ち早く心下を刺すこと十數鍼なれば、則ち病未だ成らずして潰す。因て此の理を悟る。

箴は竹の針、鍼は金針であります。こゝで鍼といふのは箴言とか、金言といふやうな、我々の心を刺すところの聖賢の教訓であります。卽ち聖賢の箴言は自分の心に針を刺すやうなもので、若し心に惡念が少しでも動いた時には、直ちにこの聖賢の箴言をもつて心に針を刺すがよろしい。その惡念がだん〳〵增長してからは、その效能が少ないのであります。自分は鍼療が好きで、氣分の少しでもすぐれない時があると、直ぐに胸の下に十數本鍼を刺すことにして居る。さうすると病がまだ起らぬ中に癒つてしまう。丁度この理と同じく心に惡念の起つた時には、直ちに聖賢の箴言をもつて、これを治療するがよいといはれたのであります。

○

人自嬰孩。至老耋。恒受德於陰闇之中。而不自知。是何物也。被褥枕席是也。

有一先輩。甚敬被褥。必手展收之。不委之臧獲。其用心亦厚矣。

人は嬰孩より老耋に至るまで、恒に德を陰闇の中に受けて、而も自ら知らず。是れ何物ぞや。被褥、枕席是れなり。一先輩有り。甚だ被褥を敬し、必ず手に之を展收して、之を臧獲に委せざりき。其の心を用ふる亦云に厚し。

氣付かぬ恩澤

人は嬰孩――嬰兒のこと、老耋の耋は八十以上といふのでありますから、ツマリ幼兒の時分から、老年に至るまで、常にそのお蔭を氣付かないところに受けて居るものがある。それは何であるかといふと夜具、布團や枕の類で、自分の先輩に甚だこの夜具、布團や枕の類を敬まつて、自分でこれを展べたり、納めたりして、決して臧獲――臧といふのは下男、獲といふのは下女、卽ち下女、下男に委せず、自分で夜具、布團を片付けるやうにして居られる方がある。その注意や實に手厚いといふべきであるとの感想です。

○

能愼寢食。孝也。

能く寢食を愼むは孝なり。

これは前のと同じやうな意味でありますがよく自分の日常生活のうちで、毎日缺かさないのは喰ふことと

寢ることでありますから、この寢食を愼しんでゆくことは父母に受けたる身體髮膚を疎末にしない孝行の道に適ふのであるといはれたのです。

◎人を以て得る者は脆し

以天而得者固。以人而得者脆。

天を以て得る者は固く、人を以て得る者は脆し。

天爵人爵

天然自然の法則によつて得たものは堅固でありますが、人によつて得たものは脆いものであります。人間の名譽に致しましても天爵と人爵とがあります。天爵は天然自然に得たもので、こゝには位記も何にもありませんが、人爵の方は位記等があるのですが、自分にそれだけの力なくして與へられたものは、卽ち脆く人にも忘れられますが自然に自己の人格より得たものは力强いといふのです。

瀨川路考の話

昔、江戸に或る俄か分限の商人がをりまして、何んとかして自分の名を世間に廣めたいと思ひまして、神社佛閣の手拭や提灯にも、その名を書かしたが、さほど人が知つてくれません。そこで一寸工夫をして、當時名代の俳優瀨川菊之丞――これは路考といふ有名な俳優であつたのであります――に賴んで自分の名前を字崩しに染めた浴衣を着て、舞臺で演技をして貰ふことを工夫致しました。その圖案も出來、その浴衣も染め上つて、舞臺に着て出て貰つたところが、何しろ有名な俳優のことでありますから非常な評判で、その浴衣地がドン〳〵賣れ出したので、その人はこれで自分の名前も、廣まると非常に喜んでをりましたが、世の中ではこれを『瀨川染』『路考染』とは云ひますが、誰一人、その人の名を知る者がなかつたので、折角の名案も其の功なく、非常に失望したといふ話であります。自分に實力なくして、徒らに名を得んとしたものは大抵この類に陷ると思はれるのであります。

○

赤子先知二好惡一。好。屬二愛邊一。仁也。惡。屬二羞邊一。義也。心之靈光。自然如レ是。

赤子は先づ好惡を知る。好は愛邊に屬す。仁なり。惡は羞邊に屬す。義なり。心の靈光は、自然に是くの如し。

四端の說

生れたての赤子でも、物に好き嫌ひを知つて居るもので、その好きといふことは愛に屬するのであり、その愛は卽ち仁であります。嫌ひ憎むといふことは羞に屬するのでありますが、この羞る心は卽ち義であります。これは孟子の四端の說によつたのでありまして、前にも書いてをりますが、『孟子』は、

惻隱の心は仁の端なり、羞惡の心は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり。

と謂つてをります。氣の毒と思ふ心は仁の端であり、羞しいと思ふ心は義の端であります。讓合ふといふ心は禮の端であり、良し惡しを分ける心は智の端で、人間の心の靈妙な光といふものは自然に此の中に端を發するのであります。

○

君子自慊。小人則自欺。君子自彊。小人則自棄。上達下達。落在一自字。

君子は自ら慊し、小人は則ち自ら欺く。君子は自ら彊め、小人は則ち自ら棄つ。上達と下達とは一つの自字に落在す。

君子、即ち立派な人格者は自分で自己の行爲に滿足するといふことなく、これでも足らぬ、これでも足らぬと常に飽き足らず努めてゆくが、小人即ちツマラヌ人間は自分の短所は棚にあげて、自ら自己の心を欺いてをりますから進むといふことなく、君子の方はこれでは足らぬ足らぬと自ら彊めて行くが、小人はこれでよいと自ら棄つるか、モウ駄目だと自暴に陷つてしまふ。これが君子は向上し、小人は墮落するに至るので、その上達と下達とは、自ら慊すると自ら欺くと、自ら彊めると自ら棄るとだけの一字によつて岐れるのであるといはれたのです。

○

忿熾則氣暴。欲多則氣耗。懲忿窒欲。於養生亦得。

忿熾なれば則ち氣暴く、欲多ければ氣耗す。忿を懲らし欲を窒ぐは、養生に於ても亦得。

忿怒の心が熾になれば、氣が暴々しくなるのであり、また欲望が多ければ、ために氣が消耗するものであります。それでありますから氣のあら〳〵しいのを懲らし、その氣の萎みゆくのを防いでゆくのは、人間の身體を養ふ養生に於いても、また良い道であるのである。精神修養を身體の修養と兼ねて教へられたのであります。

◎心の安否

人皆知問身之安否。而不知問心之安否。宜自問。能不欺闇室否。能不愧衾影否。能得安穩快樂否。時時如是。心便不放。

人は皆身の安否を問ふことを知れども、而も心の安否を問ふことを知らず。宜しく自ら問ふべし。能く闇室を欺かざるか否か。能く衾影に愧ぢざるか否か。能く安穩快樂を得るか否かと。時時是くの如くすれば心便ち放れず。

人々は皆な身體の安否を氣遣ひますが、心の安否を氣遣ふことを知りません。常によく自分で心の安否を質してみて、暗闇の部屋にをつても、自ら欺くことが有るか無いかを問ひ、寢てその布團や、夜具に愧ぢるところがないか、どうかを問ひ、その心が安穩に樂しくしてをるかどうかといふことを時々に尋ねてみれば、この心が即ち道を離れて放縱になるといふやうなことはないといふのであります。

これは前にも言ひました通り、昔、支那の瑞巖禪師といふ人は、常に自分で『主人公、主人公』と心に問

息世譏嫌戒

うて、『はい、はい』と答へて、自分の心を檢せられたといふことがあります。一たい其の通りに心の安否を問ふことが必要で、今日は人の安否を問ひますのに『御機嫌よう』とか『御機嫌如何』とかいひますが、この語の出所は佛教の戒律の中に『息世譏嫌戒』といふ語がありまして、世の譏り嫌ひを止めてゆくやうに身を保つて行く戒法で世の中の人に譏られ嫌はれることがないかといふ、其の譏嫌が機嫌といふ字を使ふやうになつて身體の安否を問ふこととなつたのであるといふことです。

○

古往今來。生生不息。精氣爲物。天地未嘗增一物。游魂爲變。天地未嘗減一氣。

古往今來、生生息まず。精氣は物を爲すも、天地未だ嘗て一物をも增さず。游魂は變を爲すも、天地未だ嘗て一氣をも減ぜず。

昔から今まで萬物が生々として次ぎから、次ぎへと發生して息むことのないのは精氣が物を生じてゆくので、かくの如く斷えず出來ても、天地未だ嘗つて一物をも增したことはありません。これに反して生あり、死ありで、游魂變を爲す――これは物を死滅させてゆく方の働きでありますが、この働きも絶えないのでありますけれども、天地は未だ嘗て一つの氣をも減じたことはないのであります。即ち天地は不增不減で、その間に增減の現象が繼續してゐるに過ぎないといふことを示されたので、これは『易』に『精氣物を作り、游魂變を成す』といふ言葉の解釋と見てもよいのであります。

◎誠と敬

無爲而有爲之謂誠。有爲而無爲之謂敬。

爲す無くして爲す有る、之を誠と謂ひ、爲す有りて爲す無き、之を敬と謂ふ。

殊更に爲さうと思はずして、自然に出來てゆくのが人の誠であります。また、しようと思へば爲せないことではないが、これを爲さないのを敬といふのであります。即ち先の無爲に爲す有りといふのは自然の儘に行うてゆく、天理に叶うた誠であり、爲すことは出來るが、これを爲さず人の道に外れはせぬかと心をつけて爲さないのは敬であるといふので、前者は何にも爲さないやうであるが爲さねばならぬ時はウントやる誠の發露で、山鹿素行も『已むを得ざる之れを誠といふ』というて居ります。

大和魂

かくすればかくなるものと知りながら
やむにやまれぬ大和魂

これは誠であります。後者は出かせば出來るので、ドンナ難事にあつても逡巡はせぬ器量はありながら、『私はこれだけの男です』と敢て爲さないといふ風で、これは敬であるといふので、西郷先生愛誦の句です。

聖人見事於幾先。自事未發而言。謂之先天。自幾已動而言。謂之後天。中和。一也。誠敬。一也。

聖人は事を幾先に見る。事の未だ發せざるよりして言へば、之を先天と謂ひ、幾の已に動くよりして言へば、之を後天と謂ふ。中和も一なり。誠敬も一なり。

先天と後天

聖人はすべて事の起らない先きを見て事を處理して幾先を制するのであります。これは事の發しない上からは、これを先天といひ、纔かに、その幾の動き出したといふ點から後天ともいふことが出來るのであります。その未だ起らないうちに戒める先天も、起つてから戒しめる後天も、みな中和を得てゆくことが肝要で、此の中和を得るといふことは先天からいへば誠であり、後天からいへば敬であるのであります。こゝにある中和といふことは、前にもしば〳〵申しましたが、『中庸』に『喜怒哀樂の未だ發せざる、これを中と言ひ、發して節に當る、これを和と言ふ』とありますので、即ち未だ發せざる中は先天であり、發して節に當る和は後天であります。

◎活道活學

道固活。學亦活。儒者於經解釘牢繩縛。并道與學幾死。須拔其釘。解其縛。令得蘇回可也。

道は固とより活き、學も亦活く。儒者の經解に於けるは、釘牢繩縛して、道と學とを并せて幾んど死せしむ。須らく其の釘を拔き、其の縛を解き、蘇回するを得しむべくして可なり。

天地の大道は固より活々としてゐるものであり、それを究めんとする學問も亦活きてをるものであります。然るに今日の學者が經書を解釋致しますのは釘牢繩縛、釘で堅く打ちつけて、繩で強く縛りつけるといふやうに、字句の末に執着をして、道と學問とを殆んど死なしてしまつてをります。だから、その文字に執着してゐる釘を拔き、傳統に縛られてゐる繩を解いて、これを蘇み回らしてゆくやうにしなければ、眞に生きた學問とは言へない、といふのであります。

◎人我一體

心得中和。則人情皆順。心失中和。則人情皆乖。感應之機。在於我矣。故人我一體。情理通透。可以從政矣。

心に中和を得れば、人情皆順ひ、心に中和を失へば、人情皆乖く。感應の機は我に在り。故に人我一體、情理通透して、以て政に從ふ可し。

渡る世間に鬼はない

心が平靜を保つて中和を得てをりますと、人情は皆な我が心に順つてゆくやうに思はれますが、心が平靜中和を失ひますと、人情は皆な我に乖いてゆくやうに思はるゝものであります。即ち喜んでみれば、總て世の中を樂しく見られるし、疑つてみれば、世の中が總て我に乖くやうに見えるのであります。『渡る世間に

人を見れば泥棒と思へ

鬼はなし』と見るのは、人情皆な順つてゆくの見方であり、『人を見れば泥棒と思へ』といふのは、人情皆な我に乖くの見方であります。

この心をもつて、この世の中を見れば、好いと見れば好く、悪いと思へば悪るく思はれる。卽ち人と我とが相感じ合ふ、その機會によつてこゝで是非に岐れるのであります。我が心は卽ち人の心、人の心は我が心卽ち人我一體となつて情理が互ひに通じ合つてゐる。さうなつて始めて政を執ることが出來るといふ、爲政者の戒しめであります。

◎道心人心

人當自認我軀有主宰。主宰爲何物。物在何處。主於中而守於一。能流行。能變化。以宇宙爲體。以鬼神爲迹。靈靈明明。至微而顯。呼做道心。

人は當に自ら我が軀に主宰有るを認むべし。主宰は何物たるか。物は何れの處にか在る。中を主として、一を守り、能く流行し、能く變化し、宇宙を以て體と爲し、鬼神を以て迹と爲し、靈靈明明、至微にして顯はるゝもの、呼びて道心と做す。

人はすべて自分の身體のうちに、これを統卒する主宰者があることを認めなければなりません。その主宰者とは何であるか、それは何處にをるのか、と申しますと、この心の中にあつて、中を主として、その一を守り、よく動き、よく變化して、この天地宇宙を本體となし、鬼神のやうな靈妙な行動を示してをるものであります。眞に靈々明々、至つて微にして、而して大に顯はれて居るもので、これを道心といふのであります。次ぎに、

人當自認我有軀。軀爲何物。耳有天性之聰。目有天性之明。鼻口有天性之臭味。手足有天性之運動。此物也各專於一。而不能自主。則其與物感應。而物之自外至。或有塗耳目。膠鼻口。爲其所索引。以拗其天性。故人之爲善。固是自然之天性。而爲惡亦是拗後之天性。以其涉於體軀。如是之危也。呼做人心。

人は當に自ら我れに軀有ることを認むべし。軀は何物たるか。耳は天性の聰有り。目は天性の明有り。鼻口は天性の臭味有り。手足は天性の運動有り。此の物や、各一に專にして、而も自ら主たる能はざれば、則ち其の物と感應して、物の外より至るや、或は耳目を塗し、鼻口を膠し、其の索引する所と爲りて、以て其の天性を拗する有り。故に人の善を爲すは、固より是れ自然の天性にして、惡を爲すも亦是れ拗後の天性なり。其の體軀に涉り、是くの如く危きを以て、呼びて人心と做す。

前の句で道心を明かにしましたが、人間にはこの道心の外に人心といふものがあります。この道心、人心のことは屢々前に說きましたかちこゝにはその文句だけを申上げることにいたしますが、先きには我が身の主宰者をいひ、今は其の身卽ち體軀をいふので人は自分に體軀のあることを認めなければならぬ。その體軀

とは何ものであるか。耳には天然自然によく物を聽く作用があり、目には天然自然によく物を見る作用があり、鼻や口は天然に物の匂ひをかぎ、また物の味を知る作用があります。が、しかしこの耳と云ひ、目と云ひ、鼻と云ひ、口と云ひ、足と云ひ、手と云ひ、各々その一部分に專らであつて、全體を司ることは出來ないのでありますから、外物に感應して、物が至れば目に見、耳に入れば聽くのであります。

その耳や目を塞ぎ、鼻や口を膠し――膠で張付けるやうにして、その引張つてゆくところとなつて、天然自然の自由は働きが撓められをるのであります。人が善をなすといふことは固より、これは天然自然の本性に出たのであります。その惡をなすといふのは耳目鼻口手足等が外部に被はれ、其の天性が體軀に交渉し來るがため、拗けられ傷けられて、かく危くなるので、これを人心と申すのであります。

心非有二。語其本體。則謂之道心。性之體也。自其涉於體軀。則謂之人心。情之發也。故道心能主宰體軀。則形色不失其天性之本然。唯聖人能用精一之功。以踐其形而已。然知覺此功。亦卽道心之靈光。非二也。

心は二つ有るに非ず。其の本體を語れば、則ち之れを道心と謂ふ、性の體なり。其の體軀に涉るよりすれば、則ち之れを人心と謂ふ。情の發するなり。故に道心能く體軀を主宰すれば、形色其の天性の本然を失はず。唯だ聖人能く精一の功を用ひて、以て其の形を踐むのみ。然れども此の功を知覺するも、亦卽ち道心の靈光にして、二つに非ざるなり。

斯く道心、人心と二つ言ひましたが、心にこの二つがあるのではありません。その本體は卽ちこれを道心と云ひ、その體軀に關係して來る點から、これを人心と云ふので、此の人心は情の發露でありますから、道心がよく體軀を主宰してゆきますれば、その形も色も、天性の本然を失ひません。しかし、此の事はなかなかむつかしいので、唯だ聖人のみ、よくこの道心をもつて體軀を主宰いたしますので、これを精一の功と云ひます。先にも申しました『書經』に『惟れ精、惟れ一。允にその中を執る』とある。これが卽ち精一の功であります。これによつてその形を踐んで人心を支配して行きます。しかも亦此の精一の功を知るといふのも亦道心の靈光であつて、道心と人心、決して二つあるのではないのであります。

◎當下を處理せよ

人做事。目前多粗脫。徒思量來日事。譬如行旅人。齷齪思量前程。太不可。人須先料理當下。如居處恭。執事敬。言忠信。行篤敬。至於寢不尸。居不容。一寢一食。造次顚沛。亦皆當下事。其料理當下得恰好處。卽幷過去將來。亦自得恰好耳。

人の事を做すは、目前に粗脫多く、徒らに來日の事を思量す。譬へば行旅の人の齷齪として前程を思量するが如し。太だ不可なり。人は須らく先づ當下を料理すべし。居處恭、しく、事を執るに敬、言は忠信、行は篤敬より、寢ぬるに尸せず、居るに容づくらず、一寢一食、造次顚沛に至る如きも、亦皆當下の事な

り。其の當下を料理し、恰好を得る處、卽ち過去將來を幷せて、亦自ら恰好を得んのみ。

人が事を爲すのには目前のことに粗脫な點のあることが多いくせに、徒らに將來のことにのみ思ひ過ごし今日のことを今日、充分に整理せずして、來日のことを考へてをるので、譬へば旅を行く人が躊躇として、道の行く先きばかり考へてゐるやうなもので、甚だよろしくないことである。人は先づ當下――差當つての今のことを先づ處理するのが肝要とせなければならぬ、これは平生自分が家にをる折でも、恭々しく事を執つて、常に愼み深く敬を旨とし、言葉は忠信、行ひは篤敬と、云ふことはまことを失はず、行ひは手厚く、うや〳〵しく、寢るにつけても尸せずとて兩手兩足ヲン張り伸ばして死人のやうにせず、起きて居るときには別段、氣取つた形をせず、寢るにつけても、喰ふにつけても、造次顚沛――造次は假初めの事が起つた時、顚沛とは倒れやうとするやうな時、ツマリ何時でもといふこと――これらはすべて今目前のことであります。此の目の前のことを充分に處理して、それが恰好とほどよく爲し得るところ、それが過去將來に亘つて、ほどよくすることが出來るので、徒らに先きのことばつかり考へて、脚下が危いやうなことでは、到底世を渡ることの出來るものではないのであります。

◎老人の心得

老人。衆之所二觀望而矜式一也。其言動當二益端一。志氣當二益壯一。尤宜以容二衆育一才爲一志。今之老者。或有二漫唱一年老一。甘二頽棄一者。或有二猶爲一少年伎倆一者。皆非也。

老人は衆の觀望して矜式する所なり。其の言動は當に益端なるべく、志氣は當に益壯なるべし。尤も宜しく衆を容れ才を育するを以て志と爲すべし。今の老者、或は漫に年老を唱へ、頽棄に甘んずる者有り。或は猶ほ少年の伎倆を爲す者有り。皆非なり。

年寄りの冷や水

老人といふものは多く人から見上げられて、矜式――矜は敬すること、式はそれを手本とすること、卽ち年寄りは多くの人の手本となるものであるから、その言語行動は益々端正でなければならず、その志氣は益々壯んでなければなりません。其の上、充分に多くの人を包容し、將來ある英才を養うてゆくことを志し向ふ所とせなければならないのであるのに今の老人は漫りに、自分の年老いたることばかりを口にして、ものの役に立たないやうになつて、頽棄――卽ちいづれも崩れ棄てるで、物の役に立たない意――これに甘んじて居るものが多く、さでなきものは、身の老いたるを忘れ、徒らになほ少年のやうなことをして所謂『年寄りの冷や水』で、徒らに人の輕侮を招くの外はない。此の如きは何れもよくないことであるといはれたのです。

○

百年無二再生之我一。其可二曠度一乎。

百年、再生の我無し。其れ曠度すべけんや。

百年再生の我無し、人間は百年も生きてゐることの出來るものでもなく、また百年後に再び生れ出るとい

人生は三萬六千日

ふものでもないのです。この一日は再び來ることのない一日である。これを空しく渡つてはならぬといふのであります。このことは『菜根譚』に、

萬古あり、此の身、再び得ず。人生、只だ百年、此の日、最も過ぎ易し。幸に其の間に生まるゝ者は、有生の樂を知らざるべからず。亦虚生の憂を懷かざるべからず。

とありまして、その方で詳しく申述べるつもりでありますが、古人も、

百年三萬六千日蝴蝶夢中に空しく春を送る。

と戒しめてをる。たゞこの三萬六千日を夢の如くに送つて、何んとするでせう。こゝに曠度とあるのは空しく渡りすごすことであります。

○ 牽レ羊悔亡。操存工夫當如レ此。

羊を牽きて悔亡ぶ。操存の工夫當に此くの如くすべし。

羊といふものは非常に臆病なものでありまして、前から牽けば進みません。後からこれを追うてゆかなければならない。これは『易』に『羊を牽きて悔亡ぶ』といふ言葉から出たので、志を操り心を存して、修養を心掛けて行くのもこの羊を牽く心持で、その後に從つてをつても、進みゆくことさへあれば悔むことはないといふのであります。

◎和と介

寛懷不レ忤二俗情一。和也。立脚不レ墜二俗情一。介也。

寛懷にして俗情に忤はざるは和なり。立脚して、俗情に墜ちざるは介なり。

谷川の石

心を寛くして、世の俗情に忤はないやうにしてゆくのが和であります。而もまた俗情を追はず、ジッと自分の立場に立つて、それに墜らぬのは介であります。——介は守る所の固いこと——人間の生活といふもの其の大部分は世の俗情の中に立つてゆくのでありますから、これと相和さないといふわけには參りませんがたゞ俗情を追うて、自分に確りと守る所の介がなければ、何事も出來るものではないのであります。例へば谷川の小さな石は激流に追はれて轉々として下へ〳〵と流されて行きますが、大きな石は巍然として、その流れに岩根を洗はして、而も立つてをるといふやうなもので、前にも申しましたが、

こりずまに打ちは寄せても岩がねに
おのれ碎けてかへる仇浪

自分さへ巍然として守る所あれば、如何に世の俗情の流れが押寄せましても、それは碎けて却て谷川の大きな岩が上流の方へ移轉して行くやうに自己の地位を向上せしむるものであります。

◎不苟、不愧

不苟字。可以寡過矣。不愧字。可以遠咎矣。

不苟の字、以て過を寡うす可し。不愧の字、以て咎に遠かるべし。

不苟即ち物事を苟くもせずといふ字は、以て過失を少なくしてゆくことが出來るし、俯仰天地に愧ぢないといふ此の不愧といふ字は、また咎めに遠ざかることが出來るといふのです。すべて何事をなすのにも假初めにせず粗末にせず、よく〳〵考へて鄭重に扱ふといふ不苟と自分の心を何處から見られても恥かしくないやうにして行く不愧とは過を少くし咎に遠ざかる道であります。

これにつけて思起しますことは、昔、大岡越前守が寺社奉行でありました時に、幕府に於て諸藝の達人を召していろ〳〵な役に任命せられたことがあります。その頃算術の名人と言はれた野田文三といふ人がありまして、これに勘定役を仰付けるといふので、越前守に其の吟味を命ぜられましたので、越前守は野田文三を招き寄せて、

算術の名人

『其の方は算術に達する由である。ついては余が望みの割算を一つ目の前でやつて貰ひたい』

と言はれますから、さぞ入り組んだ算數のことでも出されるかと思つてゐると、

『百を二つに割れば、いくつになるか』

かう問はれました。そこで文三が、

『それでは一つ算盤を拜借致したい』

と云ひ、算盤を借り受けて、

『何んと仰せ出されます。百のものを二つに割れと仰せられますか。さらば』

と言うて、算盤に百とおいて、目安に二をおいて、二一天作の五と算盤をはぢいて、

『五十づゝになります』

と答へました。越前守はこれを見て手を打つて、

『さすがに算術の名人である。如何に容易なことであつても、これを輕はづみにせぬ。今日のこの行ひで、公儀大事の勘定役をも務まる者』

褒められたといふ話があります。その小事を忽せにせざるところに、その人の器量を見ることが出來るのであります。

○

古往今來。一塊堪輿皆情世界也。感應之幾在於此。而有公私焉。爲政者宜先持其公情以待物。使人各得其公情而已。然私情亦有可恕令達無碍者。臨事酌其輕重可也。

古往今來、一塊の堪輿は、皆情の世界なり。感應の幾此に在れども、而も公私有り。政を爲す者宜しく先づ其の公情を持して以て物を待ち、人をして各其の公情を得しむべきのみ。然れども私情も亦恕として達せしめ碍無かるべき者有り。事に臨み其の輕重を酌みて可なり。

昔から今まで、この天地は人間の情の世界であります。――こゝに堪輿とあるのは、堪は天の道、輿は地の道で、天地のことです。――既にこれ、情の世界である以上、人と人と相感ずるといふ幾微の關係も亦此の情に於てなされるのでありますが、この情には公の情と私との區別があるのでありますから、政を爲す者は此の公私を明にし、先づその公の情をもつて物に對し、人をしてその公情を得せしめやうとするといふことが必要であります。しかし私情もまたこれを許し達せしめて碍りのないものもある。これらは政治を執るについて事に臨んで、其の重い輕いを判斷して、それ〴〵の事柄に就て處理することが必要であります。

◎大學は是れ情の理會

大學自誠意說好惡。至平天下說絜矩。中間亦忿懥四件。親愛五件。孝弟慈三件。都於情上理會。

大學は、誠意に好惡を說くより、平天下に絜矩を說くに至る。中間も亦忿懥四件、親愛五件、孝弟慈三件、都べて情の上に於て理會す。

これは儒教主要の經典にして初學德に入るの門とせらるゝ『大學』を都べて情の上に於て理會すべきことを示されたのであります。

人の心を智情意の三つに分けて見るのが困難なやうに世界思想を此の三つに分けるのも困難でありますが大體の傾向から申しますと、西洋思想は智に傾き、東洋思想は情意に傾いて居りますが、其の東洋思想の中

智情と東西思想

印度思想は意に重きを置き、支那思想は情に重きを置くとも見られます。特に其の情の最も自然にして美はしき父子愛即ち孝を百行の本として其の道德を擴充して行くところ、明かに情を中心として居るのが見られるのであります。

近代支那の碩學といはるゝ辜鴻銘――民國十七年（皇紀二五八八年）七十三歲を以て歿した――は西洋人の生活は頭の生活であり、支那人の生活は心の生活であり、感情の生活であり、其の根本は孔子の敎卽ち儒敎の感化にあると申して居ります。

閑話は休題として本文に入り、此の儒敎の主要經典たる『大學』を見ますと、先づ其の修養の工夫として意を誠にすべきをいひ、

所謂、其の意を誠にするとは、自ら欺くことなからんとなり。惡臭を惡むが如く、好色を好むが如くなる。此れを之れ自ら謙すと謂ふ。（第六章）

大學情解

謙すとは、慊すといふと同じで、おのが心に思ふまゝにし、之れに滿足して毫も不足を感ぜざるの意で、古人は之れをこゝろよくすと訓讀さして居ります。惡い臭ひを惡み、好い色を好むのは少しも欺くなき意の誠であります。此の誠を推し擴げて天下を平にするにまで至りますので、其の最後の章の初めにも、

所謂、天下を平にするは其の國を治るにありとは、上、老を老として、民、孝を興す。上、長を長として、民、弟を興す。上、孤を恤んで、民、倍かず。是を以て君子は絜矩の道あり。

とありまして、天下を平かにするには其の國を治むるにありとは上に立つ者が家の老人に能く奉養すれば、下萬民に孝行の道が興起し、上に立つ者が其の長上に能く敬事して行けば、下萬民に長上を敬ふ悌の道が興起す

ろし、上に立つ者が幼少にして父母なき孤兒を恤み慈めば、下萬民も亦之れに倍かずして仁慈次第に行はれ、孝、悌、慈の道、國内に行はれて、國治らぬことはないから、君子には絜矩の道といふものがあるといふので、絜ははかるの意、矩は大工の使ふまがりがねのやうな定木で、大工は物を計るに定木を用ひて正しく平かにするが如く、此の國を治むる道を推して天下に及ぼすをいふので、次の文に、

上に惡む所を以て下を使ふこと毋れ。下に惡む所を以て上に事ふること毋れ。前に惡む所を以て後に先きんずること毋れ。後に惡む所を以て前に從ふこと毋れ。右に惡む所を以て左に交ること毋れ。左に惡む所を以て右に交ること毋れ。此れを之れ絜矩の道といふ。（第十章）

とありまして、上下前後左右悉く相惡むなく正しく行くべきをいはれたので、『中間も忿懥四件』とありますのは、意を誠にするを示された第六章と天下を平にするを示された第十章との中間で、

所謂、身を修むるは其の心を正うするにありとは、身、忿懥する所あるときは則ち其の正しきことを得ず。恐懼する所あるときは則ち其の正しきを得ず。好樂する所あるときは則ち其の正しきを得ず。憂患する所あるときは則ち其の正しきを得ず。（第七章）

忿懥四件

と忿懥――腹立ち怒ること、其の怒りの外にあらはれたるを忿といひ、内にとゞこほるを懥といふ――恐懼――恐るゝこと。其の淺きを恐といひ、深きを懼といふ――好樂――好み樂ふ――憂患――憂は内より生じ患は外より來る憂へごと――の四つは皆な情の變調で、心を正うする所以にあらざるをいひ、次ぎの『親愛五件』は、

所謂、其の家を齊ふるには、其の身を修むるにありとは、人、其の親愛する所について辟す。其の賤惡する所について辟す。其の畏敬する所について辟す。其の哀矜する所について辟す。其の敖惰する所について辟す。故に好んで其の惡を知り、惡んで其の美を知る者は天下に鮮し。（第八章）

とありまして、人間といふものは其の親み愛する者や、賤み惡む者や、畏れ敬ふ者や、哀しみ矜む者や、敖り惰る者やに對して其の情が偏頗になるものであるから――辟はよかたるの義――好んで其の惡む所を知り、惡んで其の善い所を知るものは、まことに少いと、情の公平を期し難きをいうたのです。次ぎの『孝弟慈三件』は、

孝弟慈三件

所謂、國を治むるには必ず先づ其の家を齊ふとは、其の家教ふべからずして、能く人を教ふるものは之れ無し。故に君子は家を出でずして教を國に成す。（第九章）

とあつて、

孝は君に事なる所以なり。弟は長に事ふる所以なり。慈は衆を事ふ所以なり。（第九章）

その三件を擧げて父母に事ふるの孝は以て君上に事ふる忠に移すべし、兄長に事ふるの悌は以て長上に事ふる順に移すべく、慈は以て衆庶を使ふ惠に移すべく、家庭道德たる孝、弟、慈は國家道德たる忠、順、惠となつて、結局情の擴大に過ぎないのでありますから、正心、誠意、修身、齊家、治國、平天下を說く『大學』の道は、皆な情の上に會得すべきであると、著者の見解を述べられたのでありますが、儒教の精神亦こゝにありと見ることが出來るのであります。

聖人順萬物而無情。非無情也。以萬物之情爲情耳。

聖人は萬物に順ひて情無し。情無きに非ざるなり。萬物の情を以て情と爲すのみ。

聖人は萬物に對して愛憎の情がない。これは情がないのではない。萬物の情をもつて自分の情としてをる卽ちこれは同情であります。人間の社會に同情の必要なることは從來から屢々申しましたが、更に萬物に對して野を駈ける獸、空飛ぶ鳥にしても、峰に生える一本の松や、野邊に咲く一本の菫の花にまで、同情をもつて見られるから、天地悉く同情、卽ち愛をもつて充されて、先きにも申しました。

面白や散る紅葉葉も咲く花も
　自らなる法の御姿

と天地を美化し淨化して行くことが出來るので、此の歌は佛敎の方から見たものでありますが、儒敎の方でも『博愛これを仁と云ふ』とありまして、博く愛する時、天地は仁に充ちて居ると見ることが出來るのであります。

○

人多話二己所一好。不レ話二己所一惡。君子好レ善。故每稱二人善一。惡レ惡。故不二肯稱一人惡一。小人反レ之。

人は多く己れの好む所を話して、己れの惡む所を話さず。君子は善を好む、故に每に人の善を稱し、惡を惡む、故に肯へて人の惡を稱せず。小人は之に反す。

一體人間といふものは多く自分の好む所のことを話して、自分の嫌なことや、憎むところのことは話さないものであるますが、君子卽ち立派な人は善を好むものでありますから常に人の善を褒め讃へて、惡を憎みますから、敢て人の惡を口にしないが、小人は全くこれに反對して居るといふので、これは『論語』の顏淵篇に、

君子は人の美をなし、人の惡をなさず。小人はこれに反す。

とあるに基いた敎へであります。

○

不レ可レ誣者。人情。不レ可レ欺者。天理。人皆知レ之。蓋知而未レ知。

誣ふ可からざる者は人情にして、欺く可からざる者は天理なり。人皆之を知る。蓋し知れども而も未だ知らず。

誣ひ僞ることの出來ないのは人情であり、欺くことの出來ないのは天の理であります。こんなことは誰でも皆な知つてをることでありますが、知つてをりながら人情を誣ひ天理を誣ひ欺かうとしたりする者があるのは、實は本當には知つて居らぬのである。本當に知つて居れば、知行合一で、これが實際に行はれなければならぬのであります。

◎外見を衒ふ勿れ

勿レ裝二門面一。勿レ陳二家儻一。勿レ揭二招牌一。勿レ假二他物一以誇衒。書以自警。

門面を裝ふこと勿れ。家儻を陳ぬること勿れ。招牌を揭ぐること勿れ。他物を假りて以て誇衒すること勿れ。書して以て自ら警む。

門戸を張り、面目を裝うて、家儻卽ち家の道具をいろ〳〵と並べ連ねたり、デカ〳〵と自家廣告の招牌卽ち看板を揭げたり、他人の物を借りて來て、誇り見せびらかすといふやうなことをしてはならないと自ら警められたのです。これには面白い話がありまして、昔、或る人が茶室を建築して、多くの友人を招いて、建築がどうの、この間取りがどうの、茶道具がどうの、掛物がどうのと、いろ〳〵と自慢を致しました。成程自慢するだけあつて、どれも、これも結構盡くしですから主人は得々として、

『どうです。何一つ非難せらるゝものはございますまい』

と申しますと、その中の一人が、

『たゞ一つ結構でないものがある』

と申しますから、其の主人は何だ〳〵と聞きますが、友人は默つて歸りましたから、其の歸り道で他の友人が『何が惡いのだ』ときゝますと、

主人が惡い

『主人が惡い』

と申したといふ話があります。反省すべきことであると思ひます。

○

矯レ弊之說。必復生レ弊。只當レ知二學爲レ己。知二學爲レ己者。必求二之於レ己。是心學也。

至レ於二得レ力處一。則宜レ任二其所一自得一。雖レ有二小異一。不レ害二大同一。

弊を矯むるの說は、必ず復た弊を生ず。只だ當に學は己れの爲にするを知るべし。學は己れの爲にするを知る者は、必ず之を己れに求む。是れ心學なり。力を得る處に至れば、宜しく其の自得する所に任ずべし。小異有りと雖も、大同を害せず。

學問は己れの爲にす

物事の弊害を矯正しようとする說は、また弊を生ずるものであります。學問といふものは自分のためにするといふことを知らなければならない。自分のためにするのであるからこれを他に求めずして、自分に求める。この自分に求めるのが精神修養の學問である。若し自分に求めて力を得たところがあるならばその自ら得た所に委かすがよい。さうしてをれば他と少しの違ひがあつても、大體に於いて同じくしてゆくことの出來るものである。これは『論語』に、

古の學者は己のためにし、今の學者は人のために學問を自分のためにせず、人のためにするものであります。

あるのであります。

○

艮背工夫。神守二其室一。卽敬也。卽仁也。起居食息。不レ可二放過一。非二懸空捕一レ影之心學。一

艮背の工夫は、神其の室を守る。卽ち敬なり。卽ち仁なり。起居食息、放過すべからず。空に懸け影を捕ふるの心學に非ず。

艮背の工夫といふことは、前にも申しました通り、心を奥深くおいて、其の精神を守つてゆくので、これは敬であり、仁であります。この敬と仁とを、起きても寢ても、喰ふについても、休むについても、少しも放さぬやうにしてをらねばならない。これが精神修養の工夫であります。ただ心を靜かにすると云ふことのみをいうて、空想に懸け、また影を捕へるやうなことを考へて居るのは修養の工夫ではないのであります。

○

虛羸人常服補劑。一不二俄覺一二其效一。而久服自有レ效。此學工夫亦猶レ是。

虛羸の人は、常に補劑を服せり。俄に其の效を覺えざれども、而も久しく服すれば自ら効有り。此の學の工夫も亦猶ほ是くのごとし。

虛羸、卽ち虛弱な軀の人は、常に榮養を補ふところの藥劑を飲んでをりますが、それは俄かに效驗の見えるものではありませんが、長く服劑を續けて居れば、自然にその効があるやうなものであります。この學問の工夫といふことも、またその通りで、一時にその効は見えなくても、絶えず努力を續けてゆくうちに必らず進歩の効を見るものであるといふのであります。

學問の工夫

○

名利。固非二惡物一。但不レ可レ爲二己私所一レ累。雖レ愛二好之一。亦自有二恰好得一中處一。卽天理當然也。凡人情可二愛好一者何限。而其間亦有二小大一。有二輕重一。能權二衡之一。斯得二其中一。卽天理所レ在。人只怕二己私爲一レ累。名利豈果累レ人乎。

名利は、固と惡しき物に非ず。但だ己私の累はす所と爲る可からず。之を愛好すと雖も、亦自ら恰好の中を得る處有り。卽ち天理の當然なり。凡そ人情は愛好す可き者何ぞ限らむ。而れども其の間にも亦小大有り。輕重有り。能く之れを權衡すれば、斯に其の中を得。卽ち天理の在る所、人只だ己私の累を爲すを怕るゝのみ。名利豈に果して人を累せんや。

名譽や利益は固より惡いものではありませんが、たゞこれを自分のために私せんとするものでありますから、そこに惡いことが生ずるのである。誰も名譽や利益を愛し好むものでありますけれども、自らその程度といふものがある。その中道を得てをるところが天理の當然であります。

凡そ人情として愛好するところのものは限りがないのでありますが、しかしその間に小さいのや、大きいのや、輕ろいのや重いのがあります。よくこれを衡にかけて、その釣合ひを失はず、中庸を得さへすれば、それは天理のあるところであります。然るに名譽や利益は自分を累はすものであるといふことを怖れて徒らにこれを避けようとする人があるが、これ大きな間違で、名譽や利益は決して人を累はすものではない。これを自己のためにせんとするがために、つひに天理に背いて煩累を生ずるのであると戒めたのです。

○

山以實爲體。而其用虛也。水以虛爲體。而其用實也。

山は實を以て體と爲して、而も其の用は虛なり。水は虛を以て體と爲して、而も其の用は實なり。

學問と實用

山は草木や岩石で充ち滿ちて、それが實體となつてをりますが、しかし山自體の用といふものは別にあるのではありません。これに反して水はこれといふ實體があるのではないのでありますが、其の用は千變萬化で、非常に廣いものであります。人間もまたその通りで、如何に多くの書物を讀み、文字を知つてをつても實用を缺いてをつては何の役にも立たないのであります。それほど學問がなくても、實用に役立つものとならなければならないとの意を寓せられたのです。

○

山嶽亦不レ舍二晝夜一。川流亦寂然不レ動。

山嶽も亦晝夜を舍かず。川流も亦寂然として動かず。

これは前に續いて山と水とを比較したので、山嶽は寂然として動かず、川の流れは晝も夜も動き通しであります。それを此處には、逆に、常に動かぬと見えてをるところの山嶽も實は晝も夜も動いて、そこに草木を生じ、岩石を變化してをるのである。川の流れは晝夜動いてゐるやうであるが實は川自體は寂然として動かぬのである。卽ち山嶽は靜中動あり、川流は動中靜ありと見るべく、靜動二面の修養を山と川とについて語つたものであります。

○

收二感於一寂。是性之情。存二寂於一感。是情之性。

感を寂に收むるは、是れ性の情なり。寂を感に存するは、是れ情の性なり。

我々が心に動く感情を靜寂不動のところに收めてゆくのが、これが性から來たところの情の働きであり、この靜寂味を周圍の感情の中にもつのは、情の動きの中に性が現はれてをると見ることが出來ます。先の山嶽と川流とによつて此處に性と情とについて靜動二面の修養を語つてをるのであります。

○

胸中無物。虚而實也。萬物皆備。實而虚也。

胸中に物無きは、虚にして實なるなり。萬物皆備はるは、實にして虚なるなり。

無一物の所無盡藏

胸中に少しも物がない時は、そこに眞理が充ち滿ちてをるので『虚にして實』であり、孔子が『萬物皆我に備はる』といふたのは、『實にして虚』なるところを指したので、『無一物の所、無盡藏、花あり、月あり、樓臺あり』といふ詩のことは前にも申しましたが、鏡の陰影なき所に萬物その影を映すやうに、我が胸中物がなくして、よく萬物を映し得るのでこゝに虚にして實、實にして虚といふことを充分に味はねばならぬのであります。

○

知。是行之主宰。乾道也。行。是知之流行。坤道也。合以成體軀。則知行。是二而一。一而二。

知は是れ行の主宰にして、乾道なり。行は是れ知の流行にして、坤道なり。合して以て體軀を成せば則ち知行なり。是れ二にして一、一にして二なり。

知の働きといふものは、これは行ひの主人となるべきもので、一切の行ひは、この知の判斷によつて現はれてゆきますから、これは乾道、即ち天の道であります。行ひといふものは知から流れ出たもので、これは坤道、即ち地の道であります。人間はこの天地の道を受けて軀を爲してをるもので、知と行とは、二にして二でなく知つて行はずんば眞に知つたのではなく、行うて知らずんば、眞の意味で行つたとはいはれぬやうにこの知と行とは二にして一つであり、又一にして二であるのであります。

◎靜坐工夫

孔子九思。曾子三省。有事時以是省察。無事時以是存養。可以爲靜坐工夫。

孔子の九思、曾子の三省、事有る時は是れを以て省察し、事無き時は是を以て存養し、以て靜坐の工夫と爲す可し。

孔子の九思

『論語』の季氏篇に、孔子は君子には常に自己反省するところの九つの思ひがある。第一に視ることは明かなることを思ふ。凡そ眼の見るところ、外物に覆はれることなくして明かに、分らぬことのないやうにしたいと思ひ。二には聽くことは聰ならんことを思ふ。凡そ耳の聽くところうちに塞がることなくして、外に聽きのがすことのないやうにしたいと思ふ。三には色の穩かならんことを思ふ。平生の顏色は穩かで激しからぬやうにせんことを思ひ。四には身の貌は常に恭々しくして、怒り憤ることのないやうにしたいと思ふ。五には口にする言葉は、その心を盡して眞實で、行き屆いて殘ることのないやうにしようと思ふ。六には事は敬

ならんことを思ふ。萬のことを愼しみ深くして、過ちのないやうにしようと思ふ。七には疑ひは問はんことを思ふ。心に疑ひが起つたら、先づ師友に問うて心に解決を得んことを思ふ。八には忿りは難を思ひ、一端の忿りに、その身を忘れて、つひに困難が來たるものであり、心に怒りを生じた折りは、その困難あらんことを思うて、これを止める。九には得ることを見て義を思ふ。凡そ心に得たことがあつたならば、必ずそれは義か、不義かを審かにして、その不義を思はずして、義をとらんことを思ふ。といふやうに、日々の反省に對しても斯くも詳しく說いてをられるのであります。

曾子は『論語』の學而篇に『我れ日に三たび、我が身を省みる』とて『人の爲に謀つて忠ならざるか、朋友と交つて信ならざるか、傳へて習はざるか』とありまして、人のために謀つて、心底を盡して殘るところがないやうにやれたか、どうか。また朋友と交つて、互に相背くやうなことがあつたか。續いて師に享けて、これを自分に習ひ、自得することが出來たか、どうか、と省みるとあります。斯くの如くに事がある時には、これを自己に省みて反省し、事のない時には、その正しい心を失はずに、自己の本性を養うて、孟子に『その心を存し、その性を養ふは天に仕ふる所以なり』とある通り此の靜坐によつて省察と存養とをせねばならぬと其の工夫を示されたのです。

曾子三省

○

竺氏尊二奉佛書一。太好。爲二我學者一。卻或褻慢經書。可レ愧可レ戒。

竺氏は佛書を尊奉す。太だ好し。我が學を爲す者、卻つて或は經書を褻慢す。愧づ可く戒む可し。

竺氏の竺は天竺のことで、釋迦の經典を學ぶ佛教徒を指したのであります。佛教徒は佛書を貴んで、日蓮宗の如きは、法華經其の者を本尊として居ります。この佛書を貴ぶといふことは眞に結構なことである。我が儒教、卽ち孔子の學問を爲すものが却てその經書を褻慢——馴れ侮つて、これを粗末にする者が多いのは實に愧づべく、また戒しむべきことであるとの小訓です。

收二斂精神一。以讀二聖賢之書一。讀二聖賢之書一。以收二斂精神一。

精神を收斂して、以て聖賢の書を讀み、聖賢の書を讀みて、以て精神を收斂す。

精神の修養はとかく散慢に流れんとする我が心を收斂と引き締めて行くのであります。此の引き締めた心を以て聖賢の書を讀み、その聖賢の書を讀んで、以て我が心を引き締めるやうにしなければならぬと讀書についての注意を述べたのであります。

◎儒ならず躁ならず

好レ靜厭レ動謂二之儒一。好レ動厭レ靜謂二之躁一。躁不レ能レ鎭レ物。儒不レ能レ了レ事。唯敬以貫二動靜一。不レ躁不レ儒。然後能鎭物了レ事。

靜を好み動を厭ふ、之を儒と謂ひ、動を好み靜を厭ふ、之を躁と謂ふ。躁は物を鎭むる能はず。儒は事を了する能はず。唯だ敬以て動靜を貫き、躁ならず儒ならず。然る後能く物を鎭め事を了す。

敬の一字

これは靜と動とについて、その缺點を教へられたので、靜を好んで動を厭ふ者は俗に言ふ、もの臭さ、面倒くさがり、引込み勝ちとなり、臆病にまでなるものであります。これに反して動を好んで靜を厭ふ者は俗にいふ、あわてもものお先き走り、騷ぎ廻りとなつてしまひます。かくの如く躁卽ちかるはづみであつては、物を鎭め定めることは出來ません。さればとて懦、卽ちもの臭さ、臆病では、仕事をなし遂げることは出來ません。この靜と動との二つを貫いて遽てず、引込まず、よく物を靜め、事をなし遂げるのが敬の一字であります。卽ち愼しみ深くして、動、靜の二面に偏せず、躁ならず、懦ならずしてやることが肝要であります。

○

震巽之感爲氣。坎離之交爲精。艮兌之合爲形。是男女構精之理也。

震巽の感を氣と爲し、坎離の交を精と爲し、艮兌の合を形と爲す。是れ男女精を構ふるの理なり。

これは性の本能を以て易理による天然の法則より出るものであることをいはれたもので、震は雷で動、男性の勢を示し、巽は風、女性の從順を示し、これが相感じて男女の氣となり、坎は水、離は火、これの相交ることによつて男女の精を爲し、艮は山、兌は澤、これが相合うて形を爲すので、これは天理であります。

○

人物凝聚水火。成此體軀。故非水火不生活。所好亦在水火。但宜令適中不偏勝。水勝則火滅。火勝則水涸。體軀亦不能保。

人物は水火を凝聚して此の體軀を成す。故に水火に非ざれば生活せず。好む所も亦水火に在り。但だ宜しく適中して偏勝せざらしむべし。水勝てば火滅し、火勝てば水涸れ、體軀も亦保つ能はず。

人間の軀は水と火とが凝り聚つて出來てをるのである。故に水と火とがなければ生きてゆくことは出來ません。また人間の好むところのものも、この水と火とであります。これは人間は天地陰陽の氣を享けてゐるといふ支那の通說から來たので、天の氣は陽であり、地の氣は陰であつて、その陽氣の聚つたものが火であり、陰氣の凝つたものが水であるといふのであります。――佛敎では、これを地水火風の四つにしてをります。それは別の場合に申上げます。――こゝでは水と火とについて語つたので、このどちらにも偏つてはならないといたしますので、水が勝ては、火が消えるし、火が勝てば水は涸れてしまふ。身體もまたその通りで、火氣が多過ぎても保つことが出來ず、水氣が多くつても保つことの出來ないものであると云ふのです。

○

酒。是水火之合。水其形而火其氣也。故體軀喜之。烟茶起於近代。然人亦多好之。以茶能發水之味。烟能和火之味也。然不可多服。多服則害人。況於酒害尤甚。余嗜烟茶。故書以自戒。

酒は是れ水火の合せるにて、其の形を水にして、其の氣を火にせるなり。故に體軀之れを喜ぶ。烟、茶は

近代に起れり。然るに人も亦多く之れを好む。茶は能く水の味を發し、烟は能く火の味を和するを以てなり。然れども多く服す可からず。多く服すれば則ち人を害す。況や酒に於てをや。害尤も甚し。余は烟、茶を嗜めり。故に書して以て自ら戒む。

酒と茶、烟草

酒といふものは、今言うた水と火とが併さつて出來てゐるもので、その形は水であつてその氣は火のやうなものである。この水火の合つてをるものであるから、人間の軀は酒を喜ぶ、この酒は神代の昔からあるけれども、烟草や草は近來に起つたものであります。烟草は恐らく應長年間頃から、茶はずつと古く、奈良朝時代からあつたのでありますが、茶の湯に使ふ茶などは鎌倉時代から行はれて來たので、この二つは人が多くこれを好みます。といふのは茶はよく水の味を顯はし、烟草はよく火の味を顯はしてをるものであるやうであります。しかし烟草や茶は多く飲んではよくない、多く飲めば人を害しますが、それより甚しいのは酒で、其の害は一番甚だしいのであります。自分は烟草や茶を好むから、此處に書いて自ら戒めとしたのであるといはれたのです。

◎讀書と作文

讀書。宜澄心端坐。寛著意思。乃爲有得。五行並下。何其心之忙邪。作文。宜命意立言。一字不苟。乃爲無瑕。千言立成。何其言之易邪。學者其勿徒效顰才人。以陷於忙與易。

書を讀むには、宜しく澄心端坐して寛く意思を著くべし。乃ち得ること有りと爲す。五行並び下るとは、何ぞ其の心の忙なるや。文を作るには、宜しく意を命じ言を立て、一字苟くもせざるべし。乃ち瑕無しと爲す。千言立ろに成るとは、何ぞ其の言の易なるや。學者其れ徒らに顰に才人に效ひて、以て忙と易とに陷ること勿れ。

凡そ書物は心を澄まし、身を正しく靜かに坐つて、ゆつくりソコに心をつけて讀んでこそ、得るところがあるのでありますに、世の中には五行並下ると云うて、一目に五行を讀み下だすといふやうな人がありますが、そんなことをして、どうして書物を會得することが出來るものでありませう。『何んぞ其の心の忙なるや』ナント忙しいことではないかと冷評せられたのであります。

作文も亦斯くの如くで、その題によつて立案して、一字も忽せにせぬやうにして初めて瑕のない文章が出來るのでありますのに、世の中には千言立ち所に成ると言うて何頁もの文章が直ちに書きあげられるといふやうな人がありますが『これも亦何ぞその言の易なるや』と冷評して、なか〳〵さう易々と出來るものではない。學者はかういふ才人の顰に效つて、その忙しさと、その簡易さに甘んじてはならないと讀書と作文について戒しめられたのであります。

讀書四要

讀書につきましては先にも申しましたが、毛穉黄といふ人に讀書四要といふものがありまして、

一に曰く收　心を將て收めて身子裏にあり、身を將て收めて書房裡にあるこれなり。

二に曰く簡　惟だ簡斯れ熟、若し治むる所のもの多ければ用力分れて奏功なく、精神疲れて歳月耗す。

三に曰く專　心を一處に置けば事として辨ぜざることなし、其の心を二三にすれば必ず成就することなし。

四に曰く恒　專心致志一なりと雖も苟も恒なく時に作し時に臨み、初ありて終り鮮し亦成るなきなり。故に恒を存ずる最も要たり。

句を練るは意を練るに如かず

作文の方もまたその通りで、古人が、

辭を練るは句を練るに如かず。句を練るは意を練るに如かず。意を練れば即ち辭句みな妙なり。

と申してをります通り、充分に心を練らなければならんので、昔の人はこれに苦心をして賈島といふ人は、

推敲

僧は推す、月下の門。

と云ふ句を得て、これは『僧は敲く月下の門』とした方がよいか『僧は推す月下の門』とした方がいゝかと此の推と敲との二字を考へて道を歩いて、役人の行列に觸れたといふ話がありますが、それから『推敲』といふ熟字が出たので、一字一句に苦心したのは、その通りで、或る俳諧師は、或る人の

米洗ふ前に螢の二つ三つ

といふ句を見て、それでは螢が死んでゐると、その句を一字直して、

米洗ふ前を螢の二つ三つ

と直されたといふ話があります。にとをとでは螢の死活に關するので一字一句忽がせにすべきものでないのであります。讀書も作文も共に靜かに落着いてやるべきことを教へられたのであります。

◎儒教の靜坐

靜坐之功。在於定氣凝神。以補小學一段工夫。要須氣容肅。口容止。頭容直。手容恭。棲神於背。儼然持敬。就自挖出胸中多少雜念客慮。貨色名利等病根伏藏。以掃蕩之。不然。徒爾兀坐瞑目。養成頑空。雖似定氣凝神。抑竟何益。

靜坐の功は、氣を定め神を凝らし、以て小學の一段の工夫を補ふに在り。要は須らく氣の容は肅、口の容は止、頭の容は直、手の容は恭にして、神を背に棲ましめ、儼然として敬を持し、就ち自ら胸中多少の雜念、客慮、貨色、名利等の病根の伏藏せるを挖出して、以て之を掃蕩すべし。然らずして徒爾に兀坐瞑目して、頑空を養ひ成さば、氣を定め神を凝すに似たりと雖も、抑竟に何の益あらむ。

靜坐の體容

靜坐の功は、氣を一つの所に定めて、精神を凝らして坐作進退を正しくし以て小學の一段の工夫を補ふにあります。儒教の方で『大學』は、治國平天下の書とせられて居りますが、『小學』の方は主として日常の起居動作の教へから述べられてをるのであります。その小學の起居動作を整へる上に於いて靜坐といふことが非常に功があるので、この靜坐の肝要なところは、呼吸は靜かに、口元は引締めて、頭の姿勢は正しく眞直ぐにし、手の置き所は恭々しくして、心を背に置く、即ち艮背の工夫であります。確りとした心をもつて、儼肅な氣をもつて、敬虔な態度をもつて、胸の中にあるさま〳〵の雜念や、外から起つてくる妄想や、貨色即ち金錢のことや、名利、即ち名譽や利益等の心を忘れ、總ての病氣の根源を探し出して、これを拂ひ除け

るのが肝要であります。

若しさうでなくして、徒らに古木のやうに坐つて、眼を閉ぢて、頑な石の如く、うつろな心を養成したならば、それは氣を定め、心を凝らすに似て居るけれども、つひに何の益もないことになるのであるといふので、これは王陽明も、『自分が前に寺中に在り。靜坐をしたのは坐禪入定するためではない。これを以て放心を收める一段の工夫をしたのである』と云うてをります通り此の靜坐によつて我が本心が外に出てをる即ち放心を呼び求めるのであるとて暗に枯木死灰の如くたゞ兀々として坐禪する禪の邪道に入つたのを諷せられた言葉であると思ひます。王陽明先生の傳にも、曾て坐禪してをられて、いろ〳〵な自分の祖母や父のことを想うて煩悶して、忽ち覺つて言はれるのに、

此の念孩提に生ず、此の念にして去るべくんば種性を斷滅せん。

この心は孩提――赤兒の時からあるのである。これを去つてしまつては、人間の生息は絶えるのである。こんな心まで去らうと思つてはならぬといふので、靜坐の方法を他の方面に考へられたといふのであります。それ等のことをも含めて、こゝに言はれたのであると思ひます。

◎本心呈露の標目

仁義禮智。種種名色。皆是本心呈露標目。有總稱。有子稱。隨處指點。究不過狀一己心體。卽是我見在活物。今做此言。亦此是物。故讀書時。當認做講我物。至臨事時。卻當認做讀活書。如是互看。於學有益。

仁義禮智、種種の名色は、皆是れ本心呈露の標目にて、總稱有り。子稱有り。處に隨ひて指點し、究に一己の心體を狀するに過ぎず。卽ち是れ我が見在の活物なり。今此の言を做すも、亦此れ是の物なり。故に書を讀む時は、當に認めて我が物を講ずと做すべし。事に臨む時に至りては、卻つて當に認めて活書を讀むと做すべし。是くの如く互に看れば、學に於て益有り。

活きた書物を讀め

仁と云ひ、義と云ひ、禮と云ひ、智と云ひさまゞ〳〵の名前がありますが、皆なこれは本心を顯はした名目であつて、そのうちには全體を稱したのもあり、または部分を稱したのもあつて、處に隨つて指摘せられたので、結局は一つの自分の心の本體を形容したのに過ぎないので、これらのさまゞ〳〵の名は、皆な我が心の活動して居る姿に外ならないのであります。今こんなことを言ふのも、此の心の姿で、かく言ふもの、それ何者であるかと考へてみなければならないのでありますから書物を讀む時には、常に我が物を講說するのであると考へ、また事に臨んだ時には活きた書物を讀むといふ氣で之れに當らなければなりません。このやうにしてゆけば、學問に於いて益するところが多いと謂はれたのであります。

◎無字の書

學貴自得。人徒以目讀有字之書。故局於字。不得通透。當以心讀無字之書。乃洞有自得。

學は自得するを貴ぶ。人徒らに目を以て字有るの書を讀む。故に字に局して、通透するを得ず。當に心を

以て字無きの書を讀むべし。乃ち洞して自得する有らん。

學問は自ら得入する所あるを貴ぶので、徒らに目で字のある書物を讀むことばかり考へ、その字に局促して字句の末に走り、大體の意味に通達することが出來ないのであります。されば書物を讀むのには我が心を以て、文字のない書物を讀む考へでなければならぬ。此の文字のない書物を讀むことに於て、文字以外に含まれて居る書物の意味を自得し、所謂活眼をもつて活書を讀む。これは東洋の書物は殊に文字以外に意味を含ませてゐるので、徒らに文字に囚はれますと、文字の墮落になつてしまふのである。禪宗が『文字を離れよ』と謂つてゐるのも、その弊害を指摘したのであります。

學者とその主張

學人各有二得力處一。舉與二人看一。固可。但主張太過。標以爲二宗旨一。則後必有弊。可レ虞也。

學人は各力を得る處有り。擧げて人に與へて看しむ。固より可なり。但だ主張太だ過ぎ、標して以て宗旨と爲せば、後必ず弊有り。虞る可きなり。

學者にはそれ〴〵自分の得たところの力量があるものであるから、これを人に見せしめるといふことは、もとより良いことである。しかし、たゞ自分の主義とするところばかりを骨張するに過ぎて、それが一種の宗派のやうに片寄つてしまつたならば後に必ず弊害が起るものであるから、これは餘ほど氣を付けなければならないと思ふ。

○

看月觀二清氣一也。不レ在二圓缺晴翳之間一。看花觀二生意一也。存二於紅紫香臭之外一。

月を看るは、清氣を觀るなり。圓缺晴翳の間に在らず。花を看るは、生意を觀るなり。紅紫香臭の外に存す。

月を看るのは、その清らかな氣を觀賞するのであつて、決して圓いとか、缺けてゐるとか、晴れてゐるとか、曇つてゐるとかいふことを觀るのではない。一天晴渡つたその月に向つた時に、我が心も自ら澄み渡るを思ふのである。花を觀るのは、その生々としたところを觀るので、紅であるとか、紫であるとか、香が有るの、無いのといふやうな外形の外に觀るべき所があるのであると云はれたのです。

○

小藥。是草根木皮。大藥。是飲食衣服。藥原。是治レ心修レ身。

玄戰執徐孺月。臥レ病偶書。

小藥は是れ草根木皮、大藥は是れ飲食衣服、藥原は是れ心を治め身を修むるなり。

玄戰執徐孺月病に臥して偶書す。

草の根や、木の皮から出來たのは小さな藥であるが、人間の病を治する大きな藥といふものは、それは日

治心修身の効

常の飲食や、衣服にあるのである。しかもその根源を探ねると、それは心を治め、身を修めるといふところにあるので、これほど軀を良くしてゆく藥はないのであるといはれたのです。

こゝの註に玄戯とあるのは壬で、執徐は辰、萬月は十二月、卽ち天保三年壬辰、先生六十三歲の時のことであります。

○

時時提撕。時時警覺。時時反省。時時鞭策。

時時に提撕し、時時に警覺し、時時に反省し、時時に鞭策す。

我々の精神を修養するのには、時々に心をひつさげ、引き立てゝ、時々に戒め、覺まし、時々に反省し、時々に鞭ち勵まさなければならぬと平常の精神修養の注意を述べられたのであります。たゞ一度、提撕したり、警覺したり、反省したり、鞭策するだけで、時々これを繰返へさなければ、何の役にも立たぬことを言うたのです。

○

聖人無爲。固以德感。然其所可爲則爲之。聖人無欲。固無私心。然其所可欲則欲之。孟子曰。無爲其所不爲。無欲其所不欲。如此而已矣。

聖人は欲する所を求む

聖人は無爲なり。固と德を以て感ず。然れども其の爲す可き所は之を爲す。聖人は無欲なり。固と私心無し。然れども其の欲す可き所は之を欲す。孟子曰く、其の爲さざる所を爲す無く、其の欲せざる所を欲する無し。此くの如きのみと。

聖人は別に何事も爲すことなくして、其の德をもつて人を感化してゆくのでありますが、その爲さねばならぬ所に向つては、何の躊躇もなくこれを爲されるのであり、聖人は無欲で、固より私心はないのでありますが、その欲し希はねばならぬところに向つてはこれを欲し求められるので、『孟子』の盡心篇に、

其の爲さざる所を爲す無く、其の欲せざる所を欲する無し。

とあるに基いたのであります。

◎讀書は心學

讀書亦心學也。必以寧靜。勿以躁心。必以沈實。勿以浮心。必以精深。勿以粗心。必以莊敬。勿以慢心。孟子以讀書爲尙友。故讀經籍。卽是聽嚴師父兄之訓也。讀史子。亦卽與明君賢相。英雄豪傑相周旋也。其可不淸明其心以對越之乎。

讀書も亦心學なり。必ず寧靜を以てして、躁心を以てする勿れ。必ず沈實を以てして、浮心を以てする勿れ。必ず精深を以てして、粗心を以てする勿れ。必ず莊敬を以てして、慢心を以てする勿れ。孟子は讀書

を以て尙友と爲せり。故に經籍を讀むは、卽ち是れ嚴師父兄の訓を聽くなり。史子を讀むも、亦卽ち明君、賢相、英雄、豪傑と相周旋するなり。其れ其の心を淸明にして以て之と對越せざる可けんや。

書を讀むのも、やはり精神修養の心の學問であります。故に寧靜――卽ち寧らかに靜かにして躁がしい心をもつて書を讀んではならないのであり、沈實――卽ち落着いた心をもつて讀んで、浮き浮きした心で讀んではならないのである。又必らず詳しく、深く讀むことを考へて、荒々しく、上つ面の讀み方をしてはならないのであり、嚴かに愼しんだ莊敬をもつて讀むべきで、侮る心をもつてしてはならないのであります。

先きに申しましたやうに孟子は讀書をもつて古い友達と交はるやうに謂うてをります。故に經籍、卽ち四書五經の如き聖賢の敎への書物を讀む時には、嚴しい師匠や、父や、兄やの敎へを聽くやうな態度でなければならない。また歷史や、諸子百家の書を讀む時には、聰明なる君主、或は賢良なる宰相、英雄、豪傑と交際するのと同じやうなものであるから、その心を淸く明かにして、これに勝れるやうな氣慨をもつて讀まなければならないのであるといはれたのです。

○

李延平曰。理不患其不一。所難者分殊耳。李谷子反之曰。分不患其不殊。所難者理一耳。余則謂二先生之言。雖似各有所得。然恐非究竟語。其實眞能知理一者。卽能知分殊者。未知理一。焉能知分殊。眞知分殊者。卽能知理一者。未知分殊。焉能知理一。今以難易言之。見猶未透。

李延平と李谷子

李延平曰く、理は其の一ならざるを患へず。難き所は分の殊なるのみと。李谷子之れに反して曰く、分は其の殊ならざるを患へず。難き所の者は理の一なるのみと。余は則ち謂ふ、二先生の言、各得る有所るに似たれども、然れども恐らくは究竟の語にあらじと。其の實、眞に能く理の一なるを知る者は、卽ち能く分の殊なるを知る者なり。未だ理の一なるを知らず、焉んぞ能く分の殊なるを知らむ。眞に分の殊なるを知る者は、卽ち能く理の一なるを知る者なり。未だ分の殊なるを知らず。焉んぞ能く理の一なるを知らむ。今難易を以て之を言ふは、是れ猶ほ未だ透らざるなり。

これは李延平と李谷子との眞理討究に關する相反對する意見を擧げて、自己の所見を述べられたので、二人共に宋の大儒でありまして延平の方は名は洞、字は原中と申し世に延平先生といひ、上來しば〳〵引用いたしました朱子の師に當る人です。此の人の理は必らずしも一つでないのを患へないが、それがさま〴〵に分れて異なる所を洞察するのが困難であるといはれたに對して、李谷子、名は畋、自ら谷子と號し、『谷子』といふ著書のある人ですが、それはさうではない、其のさま〴〵に分岐して居るのはよいとしても、其の見難き所は理の一なる所であるといはれて居ります。今余卽ち一齋先生は此の兩先生の言はおの〳〵得入せられた所があるやうではあるが、恐らくこれは究極まで到り盡くしたものではあるまいと思ふ。何故かなれば、能く理の一つであることを知つたならば、必らず其のさま〴〵に分れて異なる點を知ることの出來るものでまだ其の理の一つなるを知らずして、どうして分の異なるを知ることが出來やう。眞に分の殊なるを知る者

にして、初めて理の一なるを知ることが出來るので、今ドチラが困難だとか、容易だといふのは、まだ透徹した見解とはいはれぬといはれたのであります。私は之れを平等の一、即ち差別の殊、差別の殊、即ち平等の一で、一多相即して離つていふべきものでないと思ふのですが、此の事は他の講述を御參照を願ひます

○

草木之萠芽。必移植而培養之。乃能暢茂條達。子弟之於業亦然。必使之就師於他邦。資其藁籥。然後有成。碌碌膝下。區區鄉曲。豈有暢茂條達之望。

草木の萠芽は、必ず移植して之を培養すれば、乃ち能く暢茂條達す。子弟の業に於けるも亦然り。必ず之をして師に他邦に就きて其の藁籥に資せしめ、然る後に成る有り。膝下に碌碌し、鄉曲に區區たらば、豈に暢茂條達の望有らんや。

可愛い子には旅をさせよ

草木の芽生え、即ち苗木は、これを外に移し植ゑて培ひ養へば、よく暢茂條達——生長もし、枝葉も伸び繁つてゆくものであります。子弟の學業に於けるのも亦同じ道理で、必ず子をして、外の國の師匠に就けて、その藁籥——藁は外の箱で、籥は内の管であります。つまり鍛冶屋の使ふ鞴のことで、この鞴にかけるやうに師匠に陶冶してもらはなければならない。陶冶してもらつて後に成功するので、自分の膝下に碌々として置くとか、また鄉曲、即ち自分の田舍に區々としてをつたのでは、決して枝を繁らし、幹を伸ばしてゆくやうに成功する望みはないのであります。

○

草木移植。必有其時。培養又有其度。勿太早。勿太遲。勿過多。勿過少。子弟教育亦然。

草木の移植には、必ず其の時有り。培養には又其の度有り。太だ早きこと勿れ。太だ遲きこと勿れ。多きに過ぐること勿れ。少きに過ぐること勿れ。子弟の教育も亦然り。

これも亦同じやうに、草木について子弟の教育を言うたのであります。草木を移し植ゑるには、必ずその時季があり、これを培ひ養ふのにも、その度合があります。移植は甚だ早過ぎてもならないし、また甚だ遲過ぎてもならない。肥料は多過ぎても、少な過ぎてもよくない。子弟の教育も亦その通りであつて、遊學にも時機があり、修養にも程度があるといふのです。

○

修身二字。上下一串。心意知物。雖有次第。而工夫則皆修身内子目。無先後也。家國天下。雖有小大。而隨在皆修身感應之地。無彼此也。

脩身の二字は、上下一串す。心意知物、次第有りと雖も、而も工夫は皆脩身内の子目にして、先後無きなり。家國天下、小大有りと雖も、而も隨在に皆修身感應の地にして、彼此無きなり。

修身は一切を一貫す

修身の二字は、上は國家から、下は一身に至るまで一貫してゐるので、大學の教には心を正しくし、意を誠にし、知を致し、物格ると順序がありますが、而もその工夫は修身の中の小分けに過ぎないので、別段後先はないのである。これは先に申しました大學の、天下を平らかにせんとする者は、先づその國を治め、その國を治めんとする者は、先づその家を齊ふ。その家を齊へんとするものは、先づ身を修めるとあるやうに、天下でも、國家のことでも、一家のことでも、大きい、小さいはあるやうでありますが、しかし、皆な身を修め、德に感ずるのことであつて、別段彼れ是れの區別はないのである。と修身をもつて一切を一貫すべきことを言はれたのであります。

○

人至二五十已後一。有二春心再動時候一。是衰徵也。將滅之燈。必乍發焰。與此一般。
余往年有二自警詩一。曰。晚年莫學少年人。節輒荒頽多誤身。悟得秋冬黃爛際。一
時光景似二陽春一。頒白誰憐遲暮人。自知三戒在二終身一。要看枯樹閑花發。也是枝頭
一刻春。

人は五十已後に至りて、春心再び動く時候有り。是れ衰徵なり。將に滅せんとするの燈、必ず乍ち焰を發す。此れと一般なり。余往年自ら警むる詩有り。曰く、晚年學ぶ莫れ少年の人を、節輒ち荒頽して多く身を誤る。悟り得たり秋冬黃爛の際、一時の光景陽春に似たるを。頒白誰か憐む遲暮の人、自ら知る三

晚年學ぶ莫れ少年の人

戒の終身に在るを。看るを要す枯樹、閑花發くも、也た是れ枝頭一刻の春なるをと。

人間の性欲といふものは青年期に萠して、壯年期に盛んに、それより次第に衰へて行くものでありますが、それが五十歳以後の老境に入らんとして再び青春の頃の氣が發動することのあるものでありますが、それは實は身體の衰弱し來らんとする前兆で、丁度燈火が滅せんとして一時明かになるやうなものであります。自分は曾て詩を作つて自ら之れを警めたことがあります。其の詩は『晚年學ぶ莫れ少年の人』年寄つてから若い者の眞似をしても駄目だぞ、『節輒ち荒頽して多く身を誤る』ソンナことをすれば、身體の節制がくづれて身を誤る。それは恰も『悟り得たり秋冬黃爛の際、一時の光景陽春に似たるを』で、秋から冬へかけて木の葉の黃ばみたる頃の所謂小春日和のやうなものである。『頒白誰か憐む遲暮の人』まことに憐れに思はるゝものは、此の白髮まじりになつた年寄りの御連中だ。誰れがコンナ連中を相手にするものだ。『自ら知る三戒の終身に在るを』三戒とは『論語』に『少き時は之れを戒むる色にあり、壯なる時は之れを戒むる鬪にあり、老ゆるに及んで之れを戒むる得にあり』とあるを指したので、此の三戒は其の年頃ばかりではない生涯の戒めとすべきである。『看るを要す枯樹閑花開くも』年寄りの若返りは枯れた木に返り花の咲いたやうなもので『又た是れ枝頭一刻の花』僅かの間、咲いて居るだけのものだと。老人の反省を促したのです。

○

武事不二專在一武藝。文學不二必在一文籍一。

武事は專ら武藝に在らず、文學は必ずしも文籍に在らず。

今の人は武事と云へば、武藝にあるやうに考へて居るが、決して武事は武藝ばかりにあるのではない。また文學と云へば、文章や書籍にあるやうに考へて居るが、決して書籍や文章に限られたものではない。武事も精神であり、文學も亦、精神にあるとの意を示されたのです。

○

瞽目能以耳視物。聾瘂能以目聽物。人心之靈足賴者如此。

瞽目は能く耳を以て物を視、聾瘂は能く目を以て物を聽く。人心の靈の賴むに足る者此くの如し。

瞽目卽ち盲はよく耳をもつて物を見てゆくやうに判斷しますし、聾や瘂は目をもつて物を聞き分けてゆくやうに致します。これが卽ち人間の心の靈妙不思議なところで、人の心の賴むに足るところのものは、實に斯くの如きものであるといふ感想です。

靈妙なる心

◎人氣土氣

人氣質混合土氣習氣。須識別。土氣。由其地氣結聚者。竟是主氣也。習氣。緣其習俗滲染者。原是客氣也。客可逐而主不可逐。故易變化者習氣。不易變化者土氣。土氣止順導之。去其過不及耳。

人の氣質は、土氣習氣を混合すれば、須らく識別すべし。土氣は其の地氣に由りて結聚する者、竟に是れ主氣なり。習氣は其の習俗に緣りて滲染する者、原と是れ客氣なり。客は逐ふ可くして、主は逐ふ可からず。故に變化し易き者は習氣にして、變化し易からざる者は土氣なり。土氣は止だ之を順導して、其の過不及を去るのみ。

風俗亦人氣也。故有土俗。有習俗。習可變而土不可變。是亦止順導之。抑其過而掖其不及耳。爲政者所宜知。

風俗も亦人氣なり。故に土俗有り。習俗有り。習は變ずべくして、而も土は變ず可からず。是れ亦止だ之を順導し、其の過ぎたるを抑へて、其の及ばざるを掖くるのみ。政を爲す者の宜しく知るべき所なり。

草木氣質。有清濁輕重。寒溫堅脆。酸甘辛苦。諸毒之不同。醫書謂之性。卽皆土氣也。人氣質亦然。然其同具生生之理則一也。

草木の氣質には、清濁、輕重、寒溫、堅脆、酸甘、辛苦、諸毒の同じからざる有り。醫書に之を性と謂ふ。卽ち皆土氣なり。人の氣質も亦然り。然れども其の同じく生生の理を具ふるは則ち一なり。

この三則は土氣習氣について言うたものであります。一體、人の氣質といふものは土氣と習氣とを混合し

てをるのでありますから、人を導かうとする者は、よくこれを識り別けねばなりません。土氣といふのは、その地の精神によつて、結び聚まるもので、これが主なる氣となるので、習氣は、その地方の習慣風俗によつて滲込むもので、これは外から來た氣であります。

土氣は地文的

こゝに土氣と習氣とあるのは、土氣は主として地文的の關係で、山とか川とか、或はその土地の痩せてゐるとか、肥えてゐるとか、島國であるとか、平原國であるとか、或は山國であるといふやうな地的狀態が、その人の氣質に影響するものを言ふのである。このことは前にも出ました通り、人間は地を離れることは出來ないものでありますから、地の影響を受けることは實に大きいのであります。

習氣は人文地理的

習氣といふのは人文地理的の影響と云うてもよいのであります。その地方の風俗であるとか、習慣であるとか、それがその人に滲み込むので、例へば關東と關西、奥羽と九州といふやうに其の風俗習慣が異り、舊藩時代に於きましては、その藩々にそれ〴〵の氣風があるのも、亦この習氣に屬するので、その習氣の方は元來外から來た客であるから追ひやることが出來るがその主たる土氣は、なか〳〵追ひ拂ふことは出來ない。それであるから變化し易いものは習氣であり、變化し易からざるものは土氣であるから土氣の方は、其の土地の狀勢に隨ひ、之れを導いてその過ぎたるものは去り、及ばざるものは補つてゆくやうにしなければならないと見られたのであります。

風俗も亦一つの人氣であつて、それにも土俗と云うて土に起つた風俗があり、また時代の風習による習俗と云ふべきものもある。時代の風習は變へることは出來ますけれども、その土地の風俗は、なか〳〵變じ難いものであります。これ亦、これに隨ひ導いて、その過ぎたるは抑へ、及ばざるものは披けるといふことが政を爲す者の知るべき所であります。

草や木の氣質には清いの、濁つたの、輕いの、重いの、寒いの、溫かいの、堅いの、脆いの、酸いの、甘いの、辛らいの、苦いのと、いろ〳〵な同じからざるものがあります。醫者の書物では、これを草木の性と謂うてをります。この草木の性といふものも、皆な土氣であつて人の氣質も亦、そのやうにさま〴〵に異つて居りますが、皆な生々發展するの理を備へてゐるのは卽ち一つであります。

○

仰觀山。厚重不遷。俯見水。汪洋無極。仰觀山。春秋變化。俯見水。晝夜流注。仰觀山。吐雲呑煙。俯見水。揚波走瀾。仰觀山。巍隆其頂。俯見水。遠疏其源。山水無心。以人爲心。一俯一仰。莫非教也。

仰ぎて山を觀れば、厚重にして遷らず。俯して水を見れば、汪洋として極り無し。仰ぎて山を觀れば、春秋に變化し、俯して水を見れば晝夜に流注す。仰ぎて山を觀れば、雲を吐き煙を呑み、俯して水を見れば、波を揚げ瀾を起す。仰ぎて山を觀れば、巍として其の頂を隆くし、俯して水を見れば、遠く其の源を疏く。山水は心無し。人を以て心と爲す。一俯一仰、教に非ざる莫きなし。

仰いで山を觀ますれば、厚重、卽ちドッシリとして動かすことの出來ないやうであり、俯して水を觀ますれば、汪洋、卽ち廣々として際限がありません。仰いで山を觀れば、春は花咲き、秋は紅葉するやうに變化します。俯して水を觀ますれば、晝夜の區別なく、流れて注いでをります。仰いで山を觀れば、雲を吐き煙

を呑んで、所謂霞のうちに遙かに見えたり、雲によつてさまゞに變化してゆき、俯して水を觀ますれば、波を揚げ瀾を起す。波は小さな波、瀾は大波であります。卽ち細波小漣、或は狂瀾怒濤となつてゐる。仰いで山を觀ますれば、巍然として、その頂を隆くして居り、俯して水を觀ますれば、遠くその源から流れ出てをります。この山や水は心はないのでありますが、人の心によつて樣々に教へを受けられる。斯く感じます時、一俯一仰、卽ち仰いで山を觀、俯して水を觀るのも、皆な教へにほかならないといふのですが、これは寧ろ先生の文才を見るべきです。

○

邦俗葬祭。都用浮屠。冠婚。依遵勢笠兩家。在吾輩則自當用儒禮。而漢土古禮。今不可行。須斟酌時宜。別創一家儀注。喪祭。余嘗著哀敬編。冠禮。亦有小著。務要簡切明白。使人易行耳。獨婚禮則事涉兩家。勢不得如意。當以漸與別爲要。

邦俗の葬祭は都べて浮屠を用ひ、冠婚は勢笠の兩家に依遵す。吾が輩に在りては則ち自ら當に儒禮を用ふべし。而れども漢土の古禮は、今行ふべからず。須らく時宜を斟酌して、別に一家の儀注を創むべし。喪祭は余嘗て哀敬編を著はし、冠禮にも亦小著有り。務めて簡切明白にして、人をして行ひ易からしむるを要するのみ。獨り婚禮は事兩家に涉り、勢、意の如きを得ず。當に漸と別とを以て要と爲すべし。

我が國の風俗では葬式や先祖の祭には、浮屠——卽ち佛教を用ひます。さうして元服や婚禮は伊勢流や小笠原流によつてをりますが自分は支那の儒者の禮を用ひて居る。しかし支那の古い禮は今、行ふことは出來ないから、時代を斟酌して、自分の家の一家の儀式次第を作つたが、そのうち喪祭については、嘗て『哀敬編』といふものを書き、元服の禮儀も小さな書物ではありますが、務めて簡單明瞭にして、人をして行ひ易からしめるやうにした。しかし婚禮は事が自分だけでなくして、相手の家があるので、勢ひ思ふがまゝにならない。これは漸次に、また別々に考へてみることが必要であると思ふといふのです。

○

邦俗。養子承後。雖出於不得已。於道亦不太妨。堯以舜爲婿。後以天下與之。祭法曰。有虞氏祖顓頊而宗堯。則全然與養子承後相類。蓋亦天也。

邦俗にて、養子もて後を承くるは、已むを得ざるに出づと雖も、道に於ても亦太だ妨げず。堯は舜を以て婿と爲し、後に天下を以て之に與ふ。祭法に曰く、有虞氏は顓頊を祖として堯を宗とすと、則ち全然養子もて後を承くると相類す。蓋し亦天なり。

我が國の風俗で、養子が後を繼ぐのは、これは已むを得ないのに出たのであるし、また道德の上から論じても妨げのないことで、堯は舜をもつて婿として、後、これに天下を讓つたのです。『禮記』の祭法に有虞氏は——有虞氏と云ふのは舜の氏であります。顓頊を祖始として、堯を宗——本家としてをるとあります。こ

れは全然養子が後を繼ぐのと似てをるのであります。思ふに養子を立てゝ家を繼ぐといふのは、子がないから起つた自然の出來事であらう。

○

生生無病。物之性也。其受病必有可療之藥。卽生生之道也。然生物又有變焉。偶有不可藥之病。非醫之罪。譬猶百穀無不生生。而時有稗不可食。非農之罪。

生生にして病無きは、物の性なり。其の病を受くるときは、必ず療すべき藥有り。卽ち生生の道なり。然れども生物には又變有りて、偶藥すべからざる病有り。醫の罪には非ず。譬へば猶ほ百穀の生生せざる無けれども、而も時に稗有りて食ふ可からざるがごとし。農の罪には非ず。

生々として病氣のないのが物の本性であつて、病を受くれば、必ずこれを治療する藥があるのも亦生々の道であります。しかし生物にはまた變つたことがあつて、偶ま藥治することの出來ない病氣がある。これは醫者の罪ではないので、丁度穀物の生々發育せぬのは無いのでありますが、時にしひな（秕）のやうに穀はあつても實なく喰ふべからざるものが出來ます。これは農の罪ではないのと同じことであるといふのです。本文に稗とあるもひえのことでなく、しひな（秕）のことであらうと思ひます。

◎子を教ふ

教子。勿溺愛以致縱。勿責善以賊恩。

子を教ふるには、愛に溺れて以て縱を致すこと勿れ。善を責めて以て恩を賊ふこと勿れ。

勿忘。勿助長。教子亦可存此意。嚴而慈。是亦用待子可也。

忘ること勿れ。助けて長ぜしむること勿れ。子を教ふるも亦此の意を存すべし。嚴にして慈。是も亦子を待つに用ひて可なり。

易子而教。固然。余謂有三可擇。師可擇。友可擇。地可擇。

子を易へて教ふるは、固より然り。余謂へらく、三つの擇ぶ可きもの有り、師擇ぶ可し、友擇ぶ可し、地擇ぶ可しと。

この三つは子供を教へることについての注意を述べたのであります。子を教育するのに愛に溺れて、その子供を放縱と我が儘、氣儘に導いてはならぬし、また善を行ふことを責めて、親の恩を仇にするやうな氣を起させてはならないのである。換言すれば、宜しきを得て、愛に溺れず、嚴に失せないやうにしなければならないといふのであります。

次ぎの句は『孟子』の公孫丑の上に、

嚴と慈

必ず事あり、質すこと勿れ。心忘るゝこと勿れ。助長すること勿れ。

とありますが、今それを用ひ來たつて、そのことを忘れてはならないが、また子を強ひて世話をして助けて長ぜしめてはならないとありますが、これはまた子供を教へる上にも考へるべきことで、嚴と慈と、この二つ。即ち嚴格であると共に、慈悲深いといふことが子供を取扱ふ上に良いことであります。

次ぎの子を替へて教へるといふことは前にも申しましたが、自分の家で教へずして、他にやつて教へしめる。これは良いことであるが、このために三つ擇ぶべき事がある。即ち一つは師匠を擇ぶ。次に友を擇ぶ。それから土地を擇ぶといふことであります。子供を他に留學せしむるにしても、この三つを選擇することは今日に於いても最も必要なことであります。注意しなければならないといふのです。

◎乘除一理

乘除一理。福幸。乘數也。患難。除數也。歸之平數。則無福幸。無患難。故乘除。只是屈伸消長之迹耳。

乘除は一理のみ。福幸は乘數なり。患難は除數なり。之を平數に歸すれば、福幸無く、患難無し。故に乘除は、只だ是れ屈伸消長の迹のみ。

人遭患難憂懼時。當自反把從前所受福幸。以乘除之。商出其平數。可也。

人は患難憂懼に遭ふ時、當に自ら反りみて從前受くる所の福幸を把りて、以て之を乘除し、其の平數を商出すべし。可なり。

乘除は掛算と割算とでありますが、人生の幸福といふものは、丁度掛算のやうなものであつて、增してゆくが、患難辛苦は丁度割算のやうなもので、非常に減じてゆく。しかし、この割算を掛け、掛算を割つてみれば、もとの數になる。そこには幸もなければ、患難もないのである。この乘と除の增すのも、乘と除の減ずるのも、丁度人間の、或は屈し、或は伸びてゆく、盛衰消長の迹と同じやうなものであると思ふ。

それであるから、人は患難や憂懼——心配事に遭つた時に、かへつて前に受けた幸福をとつて、これを掛けたり割つたりして、その比例を出してみるがよい。さうすれば患難必ずしも悲むを要しない所以が明かになるであらうとの教へです。

吾人爲學。只要喫緊實際。終日學問思辨。終日戒愼恐懼。便是見在篤行工夫。學無此外而已。若丟卻見在。另覓之悠渺冥漠。則非吾儒之學。

吾人の學を爲すには、只だ喫緊に實際ならんことを要す。終日學問、思辨し、終日戒愼、恐懼するは、便ち是れ見在篤行の工夫なり。學は此の外無きのみ。若し見在を丟卻し、另に之を悠渺冥漠に覓めなば、則ち吾が儒の學に非ず。

我々が學問をするのは、たゞ喫緊——しつかり、きびしく——目前緊急なことに對するやうにこれを實際

四辨

に活用してゆくことが肝要であります。それであるから、終日學問をして、思ひを巡らし、終日戒めて愼んでゆくのは、現在我が身について、其の身の行を篤くするの工夫であります。これは『中庸』に、

博くこれを學び、審かにこれを問ひ、愼しんでこれを思ひ、明かにこれを辨じ、篤くこれを行ふ。

とあるのによつて、これを四辨と云ひ、また戒愼恐懼とあるのは、同じ『中庸』に、

道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらざるなり。この故に君子は、その見ざるところに戒愼し、その聞かざるところに恐懼す。

とあるによつたのであります。實際、學問は何かにつけて、まゝ、現在の喫緊的なことを閑却して、別に悠渺冥漠とした、取りとめもないところに、これを求めんとするが、これは我が儒の學問ではない。と言うて、暗に幽玄を貴ぶ老莊や、微妙を語る佛教を諷示されたのです。

◎讀史小感

余讀史。歷代開國人主。無非閉氣英傑。其貽孫謀亦多。至守成之君。有得於初政而失於晚節者。尤可惜。蓋其得於初政。固非庸器。但輔弼大臣。不得其人。則往往爲其所蠱。投好中欲。以固一時之寵。於是。人主亦不自知其過。意滿志懈。以爲無復可虞。終以謬國是。是故虞夏商周。必置左輔右弼。前疑後丞。以全君德。其爲慮也深矣。

余、史を讀むに、歷代開國の人主は、開氣の英傑に非ざるは無し。其の孫謀を貽すも亦多し。守成の君に至りては、初政に得て晚節に失ふ者有り。尤も惜しむ可し。蓋し其の初政に得れば、固と庸器に非ず。但だ輔弼の大臣其の人を得ざれば、往往に其の蠱する所と爲り、好みに投じ欲に中て、以て一時の寵を固うす。是に於て人主も亦自ら其の過を知らず、意滿ち志懈り、以て復た虞る可き無しと爲し、終に以て國是を謬れり。是の故に虞、夏、商、周は、必ず左輔、右弼、前疑、後丞を置き、以て君德を全うせり。其の慮を爲すや深し。

これは讀史偶感ともいふべき小品でありまして、古來歷代國を開くほどの創業の人主は、何時もザラにあるといふやうな人物でなく間氣とて世を隔てゝ其の氣運に乘じて出らるゝ英雄豪傑でないのはなく、其の孫謀とて子孫に貽さるゝ所の謀計も亦立派なものがあるのでありますが、さて之れを守つて充分に其の成功を繼續さして行くべき守成の君を見ますと、其の初めのほどは政治も行き屆き、民心を得るやうにせられますが、晚年に至りますと其の初めの立派な所は失はれて行く所が多いのを見て、毎に惜んで居る次第である。勿論、其の初政に得る所のあるには、凡庸の器量ではないのでありますが、之れを輔佐すべき大臣に其の人を得ませんと、往々其の蠱——穀中の蟲——毒せらるゝ所となり、之れに禍ひせられて、終に初めの志を失ふに至りますので、其の人を得ざる大臣とは如何なる人であるかと申しますと、自分の寵愛を占むることを第一とし、何事も、お氣に入るやうに〳〵と人の好む所に投合し、其の欲する所に中るやうにといたしますのゝ、人主たるものも、それに滿足して其の過たることを知らず、次第に政務に怠つて、別段に虞るべき憂も

なしとして、終に開國の人主よりされ貽たる孫謀をも忘れ、一國統治の大方針ともいふべき國是を謬るに至りますので、古代の善政といはるゝ虞、夏、商、周（これは前にしば〳〵出て居ります）の時代には、必ず人主の左右前後に、之れを輔佐する賢臣を置き、以て君德を全からしめるやうな制度を立てたのは、其の思慮の深きを見るべきであるといはれたのです。左輔、右弼、前疑、後丞に就ては『尙書大傳』に、

天子の四隣

古は天子、必らず四隣あり。前は疑といひ、後は丞といひ、左は輔といひ、右は弼といひ、天子、問あり、以て對ふるなければ之れを疑に責め、志すべくして志さざれば、之れを丞に責め、正すべくして正さゞれば、之れを輔に責め、揚ぐべくして揚げざれば之れに弼に責む。

とありまして、皆な天子を輔佐すべき職務であります。

○

君子而不才無能者有之。猶可以鎭社稷。小人而多才多藝者有之。秖足以亂人國。（癸酉王月下澣識。）

君子にして不才無能なる者之れ有り。猶ほ以て社稷を鎭む可し。小人にして多才多藝なる者之れ有り。秖に以て人の國を亂るに足る。（癸酉王月下澣識るす。）

君子、卽ち人格の非常に立派な人でも、才能のない人があります。しかしこれはなほ社稷、卽ち國家を鎭めるのに足りますが、小人で、人格の立派でない人で才藝の勝れた者があります。これは徒らに人の國を亂すに足る者であると思ふといふだけの感想です。こゝに癸酉王月とありますが、これは文化十四年であります。前に天保三年が出てをりますから、これは恐らく天保四年の癸巳の誤りでありませう。

○

唐代三患。爲外寇。爲藩鎭。爲宦官。人主非不知。然終以此斃。以宰輔非其人也。可鑑之至。

唐代の三患は、外寇と爲し、藩鎭と爲し、宦官と爲す。人主も知らざるに非ざれども、然も終に此れを以て斃れぬ。宰輔の其の人に非ざりしを以てなり。鑑む可きの至なり。

唐滅亡の因

これは唐の歷史を讀んでの感想であります。唐代の三つの憂患となつたものは、一つは外寇、卽ち契丹等が外から內を窺はんとしますし、第二には藩鎭、邊境を治める節度使が跋扈したことであり、三には宦官として宮中にをつて天子の側近に仕へてをる者共の專橫であります。これを唐の代々の君主が知らなかつたのではないのであるがつひにこれをもつて唐は倒れてしまつた。それは全く宰相たる者に、その人がなかつたからであります。これは考へねばならんことである。といふのは、恐らく當時、德川の天下は末期に向かつてをりまして、相當ロシヤやイギリスの船が屢々邊境に參つてをりますし、また外樣の雄藩である薩摩、長州が漸次勢ひを得てをります。宦官は日本の制度にはなかつたのでありますが、大奧の女中達が、いろ〳〵政

治に嘴を入れることを指して、暗にこの感慨を漏らされたのであると思ひます。

○

能受人言者。而後可與一言。與不受人言者言。不翅失言。秖以招尤。無益也。

能く人の言を受くる者にして、而る後に與に一言す可し。人の言を受けざる者と言はば、翅に言を失ふのみならず、秖に以て尤めを招かん。益無きなり。

よく人の言ふことを受け入れる人であつて、始めて共に話することが出來るのである。何でも彼でも、人の言葉を受け入れない者は、ただにさういふ人と語りたくないばかりでなく、語れば、かへつて咎めを受けることで、全く益のないこととなつてしまふ。と云ふのであります。

○

人情如水。使之如平波穩流爲得。若不然。激之。壅之。忽起狂瀾怒濤。可不懼乎。

人情は水の如し。之れをして平波穩流の如くならしむるを得たりと爲す。若し然らずして、之を激し之を壅がば、忽ち狂瀾怒濤を起さん。懼れざる可けんや。

人情は水のやうなもので、これを平かな波や穩かな流れに爲すといふことが、即ち人主の心得べきことで若しこれを激し、これを壅がば、忽ち大きな狂つた瀾や、怒れる濤を起して世の中を浸してしまふ。眞に懼るべきことであります。

凡處事。須要平平穩穩。至於駭人視聽。則事雖善。或傷於小過。

凡そ事を處するには、須らく平平穩穩なるを要すべし。人の視聽を駭かすに至れば、事は善しと雖も、或は小過に傷つく。

凡そ事を處理するには穩かに、心を平かにすることが必要であります。世の中には何でも人の耳目を駭かすやうなことをしなければならないやうに考へて居る人がありますが、それでは事は善くても、小さな禍のために折角の處理を誤まるやうなことが出來るものであります。

○

王政只是平穩。平天下平字可味。

王政は只だ是れ平穩のみ。平天下の平の字味ふ可し。

王道政治といふものは、たゞ平穩無事であるので、天下を平かにするといふ、此の平の字は、よく／＼味はふべきことであるので、別段變つたことでなく、これは大學に所謂『天下を平らかにするには、その國を治

上行へば下之に倣ふ

めるにあり』とあつて、それは特別なことでなく、『上、老を老とし、民孝による』とありまして、上に立つ者が年寄りを年寄りのやうに大切に扱つてゆけば、人民が自然に孝行の心を起してゆくのであるとしたのもこの意味であります。

○

此學不レ見二意趣一。咏二題風月一亦俗事。苟見二意趣一。料二理錢穀一亦典雅。

此の學、意趣を見ざれば、風月を咏題するも亦俗事なり。苟くも意趣を見れば、錢穀を料理するも亦典雅なり。

凡そ學問するのにも意趣即ち確りとした心の歸著點を見なければ、徒らに風月を詩に賦し、歌に咏んでも全く俗人の仕事にほかならないのであり、苟も學問に於いて確りとした心構へがあるならば、錢や穀物を取扱つて、穢ない勘定をしてゐるやうであつても、そこに高尚風雅なものが感ぜられるのであるといふのであります。

◎五倫と師弟

余嘗曰。五倫有二君臣一。無二師弟一。非レ無二師弟一。君臣卽師弟。今更思師不二特有二君之尊一。而有二父之親一。則父道。亦與二師道一通。長兄若レ父。則兄亦有二師道一。二人行必有二我師一。則朋友亦相師焉。夫教婦從。則夫亦師歟。是則五倫配合。無二適非二師弟一矣。

五倫に師弟は含まる

余嘗て曰く、五倫に君臣有りて師弟無し。師弟無きに非ず。君臣は卽ち師弟なりと。今更に思ふに、師は特に君の尊有るのみならず、而も父の親有れば、卽ち父道も亦師道と通ず。長兄は父に若へば、則ち兄にも亦師道有り。三人行けば、必ず我が師有れば、則ち朋友も亦相師とす。夫教へ婦從へば、則ち夫も亦師なる歟。是れ則ち五倫の配合、適くとして師弟に非ざる無しと。

自分は以前から五倫といふのには、君臣、父子、長幼、夫婦、朋友とあつて、師弟といふものがない。これは何故かといふと、君臣は卽ち師弟、君は師、臣は卽ち弟であるからだというたが、今更らに考へてみるのに、師たる者は君の貴いところがあるばかりでなく、また父の親しみがあるから父の道は師の道と相通じて居るのであり、また兄は父と同じやうなもので、これにも亦、師たるの道がある。それから『論語』に『三人行けば必ず我が師有り』とあるから朋友も亦、お互に師とすべきである。また夫婦の關係は夫が教へ、婦が從つてゆく。その夫にも亦、師たる道があるやうにも思はれる。かく見來ると、五倫の配合には何處にも師弟の關係があるのであるから別に師弟の目を立てられなかつたのであらうと思ふといはれたのです。

○

師嚴道尊。爲二師者宜二自體察一。如何是師嚴。如何是道尊。

師嚴にして道尊し。師たる者宜しく自ら體察すべし。如何なる是れ師の嚴か、如何なる是れ道の尊きかと。

『師嚴にして道尊し』これは前にも出ました『禮記』の語でありまして、人の師たる者が嚴格にして始めて、その教へるところの道の貴いのが知らるゝのである。このことは、人の師たる者は、宜しく充分に體驗し思察すべきところであるといふので、司馬溫公の『勸學の歌』にも、

子を養うて教へざるは父の罪なり。師道にして嚴ならざるは師の怠なり。父教へ師嚴にして學問ならざるは子の罪なり。

といふ言葉があつて、師たる者は嚴格でなければならないことは前にも屢々申しました。山崎闇齋先生や、淺見絅齋先生が嚴格にその子弟を教育されたといふことも既に話しました。徒らに子弟の歡心を得ようとすることは、師たる者の最も恥づべきところであります。

勸學の歌

○

物無心。以人心爲心。故人所贈之物。必與其人同氣。失意人贈物。物以失意爲心。豪奢人贈物。物以豪奢爲心。喪人贈物。物以喪爲心。佞人贈物。物以佞爲心。但有名之贈遺。不得不受。而其物與其心感通如是。則我有所不屑受。唯君父所賜。正人君子所贈。雖微物甚足敬重耳。

物には心無し。人の心を以て心と爲す。故に人の贈る所の物、必ず其の人と同氣なり。失意の人、物を贈れば、物も失意を以て心と爲し、豪奢の人、物を贈れば、物も豪奢を以て心と爲し、喪人、物を贈れば、物も喪を以て心と爲し、佞人、物を贈れば、物も佞を以て心と爲す。但だ名有るの贈遺は、受けざるを得ず。而も其の物の其の心と感通すること是くの如くなれば、我は受くるを屑しとせざる所有り。唯だ君父の賜ふ所、正人君子の贈る所、微物と雖も、甚だ敬重するに足るのみ。

物には心はありませんが、人の心を以て心とするもので、人が他に物を贈りますのを見ましても、その人と物とが自から同じ氣分になつてゆくので、失意の人が物を贈りますと、物に失意の氣分が溢れてをりますし、豪奢の人が物を贈ります時は、その物に豪奢な氣が現はれてをります。喪人――これは逃亡した人といふ意ですが、こゝでは公けに出られない日蔭者をも意味します。かういふ連中が物を贈りますと、物がやはりその心を現はして居るものであり、奸佞な人が物を贈りますと、その物が、やはり奸佞な氣分を現はしてをります。かくの如く人と物と感應しますが、名儀の正しい贈物は、これを受けなければなりません。物と人とが相通じて居りますから自分が受けることを快しとしないものもあるのでありますが、たゞ目上の人、君や父の贈つたものや、正しい人、立派な人格の人の贈つたものは、少しの物でもこれを大切にせなければならないといふのであります。

◎老人の誡

及其老也。戒之在得。得字。不知所指何事。余齡已老。因以自心證之。往

年血氣盛時。欲念亦盛。及今血氣衰耗。欲念卻覺較澹泊。但是貪年齒。營子孫念頭。比之往時。較濃。得字或指此類。不必指得財得物。人死生有命。今强覓養生。蘄引年。亦不知命。子孫福幸。自有天分。今爲之故意營度。亦不知天。畢竟是老悖衰颯念頭。此都是戒得條件。不知他老人。著做何想。

其の老ゆるに及んでや、之を戒むるは得るに在り。得るの字、指す所の何事なるかを知らざりき。余、齡已に老ゆ。因て自心を以て之を證するに、往年血氣盛なりし時は、欲念も亦盛なりき。今に及んでは血氣衰耗し、欲念卻つて較澹泊なるを覺ゆ。但だ是れ年齒を貪り、子孫を營む念頭、之を往時に比するに較濃やかなれば、得るの字或は此の類を指し、必ずしも財を得物を得るを指さじ。人は、死生命有り。今强ひて養生を覓め、引年を蘄むるも亦命を知らざるなり。子孫の福幸も、自ら天分有り。今之れが爲故意に營度するも、亦天を知らざるなり。畢竟是れ老悖衰颯の念頭にて、此れ都べて是れ得るを戒むる條件なり。知らず、他の老人は何の想を著け做すかを。

人間が老人になるに從ひまして、これを戒しめなければならないことは『得』といふことであります。これは『論語』に、

少の時、血氣未だ定まらず、これを戒しむるは色にあり。その壯なるに及んで、血氣最も多くして、これを戒むるは鬪にあり。その老ゆるに及んで、血氣既に衰ふ。これを戒むるは得にあり。

とある。此の『得』といふのは得ると貪るとであります。年寄りになると、血氣が衰へまして、精神も不足して物を求めようとする心が熾んになるものであります。諺にも、

男子二十にして戀を思ひ、三十にして名を思ひ、四十にして利を思ふ。

とありまして俗に老人の『死に欲』なぞといひ、死に近くに從つて欲の深くなるものだと申します。ソコデ一齋先生は自分も既に年が寄つたからこれを自分に試驗して見ると、その昔、血氣が熾んな時は、欲念もまた熾んであつたが、今は血氣が衰へて、欲念がかへつて薄らいだやうに覺える。たゞ年を貪り、長生きをしたいといふ氣が起つたり、或は子孫の計を考へたりすることは、これを若い時に比較すると、だん〳〵濃かになつて居るやうに思ふ。『論語』に得とあるのは、この類ひのことを指したので必ずしも財貨を得ようの、物を得ようといふのを指したのではなく、長生きをしたい、子孫を有福にしたいといふやうなことでありませうが、人間の生きる死ぬるといふのは天命であつて、今、强ひて養生を思うても、年を引き延ばすことは出來るものではありません。それを長く生きたいなぞ思ふのは天命を知らぬものであります。子孫の福も幸も亦天分があつて皆な定つて居るので、今更ら營度と計畫を立てゝ行つて見たとて、どうにもなるものではありません。ソンナことをするのは、矢張天命を知らぬからで、畢竟これ等は老いぼれて、心の亂れた者のすることで、總てこれは得を戒むる條件であると、自分は考へるが、他の老人連中は何んと思うてをられることであらうと、その感想を述べたのであります。

○

實言。雖二芻蕘之陋一。足二以動一物。虛言。雖二能辯之士一。不レ足レ感レ人。

實言は、芻蕘の陋と雖も、以て物を動かすに足る。虛言は、能辯の士と雖も、人を感ずるに足らず。

眞實の言葉は、芻蕘、卽ち田夫野人の卑しい者の語るところでも、人を感ぜしめることが出來るが。眞實のない虛言は如何に能辯で、堂々と喋られても、決して人を感ぜしめるものではないといふだけの意味です。

○

人當二自知一己才性有二短長一。

人は當に自ら己れが才性に短長有るを知るべし。

己れを知れ

人間たるものは當然自分の才能や性質に短所があり、長所があるといふことを知らなければならない。とかく人は自分の長所を知つて、短所を忘れ、自分のことは買被ぶつて、他人のことを割引きして考へる傾向があるものでありますから、よく〳〵自分の長所、短所を知らなければならないといふことを戒しめられたのであります。

○

白能受二衆采一。五色之原也。賁之極無レ色爲二白賁一。素以爲レ絢。白也。素二其位一而行。白也。素履之吉。白也。余嘗攷レ之。五色之原起レ於白。白之凝聚爲レ青。青之舒暢爲レ黃。黃之爛熟爲レ赤。赤之積累爲黑。黑之極至。又歸レ於白。生出流行。蓋亦如レ此。

白は能く衆采を受く。五色の原なり。賁の極、色無きを白賁と爲す。素以て絢と爲すは、白なり。其の位に素して行ふは、白なり。素履の吉なるは、白なり。余嘗て之を攷ふるに、五色の原は白より起る。白の凝聚せるを青と爲し、青の舒暢せるを黃と爲し、黃の爛熟せるを赤と爲し、赤の積累せるを黑と爲し、黑の極至は又白に歸す。生出流行すること、蓋し亦此くの如し。

五色循環

白い色は、よく、いろ〳〵の色彩を受け、これが五色の原になるものであり、賁卽ち飾りの極端なのは白い飾りであると謂はれてをる。素といふのも白い色で、これの上に絢爛なるいろ〳〵な色彩が現はれるのである。『君子は、その位に素して行ふ』と『中庸』の中にある素といふ字は、ほかの、いろ〳〵の飾りのない白であります。純白の白の履の良いと謂はれるのも、白だからであります。自から考へるところによると、五色の原は白から起つてゐる。白が凝り聚まつて青になり、青が暢々と廣がつて黃色になり、その黃色が充分に熟しますと赤になつてゆき。その赤が積重なると黑になり、黑の極り至るところは、また白に返へつてゆくのであるやうに白から出て、他の色が出來るのであると思ふ。これが何事も粉飾を避けて、飾り氣のない所に本心を置くべきことを言うたと見ることが出來るのであります。

活きた易

○

氣運有小盛衰。有大盛衰。其間亦迭相成倚伏。猶海水有小潮。有大潮。天地閉大抵不能逃數。卽活易也。

氣運に小盛衰有り。大盛衰有り。其の間亦迭ひに倚伏を相成すること、猶ほ海水に小潮有り大潮有るがごとく、天地閉大抵數を逃るゝ能はず。卽ち活易なり。

世の中の機運、卽ち廻り合せには小さな盛衰もあれば、大きな盛衰もあります。その間に亦、起つたり伏したりして居ることは丁度、海の水に小さな潮があり、また大潮があるやうなもので、大波のうちに小波があつて、それが繰返へされてゆくので、天地間のことは大抵この運命を免れることは出來ないものであります。これを知るのが活きた易であると考へるといはれたのです。

○

五穀豐歉。亦大抵有數。三十年前後。必有小饑荒。六十年前後。必有大凶歉。雖較有遲速。竟不能免。可不爲之豫備乎。癸巳春季筆。

五穀の豐歉にも、亦大抵數有り。三十年前後に、必ず小饑荒有り。六十年前後に、必ず大凶歉有り。較遲速有りと雖も、竟に免るゝ能はず。之が豫備を爲さゞる可けんや。癸巳春季筆す。

五穀の豐かなる年も、或は凶作の年も、また大抵、この廻合せの運命によるもので、三十年前後には、きつと小さな饑饉があり、六十年目位には、必ず大きな饑饉があるもので、それには少しの速い遲いはありますが、終に免れることは出來ないのであるから、平生充分にその準備をしておくことが必要であるといはれたので下に癸巳春季とあるのは、天保四年春の末のことであります。

○

三十年爲一世。百五十年爲五世。君子之澤。五世而斬。是盛衰之期限也。五百年有王者興。亦以氣運言。凡有意於世道者。不可不致察。

三十年を一世と爲し、百五十年を五世と爲す。君子の澤は五世にして斬ゆ。是れ盛衰の期限なり。五百年にして王者興る有りとは、亦氣運を以て言へるなり。凡そ世道に意有るもの、察を致さざる可からず。

三十年を一代と致しまして、百五十年を五代とするのが定則でありますが君子の餘澤といふものは大抵五代にして絶えてしまふものであります。これが盛衰の一期限であると見てもよいので、孟子は『五百年にして必ず王者の興るあり』と言ひましたが、これも、この機運をもつて言うたのでありませう。凡そ世の中のことに心を注ぐものは、この機運の變轉を察せなければならないといはれたのであります。實際、支那の歷史を見ますと、大抵五百年目毎に大きな變轉があるやうであります。堯舜から殷の湯王までが五百年、殷の湯王から周の武王までがまた五百年であるのであります。勿論多少の遲速はありますけれども、このことは

他の講義に於て歴代の興亡を話しましたからそれを見て戴きたいのです。

○

智仁勇

處一罪科。亦有智仁勇。公以忘愛憎。識以盡情僞。斷以決輕重。識。智也。公。仁也。斷。勇也。

一罪科を處するにも、亦智仁勇有り。公以て愛憎を忘れ、識以て情僞を盡くし、斷以て輕重を決す。識は智なり。公は仁なり。斷は勇なり。

一つの罪科を處斷しますのにも、智仁勇の三つが必要であります。公平に愛憎を忘れて、依怙贔屓なく、自分の知識を働かして、眞か僞かを充分に見分けて、これを判斷して、罪の輕い、重いを決めてゆく。この情僞を盡して見るのが識――智であります。愛憎を忘れてゆくところは仁であります。輕重を斷ずるところの斷は勇であります。

○

鷄鳴而起。人定宴息。門內肅然。書聲滿室。道行妻子。恩及臧獲。家無酒氣。廩有餘粟。豐不至奢。儉不至嗇。俯仰無愧。唯守清白。各有其分。如是亦足。

鷄鳴いて起き、人定にして宴息す。門內肅然として、書聲室に滿つ。道は妻子に行はれ、恩は臧獲に及ぶ。家に酒氣無く。廩に餘粟有り。豐なれども奢に至らず、儉なれども嗇に至らず。俯仰愧づる無く、唯だ清白を守る。各其の分有り。是くの如きも亦足る。

朝は鷄が鳴いて起きて、夜は人が靜まつてから宴息――卽ち眠りにつき、門の中は靜かに讀書の聲は部屋に充ちてゐる。自分の法卽ち規約や言ひつけは妻子の間にも行はれるし、その恩澤卽ち惠みは、召使ひの男女に及び家の中には酒の氣はないけれども、倉には餘つた穀物があります。斯く物が豐かであつても奢りに至らず、儉約はして居るが吝嗇に陷らず、仰いで天に愧ぢず、俯して地に愧ぢるところがなく、たゞ清廉潔白を守つて居るのがよいのである。人には各々その分があるが、かういふやうにすれば足りるといふべきであるといはれたのです。これは恐らく先生日常の生活狀態を書かれたのでせう。

○

戲言固非實事。然意之所伏。必露見於戲謔中。有不可揜者矣。

戲言固と實事に非ず。然れども意の伏する所、必ず戲謔中に露見して、揜ふ可からざる者有り。

冗談の言葉や、洒落の言葉は、固より眞實のことではないのでありますが、しかし心のうちにあるところのことが、自然その冗談や洒落のうちに現はれるものであつて、人間の心のうちのことは覆ひ隱すことの出來ないものであるといふのです。

◎一にして二なし

物有一而無二者。爲至寶。如顧命赤刀。大訓。天球。河圖。皆有一而無二。故謂之寶。試思己一身亦是物。果有二否。人不知自重而寶愛之。亦弗思之甚。

物は一有りて二無き者を至寶と爲す。顧命の赤刀、大訓、天球、河圖の如き、皆一有りて二無し。故に之を寶と謂ふ。試に思へ、己れ一身も亦是れ物なり。果して二有りや否や。人自重して之を寶愛することを知らざるは、亦思はざるの甚しきなり。

顧命の五寶

物は一つあつて二つないものを、所謂唯一無二の至極の寶とするので、昔、周の成王の崩ぜんとし群臣に命じて康王を立てしめんとせらるゝ時の事を書いた『書經』の顧命といふ篇に五つの寶がある。それに赤刀とて赤い鞘の寶劍、大訓とて三皇五帝の訓言を書いたもの、天球とて禹の得た玉で造つた球、河圖とて伏羲の時、龍馬の負うて河より出た圖で八卦の本となつたもの等は、皆な一つあつて二つなき至寶であるが、今此の我が一身も亦一つあつて二つなき至寶ではないか、それを自ら知らずに疎末にして、寶の如くに之れを大切にすることを知らぬのは、まことに思はざるも甚しいものだと、天下の至寶と此身を比し警めたのです。

處事平心易氣。人自服。纔動於氣。便不服。

事を處するに平心易氣なれば、人自ら服し、纔に氣に動けば便ち服せず。

凡そ事を處理するのに虛心平氣で、氣易くすれば、人は自ら心服するものであるが、若し纔かでも自分の爲めを圖るやうな氣が動きますれば、人は服するものではありません。

○

寬而不縱。明而不察。簡而不麤。果而不暴。能此四者。可以從政矣。

寬なれども縱ならず。明なれども察ならず。簡なれども麤ならず。果なれども暴ならず。此の四者を能くせば、以て政に從ふ可し。

政治の四要素

とかく寬大にしますと放縱に流れるものであります。寬大であつて、放縱にならないやうにしなければならないし、また明敏でありますと、とかく重箱の隅をせゝるやうな苛察になるものでありますが、明敏であつて、而も苛察でなくせなければならず、また物を簡略に致しますと、とかく粗略に流れるものでありますから、簡略であつて粗略に流れぬやうにせなければならず。果斷であると亂暴になるものでありますが、果斷であつて亂暴でないやうにといふ、此の四つをよくして、始めて政をすることが出來る、と數へあげられたのです。

○

人或有性迫切。好擔當事者。驅使之卻難。迫切者多執拗。不可擧全以委之。

宜割半以任之。

人、或は性迫切にして事を擔當するを好む者有り。之を驅使するは卻つて難し。迫切なる者多くは執拗なり。全きを擧げて以て之に委ぬ可からず。宜しく半ばを割きて以て之に任ず可し。

性急の人に對する注意

世には性質が迫切とせつかちで、物事を早合點をしたり、速く片付けることをのみ考へる人がありますがかういふ人は、兎角何事も自分でやりたがるものでありますからコンナ人を使ふのは、なか〳〵難しいものである。氣ぜはしい人は、多くは片意地で、一方に片寄りますからこれに全體を委せてゆくことは失敗を招く本であります。でありますからかういふ人には、物事の半分位を委せておいて、全體を託しないやうにする方がよからうと思ふといふのです。

○

事有大小。常斡旋大事者。於小事則蔑如也。今人毎區處小事。濟得後自喜。向人誇說。是見其器小。又見是人從前未曾下手於大事。

事に大小有り。常に大事を斡旋する者は、小事に於ては蔑如たり。今人毎に小事を區處し、濟し得る後自ら喜び、人に向つて誇說す。是れ其の器の小なるを見、又是の人從前未だ曾て手を大事に下さざるを見る。事には大きい、小さいがあつて、常に大きな仕事を取扱ふ者は、小さな事に對しては甚だこれを輕蔑致します。今の人は常に小さな事を、部分的に處理してをりまして、さうして自分で喜んで、また人に向かつて自分の仕事を自慢します。凡そ、この仕事自慢といふやうなことは、その人の器量の小さいのを現はしたもので、こんな連中はこれまで未だ曾て大きな事に手を下したことがないものであるといふことが出來ます。

○

似て非なる者

養望人似高。苛察人似明。圓熟人似達。輕佻人似敏。愞弱人似寛。拘泥人似厚。皆似而非也。

養望の人は高に似、苛察の人は明に似、圓熟の人は達に似、輕佻の人は敏に似、愞弱の人は寛に似、拘泥の人は厚に似たり。皆似て非なり。

名望を得ようとしてゐる人は、高潔に似てをりますし、苛察の人は明敏に似て居り、圓熟――事に馴れたる人は達人に似て居り、輕佻――輕はづみの人は敏捷に似てをり、懦弱――心弱く怠り勝ちの人は寛大に似てをり、拘泥――物にこだはり、なずんで居る人は着實のやうに見えるものであります。これらは皆な似て非なるものであります。

○

與人語。不可太發露過傾倒。只要語簡而意達。

人と語るには、太だ發露して傾倒に過ぐ可からず。只だ語簡にして意達するを要す。

人と話をするのには、何事も開け放しに言つて、心を傾け過ぎてはならない。たゞ言葉が簡單で、その心が先方に通ずるやうにすればよいのであるといはれたのです。

◎急ぐから徐ろに

火急作二文書一。須二必先立一案起一稿。而後徐更寫。卻是成速。無レ悞。

火急に文書を作るには、須らく必ず先づ案を立て稿を起して、而る後、徐に更め寫す可し。卻つて是れ成ること速かにして悞無し。

急ぐからゆつくりやれ

急いで文章を作るのには、必らず靜かに、その案を立てゝ、それから原稿を起して、その後、徐ろに改めて、寫して出すやうにするがよい。これがかへつて事を速かに爲して過りなからしめる原であります。毎度申しまする『急がば廻はれ』で、急ぐことだからと粗略にしますと、その粗略から過りを引起して、かへつて事が遲れるやうなことがある。昔の名將は急ぐことであるから、ゆつくりやれよ、と、常に下々に言ひ付けられたといふ話があります。これは文書ばかりでなく、何事にも、充分に注意せなければならぬことと思ひます。

○

行遠傳後。莫如簡牘。雖一時應酬文字。必須慎重。不可苟且。寫訖審讀一過。而後封完。余嘗爲人作硯蓋銘。曰。言語或譽。猶無形迹。簡牘弗慎。追悔匝革。謂此意也。

遠きに行き後に傳ふるは、簡牘に如くは莫し。一時應酬の文字と雖も、必ず須らく慎重して苟且なる可からず、寫し訖りて審讀一過して、而る後封完すべし。余嘗て人の爲に硯蓋の銘を作る。曰く、言語或は譽つとも、猶形迹無し。簡牘慎まずんば、追悔すとも革め匝しと。此の意を謂ふなり。

一齋先生の硯の銘

遠い所へ此方の音信を通じ、また後世に傳へ遺すのは手紙または書き物に過ぎたものはありません。であるから、假令一時の往復の文字でも、必ずこれを慎んで、假初めにしてはならないのであります。書き終つたら、靜かに一度讀んで、その後に封をするがよろしい。自分――卽ち一齋先生は嘗て硯の蓋の銘を作つて『言語は譽（愆と同じ意味）つても迹がないが、しかし手紙は慎んで書かねば、後悔しても改めることが出來ない』といふことを書いたが、この意味を言ふに外ならぬといふのです。

○

攻者有レ餘。守者不レ足。兵法或其然也。余則謂守者有レ餘。攻者不レ足。以不レ攻攻之。攻之上也。

攻むる者は餘り有りて、守る者は足らず。兵法或は其れ然らむ。余は則ち謂ふ、守る者は餘り有りて、攻むる者は足らずと。攻めざるを以て之を攻むるは、攻むるの上なり。

孫子といふ兵法の書物に『勝つべからざる者は守りなり。勝つべき者は攻むるなり。守れば卽ち足らず、攻むれば卽ち餘る』といふ言葉があります。今はその言葉をもつて來て言はれたので、攻擊する方には餘力があるが、守るものには力の足りないものがあるといふのです。兵法はさうであるかも知れぬが、自分は守る方に餘裕があつて、攻むる者には力の足らないものがあると言ひたい。若しそれ、攻むることなくして、これを攻むると同じ效果を擧ぐればこれは攻むるの最も上々のものであるとするといはれたのです。

○

事動於不得已。動亦无悔。在革之夬曰。已日乃革之。是也。若其容易紛更。取快一時。雖外面如美。後必噬臍。爲政者所宜戒。

事已むことを得ざるに動かば、動くとも亦悔无からん。革の夬に之くに在り。曰く、已みぬる日に乃ち之を革むとは是なり。若し其れ容易に紛更して、快を一時に取らば、外面美なるが如しと雖も、後必ず臍を噬まむ。政を爲す者の宜しく戒むべき所なり。

凡そ事を爲すのに輕擧妄動せず、動かざるを得ざるに至つて、初めて動くといふ愼重の態度を以て之れに

對して行けば、動いたとて後悔するやうなことはないものであります。されば『易經』に革の卦が變じて夬の卦になる時の言葉に『已ぬる日に之れを革む、征けば吉にして咎なし』とあるは此の事をいうたのであります。若し眞に未だ已むを得ざるの時機でもないのに、輕るはづみに變更するやうなことをやつて一時の愉快を取つては一時は美擧のやうであつても、後には屹度臍を噬むで後悔することのあるものであるから、爲政者たるものは充分に戒めねばならぬことであるといふのであります。

臍を噬むといふのは、『左氏傳』の莊公六年の條に『鄧國を亡ぼす者は必らず此人なり、若し早く圖らざれば後、君齊を噬まむ』とありまして、杜氏の註には『腹齊を噬むが若く、及ぶべからざるに喩ふ』とありまして、後悔しても及ばぬことをいうたのです。

○

敬忠。寛厚。信義。公平。廉清。謙抑。六事十二字。居官者所宜守。

敬忠、寛厚、信義、公平、廉清、謙抑の六事十二字は、官に居る者の宜しく守るべき所なり。

これは六事と十二字とをもつて、官にをる者の守る點を示されたのであります。敬忠とは、君を恭ひ、忠義を盡すこと。寛厚とは寛大にして、而も落着きのあること。信義とは誠で正しいこと。公平とは公明正大で、私心のないこと、廉清とは貪る心がなくして、心の淨きこと。謙抑とは、へり下ること。この六つが官吏たる者の守るべき要點であると云ふのです。

○

人主之學。在智仁勇三字。能自得之。不特終身受用不盡。而掀天揭地事業。可垂憲於後昆者。亦斷不出於此。

人主の學は、智仁勇の三字に在り。能く之を自得せば、特り終身受用して盡きざるのみならず、而も掀天揭地の事業、憲を後昆に垂る可き者も、亦斷じて此れを出でじ。

人の君たる者の學は智仁勇の三字にある。即ち智者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は恐れずと、よくこれを自分に體得すれば一生涯、この三つを用ひて萬事を處置し得るみならず、掀天揭地――天を差上げ、地を高くあげるといふやうな、大きな仕事をして、その手本を後世に殘すことが出來るのも、斷じてこの智仁勇の三つに外ならないのであります。この三つは政治の根本であり、また人倫の要目であります。この事は、前にもしば〳〵出て居りますから、こゝには略します。

政治の根本

◎和漢の南北朝

我邦南北朝。與漢土南北朝。事體迥別。漢土則南北異姓角立。又各相簒奪。眞是判爲南北矣。我邦則皇統一姓。宸居雖分南北。而皇胤實無南北。但以神璽所歸。爲順而已。烏得與漢土一例視之哉。

我が邦の南北朝は、漢土の南北朝と、事體迥に別なり。漢土は南北に異姓角立し、又各相簒奪せしかば、眞に是れ判れて南北たり。我が邦は、皇統一姓にして、宸居は南北に分つと雖も、皇胤は實に南北無し。但だ神璽の歸する所を以て順と爲すのみ。烏んぞ漢土と一例に之を視るを得んや。

支那の南北朝

今日に於ては吉野朝時代として統一的に呼ばれて居りますが、我が國に於きましても久しく南北朝時代と呼ばれた南北兩朝分立の時代があり、支那にも亦南北朝時代といふのがありまして、學者の中には往々此の兩國の南北朝を同じやうに見るものがあるから、それを注意せられたのが此の文であります。

漢土即ち支那の南北朝時代と申しますのは、學者によつて多少見方に相異はありますが、大體、魏が北涼を滅して北方の統一成つて南方の宋と對立いたしました皇紀一千九十九年、人皇十九代允恭天皇の頃から隋が陳を滅ぼし南北を統一いたしました皇紀一千二百四十九年、即ち人皇三十二代崇峻天皇の頃に至る百五十年の間で、其の間、南北に分立して其の統治の領域を異にし、支那大陸が二國に分裂して、北方に於ては、北魏、東魏、西陳、北齊、北周、隋の六朝が興亡し、南方に於きましては、宋、南齊、梁、陳の四朝が興亡いたしましたので、兩朝共に二十餘帝を出し、しかも其の中帝位を全うせるもの僅に半數に足らざる有樣で、簒奪弑逆相次ぎ革命交替實に甚しきものがあつたのであります。

日本の南北朝は北條高時が後醍醐天皇に對して一時光嚴院を擁立いたしましたことがありますが、それは二年にして建武の中興となりましたから、南北に皇居即ち御所が分れたのは足利尊氏の光明院を擁立し、後醍醐天皇の吉野に遷幸ましました延元元年、皇紀一千九百九十六年から、同二千五十二年、後龜山天皇の神

日本の南北朝

器を後小松天皇に傳へられた南北一統までの五十三年間で、南といひ北といふも共に一系連綿たる皇胤であつて支那の如く血統の異つたものの角の如くに双方に立つたのでもなく、皇居こそ南北兩處に分れたれ、支那の如くに其の國が分裂したのでもなく、『宸居南北に分るゝといへども皇胤南北なし』で、たゞ我が國に於ける皇位繼承の御しるしたる三種の神器の何れにあるかないかで、正閏が定められたので、此の根據により南朝を正とし北朝を閏とするの說、古來志士の間に唱へられ、終に明治四十四年以來文部省に於ても國史上に於ける南北朝の名稱を廢して吉野朝と改むることとなつたので、全く支那の南北朝とは趣を異にするものであります。

支那の正閏論

勿論支那に於きましても、其の實は禪讓放伐でありましても、いづれを正とし閏とするかの說はあるのでありますが、其の實は司馬光が『資治通鑑』に於て、

宋魏以降、南北分治し、各國史あり、互に相排黜す。南は北を謂ひて索虜と爲し、北は南を謂ひて島夷と爲す。朱氏唐に代り、四方幅裂、朱邪、汴に入る。之れを窮新に比べ、還曆年紀、皆な棄てゝ數へず

これ皆な私己の偏辭にして大公の通論にあらざるなり。臣愚誠にして前代の正閏を知るに足らず。竊かにおもへらく、苟くも九州（支那全部）を合して一統たらしむる能はずして皆な天子の名あり、而かも其の實なし。華夏仁暴、大小强弱、或は時に同じからず。要は皆な古の列國と異るなし。豈に獨り一國を尊奬して之れを正統といひ、其の餘は皆な僞僭となすを得んや。

といへる如く、全く正閏を以て論ずべからざるものであります。

かくの如く南北朝の名は同じであつても、到底同視すべからざるものであるといはれたのです。

○

本邦事跡。儒者多罔。是衣服在躬。不知其名也。而可乎。

本邦の事跡は、儒者多く罔し。是れ衣服躬に在りて、其の名を知らざるなり。而も可ならんや。

我が邦の歷史上の事跡を德川時代の儒者は知らないものが多かつたのでありますから今の儒者連中は多くは知らないといひ、これは丁度自分の身體に衣服を着てゐながら、その名を知らないのと同じやうなものである。これで良いことであらうかと咎められたので、實際當時の儒者達が漢籍を重んじまして、支那の學問を先にするために、日本の歷史や、國體のことを知らなんだので、先生が憤慨してこの言を爲されたのであると思ひます。

○

余近爲兒課唐書。昔嘗一過。今則大半忘。如讀未見書。偶記一二在胸間者。宛如逢故人。太可喜。劉書雖詳而瑣猥。不如歐宋之爲簡淨。茫鑑宜與溫史唐紀併讀。可也。我邦古昔典章。蓋資諸隋唐者不少。故軌範在此。鑑戒亦在此。不厭熟讀。

余近ごろ兒の爲に唐書を課す。昔嘗て一過せしが、今は大半忘れて、未見の書を讀むが如し。偶一二を記

して胸間に在る者は、宛も故人に逢ふが如く、太だ喜ぶ可し。劉書詳なりと雖も而も瑣猥なり。歐、宋の簡淨なるに如かず。范鑑は宜しく溫史の唐紀と併せ讀むべし。可なり。我邦古昔の典章、蓋し諸れを隋、唐に資する者少なからず。故に軌範此に在り。鑑戒も亦此に在りて、熟讀するを厭はず。

近頃自分は子供のために唐書を讀まして居る。これは昔一度讀んだものであるが、今は大かた忘れてしまつて、殆んどまだ讀まない書物を讀むやうな氣がする。偶々一つ二つ覺えて居て、胸の中にあるものがあると、古い友人に逢つたやうな氣がして、甚だ嬉しく感ずる。この唐書にもいろ／＼なのがあつて、劉氏の書いた『唐書』は、詳しいことは詳しいが、少し煩はしい。やはり歐氏、宋氏の拵へた『新唐書』の簡潔であるのに如かない。こゝに范鑑とあるのは宋の范祖禹の撰した『唐鑑』といふ書物で、これは溫史――卽ち司馬溫公の書かれた『資治通鑑』の唐紀と一緒に讀むがよいと思ふ。日本の國の昔の法律や規則は、隋、唐にとつたものが多いのであるから、その手本卽ち軌範となることも、鑑戒となることも亦、隋、唐の時代にあるのであるから、充分熟讀せなければならぬ事であると云ふのであります。

○

宋明二史。事跡人情。於今爲近。但卷帙浩瀚。能抽其要處讀之可。

宋、明の二史は、事跡人情、今に於て近しと爲す。但だ卷帙浩瀚なれば、能く其の要處を抽きて之を讀まば可ならむ。

宋と明との二つの歷史は、その事實や人情が今に近いのであるから、非常に親しみ易いが、たゞ宋史は四百九十六卷、明史は三百三十六卷といふやうに、非常に大部なものであるから、よく要所を拔いて、これを讀むのがよからうと思ふ。

◎朱子の詩文

朱子以經學掩文章。有德者必有言。如朱呂二家。眞是能文。

朱子は經學を以て文章を掩ふ。德有る者は必ず言有り。朱、呂二家の如きは、眞に是れ能文なり。

擊壤詩。道學之香山也。耐警醒人。宜著意讀。

擊壤の詩は、道學の香山なり。耐く人を警醒す。宜しく意を著けて讀むべし。

朱文公詩。實見性情之正。誦之似韋柳。而意味自別。

朱文公の詩は、實に性情の正を見る。之を誦するに韋、柳に似て、而も意味自ら別なり。

此の三則は朱子の詩文に就て云はれたので、此の人のことは尙ほ後にも話しますが宋學の大家で經學に通じてをられたものでありますから、それをもつて文章を充してをられます。卽ち經學をもつて修められたる道德が、その文章に現はれてをるので、この朱子や呂東萊の文章の如きは眞に良き文章といふべきである。また擊壤集の詩は、道學者のうちの白樂天とも云ふべきものです。大いに人を戒め覺ますところの句が多い

のであります。氣をつけて讀むがよろしい。こゝに香山とあるのは白樂天の號であります。

先きに言うた朱子の詩は經學から出て居りますから、性情の正しいところを見ることが出來るのである。これを讀んでみますと、恰も唐の章應物や柳宗元の詩と似て、意味は別なものを見るのであるといはれたのです。

◎言語と文章

言語文章。一也。文宜レ師レ經。辭尚二體要一。周公也。辭達而已。孔子也。

言語文章は一なり。文は宜しく經を師とすべし。辭、體要を尚ぶは周公なり。辭達するのみは孔子なり。

言語と文章とは一つでありますが、文章はよろしく經書を手本とした方がよろしい。『書經』には『辭、體要を尚ぶ』と周公が言はれてをります。言葉は主として體を練るやうにと言はれたのであります。孔子はまた『辭、達するのみ』言葉は意味が通ずればよいと言はれてをります。これらは皆な文章の師とすべき言葉であると思ひます。

文章の師

先草創。次討論。次脩飾。最後潤色。鄭國辭命之精密。不二但取二數賢之長一。於文章鍛錬之法。亦宜然。

先つ草創し、次に討論し、次に脩飾し、最後に潤色す。鄭國辭命の精密なること、但だ數賢の長を取るのみならず、文章鍛錬の法に於ても亦宜しく然るべし。

文案の順序

『論語』の憲問篇に昔、鄭の國では諸侯と交る辭命、即ち外交文書を作るのには、先づ裨諶といふ性質が沈着でさま〳〵の考へを立てる大夫が先づ艸稿を作つて大略の大案を創め、次で之れも大夫で故實に通じ是非の論議に達して居る世叔といふ人が故實を討ね調べて其の是非を論じ、次ぎに文辭に熟した行人即ち使者の官たる子羽といふ人が、之れを修飾し、さて最後に東里といふ所に居る子產が更に之れに潤色していろつやをつけるといふ順序で、頗る用意の周到なものがあつたといふことが出て居るが、これは鄭の國で辭命を作るのにかく四人の長所を取つて精密にしたことを示すばかりではない。文章を鍛へ錬る法も亦此の通りに最初に草案を作り、それから其の構想を吟味し、次ぎに之れを修飾し潤色するがよいと作文の順序を示されたのであります。

私は曾て初學の人のために、作文の順序を說いて、作文は猶ほ家を建築するが如く、最初に大體の設計を作し、次ぎに木材を組立て、それから壁を塗り障子襖を入れ、最後に家具調度を配列して住みよい家を作るやうにせねばならぬと申しましたが、これも亦草創、討論、修飾、潤色の順序と同じことだと思ひます。

詩在二言志一。如二離騷陶詩一。尤能言二其志一。今之詩人。詩與レ志背馳。如二之何一。

詩は志を言ふに在り。離騷、陶詩の如きは、尤も能く其の志を言へり。今の詩人は、詩と志と背馳す。之を如何せん。